
大嘘エッセイ「お料理の合間に」

谷津矢車

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大嘘エッセイ「お料理の合間に」

【Nコード】

N2834F

【作者名】

谷津矢車

【あらすじ】

大小路マリリンという架空のお料理研究家による初エッセイ。“ほんのりと語られる彼女の言葉の行く先にあるのは、笑いか、それとも涙か!?”（帯の惹句より）……架空の人物のエッセイである以上、このお話は小説なのです、きつと。

目次・帯など

大小路マリリン (Okouji Maririn)

本名。既婚の35歳。彼女が運営するお料理ブログ「大小路マリリンのお料理日記」が、アルファブログに贈られる賞・「ランドネット賞」、2000X年度銀賞、2010X年度金賞に輝く。その独特の、“ほんのり系”毒舌キャラクターと確かな料理の腕で以って、テレビ・ラジオの出演(2010X年現在、レギュラー3本を抱える)や、料理本の出版など、多方面での活躍を見せる。

本作は、著者初のエッセイであると同時に、著者初の文庫化エッセイである。

目次

「前書きにかえて この本について」	p、4
「“大小路マリリン”という名前について」	p、20
「母について」	p、32
「夫について」	p、48
「子供について」	p、78
「大小路マリリン風・料理具の選び方」	p、86
「友人について」	p、98
「TV・ラジオ出演について」	

p、128

「ブログについて」

p、140

「ブルーデーについて」

p、144

「父について」

p、148

「“料理”について」

p、172

「あとがき・変わったこと、変わらなかったこと」

p、176

「文庫版あとがき・さらに変わったこと」

p、178

< 帯の文章 >

あの人気タレント、初めてのエッセイ集！

“ほんのり系”という言葉を生み社会現象にもなったお料理研究家・小路マリリンによるエッセイ、待望の文庫化！ほんのりと語られる彼女の言葉の行く先にあるのは、笑いか、涙か！？

「なんかというか、人に歴史ありですね。ほんわかと生活なさっているように見えて、実は波乱万丈なんですネ、マリリンさん（笑）」

― 財津晴人（評論家）

前書きに代えて・この本について【1】

この本を手にとられた皆様、初めまして。私、大小路マリリン、と申します。

東京の片隅で、しがない主婦業をしています。

え？ 「しがない主婦」が、エッセイなんて出版できるわけないだろ？」ですって？ いやいや、それは主婦の方々に失礼つてものです。主婦って仕事は家において、会社という総務部みたいな役割を負っていると思うのですが、なぜか会社の総務部ほどには権力もステータスも無い様です。それが、不思議で不思議で仕方がありません。……と、能書きを垂れておいてなんですが、確かにご指摘の通り、ただの主婦がエッセイを出版するというのは、出版界の現状からすればちょっと奇異な話です。そんなわけで、今回は前書きに替えまして、私がエッセイを書くまでの出来事を説明したいと思います。

実は私、3年前までは、本当に普通の主婦でした。それこそ、朝ごはんを作って夫を仕事に送り出したあと、美味しいせんべいをバリバリ食べながらワイドショーを見たり、“掃除機で出来る！ 簡単エクササイズ！”というテレビ番組に触発されてヨガよりも難解な格好で掃除機をかけたり、近所の主婦仲間と道の真ん中でゲラゲラと笑い合うような生活を送っていました。夫も優しい人ですし、しっかり稼いでくれる人なので特に不満は感じていませんでした。けれど、やっぱり主婦業というのはヒマでした。……いえ、語弊がありますので一応言っておきますが、主婦って、私が言うほどにヒマなものではありません。え？ 前後の文章がえらく矛盾している、ですって？ いえ、矛盾しているわけではありません。主婦、という役割は、仕事がまるで水切りのようにタイムスケジュールの帯上にポン・ポン・ポンとあり、その隙間にヒマが生まれてしまう

もののなのです。何もしないには長いのですが、何かをするには短い、そんな時間がどうしても生まれてしまうのです。

そこで、私は最初、夫に食べさせる夕飯に、ものすごく手を加えるようになりました。

色々なお料理の本を読み潰して実践して、ああでもないこうでもない、と夫のためにお料理を作り始めたのです。こう書くと、「あらあら、いいお嫁さんじゃない」と褒められそうですが、実は私の暇つぶしでしかないのです、あんまり褒められたものでもないと思います。

最初は夫も私の料理をいぶかしみました。夫曰く、「いきなり夕食が豪華になったもんだから、何かあったのかなと思ったよ」とのことですが、別になんの意図もありませんでした。言うなれば、暇つぶしでした。でも、夫の反応がえらくいいもので、こっちも調子に乗ってしまい、どんどん私の料理に対する情熱が深まってしまったのです。

ここまでだったら、私はただの主婦として過ごしていたはずでした。

けれど、転機は何の前触れなくやってきました。

私の友人に、Y子さん、という人がいます。夫の友人の奥さん、という、本来ならあまり親しくなることもないはずの関係なのですが、家が近いことや共通の趣味があったこと、また、偶然同い年だったこともあり意気投合し、夫抜きでも会うような関係になっていました。

その人が、ある日私の家に遊びにいらしたときに私のお料理を出す機会があり、食べてもらったのです。するとY子さん、私の料理を一口食べるなり言いました。

「ねえ、この料理のレシピを教えて！」

「どうやら、私の作った“昆布のおひたし”がいたくお気に召したようでした。これこれこういう風に作ると美味しく出来るのよ、と説明してあげると、Yさんは難しい顔をして、うーん、と唸りま

した。私には、卓の上に置かれた彩りの花を見ているように見え
ました。

「アンタ、すごいわね」

そして彼女は矢継ぎ早に私に提案してきました。

「ねえ、あなた、ブログを立ち上げない？」

正直、この頃、ブログなるものをまるで知りませんでした。と、
いうか、未だによく判っていません。一度意味を知りたくて、“イ
ンターネット版の百科事典”を謳う某サイトで検索してみたのです
が、よく要領を得ませんでした。ここで私が言いたいのは、私はI
T関係の情報に疎い、ということです。

きつと首を傾げる私に呆れたのかため息をついて、Y子さんは簡
単に説明してくれました。

「ブログっていうのは、WEB上で自分の意見を表明して、それを
ストックしておく場所の事。外国では、主に時事ネタに対して意見
を書くらしいんだけど、日本では日記として使っている人が多いわ」
彼女の言葉の前半については意味が判りませんでした。後半に
ついては判りました。どうやら、ブログというのは電脳世界の日記
のようなものだ、ということらしいのです。

私は最初断りました。―これに関しては今でもそうですが―、お
料理なんていう手の込んだものが好きな割に、日記に日常を書き残
すということが、とんでもなく苦手なのです。そもそも、文章とい
うものを書きなれていない私にとって、何も書かれていない紙に一
文字を書き入れるのがたまらなく怖いのです。それに、日記に書き
残したいようなドラマティックなことって、毎日起こらないもの
です。つまり私は、「日記」という言葉にアレルギーを起こしてい
たのです。

その旨を話すと、Y子さんは笑いました。

「平気平気。だって、あなたの日常を書くわけじゃないもの」

え？ 日常を書かない日記？ どういうことでしょうか。

彼女は続けました。

「あなたのお料理のレシピを紹介するブログよ」

ああ。思わず、私は手を打ってしまいました。彼女は私の出した昆布のおひたしをバクバク食べながら、その合間に水を飲み（昆布のおひたし、けっこう塩辛いんです）、さらにその合間に続けました。

「だって、こんな美味しいものを……バクバク……旦那さんが食べちゃうだけで終わっちゃうなんて……ごきゅっごきゅ……絶対におかしいわ……バクバク……」

言葉の途中に出た「バクバク」だの「ごきゅっごきゅ」だのが、食べ物を食べたり飲物を飲んだりするオノマトペであることは言うまでもありません。

「でも、ブログなんてもの、お金がかかるんじゃないの？」と私は無知丸出しな質問を返してしまいました。すると彼女は私のＩＴ方面への知識の欠如を最初から織り込み済みなのか、まるで呆れた様子も見せず、別にお金なんて必要じゃないわ、ただ、登録するときにメアドと個人情報の幾つかを申告する必要があるの、と箸をまるで指揮者のように振りながら教えてくれました。あ、あとはインターネットをつなげるパソコンが必要だけど、と彼女は付け足しました。

そういえば、と私は思い出しました。

実は、リビングに使っていないパソコンがあったのです。私も夫も、新しいものの好きの割にこらえ性がない、というどうしようもない性格の二人組ですので、結婚したときにパソコンを買ってあったまま放っておかれたのです。しかも、意味もわからないままにインターネットをつないでいました。

ともかく、そんな机の肥やし及び埃まみれの箱になっていたパソコンがあったことを思い出し、それをＹ子さんに話したのです。すると、彼女は瞳を輝かせました。

「なら、出来るじゃない！　よし、じゃあ、善は急げ、よね！　で、どこ？」

Y子さんには、どうにも強引なところがあります。でも、誤解しないで欲しいのは、彼女の強引な性格は常に、人の行く手を開くためだけに存在するのです。決して、自分のためにその強引さは使われません。どうやら彼女は、そういう損な生き方をしているようなのです。

それを知っている私は、Y子さんをパソコンのあるリビングに通しました。

「どこどこ？ あ、あれ？ ……うわあ、埃まみれだね」

何年前に触ったのかさえ覚えていないパソコンは、もうその元の色さえもわからないほどに埃が溜まっていました。キーボードのキーの隙間に、まるで淡雪のように埃が積もっていましたし、画面にも埃がたくさんついていました。

結局その日は、パソコンの掃除に費やされました。けれど、キレイにしてみるとまるで新品のようになりました。ピカピカに輝くパソコンの筐体を眺めて、「ああ、今日もいい仕事をしたなあ」と額の汗を拭いた頃、Y子さんはパソコンの前に椅子を持ってきて座りました。

「ちよつと！ ここからが本番なんだから！」

そうでした。本番は、ここからだつたのです。

お恥ずかしい話なんですが、実はこのとき、私はパソコンの起動の仕方を忘れていました。そもそもパソコンなるものに興味なく、まるで現代人の義務であるが如くにパソコンを買い求めたもので、その使い方なんて、包丁の使い方とか圧力鍋の使い方ほどに興味の持てるものではなかったのです。

けれど、持ち主さえその使い方が判らないパソコンを、さも当然の事のようにY子さんは操り始めました。その合間に、「まったく骨董品か！ ってくらいに古いバージョンだね」とか、「ああ、反応が遅い！」とか、単語の意味は判るものの、まるで意味の取れないセンテンスを喋っていたのが印象的でした。

そして、マウスやらキーボードやらをまるで機織機で布を織る人

のようにちゃっちゃかと動かし、最後にエンターキーを押したところで、私に振り返りました。

「さ、ここ、オススメのブログ」

彼女がこうして示してくれたのが、今現在私が運営しているブログ「大小路マリリンのお料理日記」を開設しているところでした。

結局、彼女の薦めるがままに、そのブログを開設することになりました。メアドも持っていなかったのですが、同時にメアドも取得して。

こうして、今まで遠い世界だった、ITの世界に足を突っ込む事になったのです。

もちろん、インターネット（さらに言えばパソコン）初心者の私にとっては、文字1語、文章1センテンスを書くにもY子さんの指示を仰ぐような勢いでした。Y子さんはちょっと呆れ気味でしたが、かなり根気よく教えてくれたおかげもあり、最初は殺風景だったブログも、写真を乗つけることが出来るようになっていったり、リンクを張ったり、レイアウトをいじったり出来るようになっていきました。

前書きに代えて・この本について【2】

当然、最初の頃はまるで家庭科の教科書のように殺風景（この表現は、家庭科の教科書に失礼でしょう。むしろ、当時の私のブログは、家庭科の教科書よりもはるかに殺風景でしたから）だった私のブログ「大小路マリリンのお料理日記」も、やがて見るに耐えるような作りになっていき、そしてそのうち作った本人でさえ納得できるような、我ながら素敵なブログへと変貌していました。

もちろん、そのころも生活は変わりませんでした。

夫の食事を作る。そして、夫がそれを食べる。夫の喜ぶ顔を見る。そして私は幸せになる。その生活のスパイラルは、まるで変わっていませんでした。

けれど、新たな習慣も加わりました。

夫の食事を作る際に、合間を見てデジカメで写真を撮るようになりました。また、これだけは夫への負担になってしまったのですが――夫にレビューを書いてもらうようにしたのです。そうして得た“収穫”を、ブログにアップする。

そうして生活するうちに、私のブログは少しずつ盛況になっていきました。

「美味しかったです」「彼氏に作ったところ、本当に彼氏が喜んでくれました。マリリンさん、ありがとうございました」「結婚記念日にかみさんに感謝を込めて料理を作ろうと思いついたのだがイメージに合うようなレシピが見つからず難儀していたところ、あなたのブログのおかげで助かった」などのお言葉が、次第にコメント欄に残されるようになったのです。そういうお褒めのコメントと共に、ごく一部ではありますが汚い言葉の連呼や、よく意図の判らないことを書き残す方もいました。Ｙ子さんに聞いてみると、「そういう人は、“荒らし”っていう人たちだから、反論とかをせずに削

除するかシカトを決め込みなさい」と言われました。けれど、やっぱり「死ね」とか書かれてしまうとやっぱり沈んでしまいますし、「不味いんだよバカ」と書かれると責任も感じてしまうものです。パソコンの画面を眺めながら、沈んでしまったことも一度や二度ではありませんでした。けれど、私のレシピを褒めてくださった方、応援を下さった方のコメントを思い出しながら、更新を続けていたのが実状と言えます。

そうしてブログを開設して1年が経ったところ、不意に私の身边があれだけなくなってきました。

ある日、私のブログのコメント欄に、こんなコメントがあったのです。

“マリリンさん、ご存知ですか？ マリリンさんのブログが「ランドネット賞」に入賞したんですよ？”

「は？」

パソコンの前で、何のことだか判らず首を傾げ、コチーン、とまるで氷漬けになったマンモスのように固まったのを今の事のように覚えていきます。けれど、そんな私を溶かしたのは、一本の電話でした。

ピリリリリ！

家の電話でした。思わず取ると、それはY子さんでした。電話口の向こうの彼女は、普段物事に動じない彼女には珍しく興奮しているようでした。

『ね、ねえ！ アンタ！ ランドネット賞って知ってる！？』

まただ、と思いました。ランドネット賞なるものがまるでわからないので、どうリアクションを取っていいものか分からなかった私は、むしろY子さんの驚きを見て、ああ、かなり大事なんだな、ってことを理解したくらいでした。

彼女が興奮気味に説明したところによると、「ランドネット賞」というのはその年から始められた賞で、優れたアルファブログに贈られる賞だということです。でも、私はアルファブログなるものが分

からなかったので、首を傾げるばかりでした。きっと、私が首を傾げていることをわかっていたのでしょう、Y子さんはアルファブログの説明をしてくれました。

『アルファブログっていうのは、人気があって、その上で他のブロガーたちに大きな影響を与えたブログのことよ！』

ほう、人気があって、さらに他のブロガー——要はブログを利用したり閲覧している人たちですが——に影響を与えるブログねえ……、とY子さんの言葉を咀嚼してから、ようやくその言葉の持つ意味に思い至りました。

え？ 私のブログが、アルファブログを表彰する賞、ランドネット賞に輝いた！？

『そうよ！　ようやくわかったの？　アンタのブログが、アルファブログって認められたわけ！』

そう言われても、まるで実感が持てませんでした。とにかく私の頭に去来していたのは、“賞”ってことは、何か副賞でもあるのかしら”という計算でした。

けれど、ものすごい形で副賞はやってきました。

どうやら、ランドネット賞自体は名誉賞のようなものらしく、副賞はおるか賞状さえ贈られることはありませんでした（一応書いておきますが、別に賞状を催促しているわけではないですよ。念のため）。別にランドネット賞を取ったからといって、何が変わることも思っていませんでした。それに、私のブログは当時、銀賞を取ったに過ぎませんでしたし。

でも、ランドネット賞の受賞は、私のブログに確かな変化をもたらしました。

ブログの来訪者数が、うなぎのぼりになったのです。

それまでは一日に500くらいのアクセスだったものが、気づけば万単位に跳ね上がりました。どうやら、ランドネット賞の受賞は、こういう形で旨みがあったようなのです。どうやら、女性向けの雑誌などにも「人気料理ブログ」と銘打たれて紹介されたいです

し、ネットの世界でも私のブログを紹介してくださる方が増えたようでもあります。今にして思えば、ランドネット賞の受賞は、私のブログを電腦世界という世界の“幹”に引き寄せる働きをしたのでしよう。

その頃になると、私はちよつとした有名人になっていましたし、私のブログは有名ブログになっていました。

そしてその頃あたりから、お料理雑誌の方からお声がかかるようになりました。「レシピを、ウチの雑誌から発表しませんか？」実はこの時期、ちよつと悩みました。私はただの主婦なのに、と。けれど、結局決心してお料理雑誌に連載を持つことになりました。そのお仕事自体はそんなに大層なものではありませんでした。ただ、今までブログの方で発表して好評だったお料理のレシピをまとめたものに過ぎなかったからです。

今にして思えば、あの連載が、私を大きな世界に引きずり出したのかもしれない。

ブログを始めたころは、私は生活の一手間にブログを更新するような生活だったのです。そもそも、私がブログを始めたのは日々の生活における暇つぶしのためだったのですから。

けれど、こつやつてある程度有名人になってみると、どんどん日々の生活がブログや“お仕事の”方に流されていくのを自覚していました。

そして、そんな生活が続くうち、さらに私は広い世界へ引きずり出されてしまいました。

ずばり、TVの世界です。

どういう経緯でテレビに出ることになったのかまるで覚えていません。けれど、当時の予定帳や周りの証言を総合すると、どうやら私のTVデビューは夜のニュースの特集枠のようです。確か「ブログに燃える奥様に密着」だったか、そういう類のものだった、と、夫は述懐しています。

あの当時、やっぱり私はミスターだったのでしょう。

「TV!? ちょっと凄くない?」

と、夫に飛びついたことがありました。私はちゃきちゃきの「俺たちひょうきん族」世代、TVというものへの憧れはどの世代よりも強いのです。すると、夫は頭をかきました。

「まあ、君がやりたいっていうならそれでいいけど……」

ちよつと寂しそうに夫がそう呟いたのが印象的でした。

話は足早になりますが、このTV出演を境に、私にそういう類の仕事が舞い込んでくるようになりました。しかも、その数も加速度的に舞い込む件数が増えました。私一人ではとうてい捌けず、そういうマネージングをしてくださるいわゆる芸能プロダクションに入社したのもこの頃です。そうして、私の芸能生活が始まったのです。さて、ここまで長々とお話しましたが、私というただの主婦が、こうして成り上がっていくのをつぶさに見ていただいたのには訳があります。

実は、私自身、“成り上がる”気なんかサラサラ無かったんです。よく、「マリリンさん、最初から有名人になりたかったんでしょ?」とか、「芸能人を狙っていたんでしょ?」とか言われてしまっている、実は全然芸能界なんて狙っていませんでした。だって、有名人になりたいのであれば大物芸能人と何がしかのトラブル（例えば洗脳騒動とかですね）を起こせばいいわけですし、芸能人になりたいのであれば劇団に入ったりお笑い芸人の門を叩けば良いだけの話です。有名人になるのにブログを使うなんて、回りくどいことこの上ありません。でも、有名になつてしまつたのはたまたまブログに人気が出たからですし、テレビに出るようになったのは、ただ単に“来るものを拒まなかった”だけの話なんです。

さて、こんな言い訳臭い話したのは、この本の執筆を引き受けたのも“来るものを拒まなかった”だけだった、ということをお願いしたかったが為だったのです。

私はあくまで主婦ですし、ただのお料理ブログの運営者に過ぎません。お料理ブログの運営者がお料理のレシピ集を出すことを夢見

たとしても、自分の日々の雑感やあるいは過去を話すエッセイなどを書こうなんて、まるで考えが及びませんでした。だって、それは私の仕事ではありませんから。

けれど、世間はそうは思ってくれないようでした。

ある日、私の所属する芸能プロダクションから、ある人を紹介されました。都内の小洒落た喫茶店で、芸能プロダクションの人を紹介して、その人に会いました。

主婦の私が見ても、そこまで高いものには見えないスーツを着て、長年使い古したのだろうな、と思わせるに十分な靴を履き、けれど相手に不潔さを感じさせない、そんな男の人でした。

その男の人は、私に名刺を差し出しました。ふと名刺に視線を落とすと、そこには“新藤”という苗字が躍っていました。そしてその横には、ものすごく有名な出版社の名前が書いてありました。

出版社の名前を見たその瞬間、私は「ああ、またレシピ集の出版をお願いしに来たんだわ、この人」と反射的に思っていました。私を訪ねてやってくる出版関係の人は、1から10まで皆同じことを言いました。「弊社で、レシピ集を出版しませんか？」また、その手合いだろう、と思ったのです。

けれど、眼の前に座る新藤さんは、こう言いました。

「マリリンさんに、エッセイを執筆して頂きたいのですが……」

前書きに代えて・この本について【3】

エッセイ。私にはあまりに遠い言葉だったので、しばらくその単語の意味を思いあぐねてしまいました。けれど、ああ、日々の雑感とかを面白おかしく書くのがエッセイだった、と私の頭の中で“エッセイ”という単語の背後情報を手に入れた私は最初、首を横に振りました。だって、エッセイを書く、という作業は、決して私に与えられた仕事には思えませんでしたから。

けれど、新藤さんは私にこう言ったのです。

「どんな人だって、エッセイを書くだけの種を持っているんです」
え？

新藤さんは続けました。

「だってそうじゃないですか。マリリンさんは父親と母親の間に生まれました。そして、現在・お料理研究家として生活しているわけですよ。じゃあ、そのスタートと帰結点との間に、出会いがあって別れがあって、葛藤があったはずなんです。それらの心のシワを丹念に辿っていけば、それはエッセイになるんです」

理屈は、そうかもしれませんが。でも、心の隅のほうに、ごわごわとした想いが凝り固まっているのもまた事実でした。

それは、私の仕事ではない、と。

けれど、新藤さんは私の心を見透かしたかのように続けました。

「けれど、エッセイの種を、出版という形で花開かすことができる人間は極わずかに過ぎないんです。それはなぜか。それは、お金を出してまで聞きたいような面白い過去を持っている人間、あるいは現在がものすごく魅力的なるがために過去にまで興味をもたれている人間にしか、出版社はエッセイの門戸を開かないからです」

つまり私のことを“過去を持っている人間”だと言いたいんですね？ と訊くと、新藤さんは笑って首を横に振りました。

「いいえ、マリリンさんは後者の方です。マリリンさんは、この前

まで主婦として生活なさっていたのに、ブログという身近なものから一気に有名人になられた。それは、ものすごく不思議な事ですし、興味深いことでもあるのです。――失礼な喩えだとは承知しておりますが――シンデレラが王子様に見初められた理由を、町の女性たちが考え、そしてやつかみ、その理由を彼女の辿った人生から見つけようとするのも、決して不思議な事だとは思えません」

そう言われて初めて、私がシンデレラのように見初められた存在だという事に気づきました。ただ、シンデレラを見初めたのは「王子様」という一個人でしたが、私を見初めたのは、もうすこし漠然とした存在だった、という違いはあったにせよ。

思えば私は、「ブログを始める」という一步を、まるでマイルストーンのように捉えている節がありました。

これ以前と、これ以後。

つまり、ブログをはじめたあとの私というのは、「それまでの私とはまるで別物なのだ」という線引きを、自分の中で引いてしまっているようなのでした。言葉を替えれば、「ブログをはじめると」という一步と、「TVに出演する」という一大事が、相当に隔絶のある出来事なのにも関わらず、私の中では一直線上にしか語れない出来事だと感じているようなのでした。

そして、と前置きしてから、新藤さんは続けました。

「実は、弊社の方に、マリリンさんのエッセイを希望する手紙やメールがよく来るんです。主婦層の、つまりはマリリンさんと同世代の方から」

結局、その言葉が決め手となり、エッセイを書く事を了承してしまいました。

さて、「大小路マリリン」を知らない方のために、ブログを始めてから現在に至るまでの近況を交えつつ、この本を出版する経緯をこうして説明しました。

でも、こうしてつらつら書いている今でさえ、正直悩んでいます。

“これは、私の仕事ではないのではないかと。”と。

私は元々、主婦なのです。

外で働く夫の代わりに家を守り、炊事や洗濯、その他もろもろをするというのが本分なのです。それを、ブログというある意味で趣味の延長線上にあることにウエイトが向かってしまうのは、ちょっと心苦しくもあります。

でも、ありがたいことに夫はそんな私のことを応援してくれますし、それに、皆様の応援もあり、今こうしてつらつらと筆を進める（とは書いていますが、実際にはキーボードを叩いています）今日この頃です。

なお、この本における章立ては殆ど、担当の新藤さんの提案によるものです。

新藤さんに、「書くのを了承したはいいいけれど、けれど何を書いたらいいか全然判らない」と泣きついたところ、彼はこう提案してくれました。

「そういうことなら、こちらで一ヶ月に3個ほどお題を出しますので、それに答える形で書いていただければいいと思います。例えば、家族について、とか、夫について、とかお題を出しますので、それについて大体一万文字くらい書いていただければいいと思います。もちろん、その一万文字というのはあくまで目安で、筆があまり進まないな、ということでしたらそのままでもいいですし、筆が進みすぎちゃったな、って場合でも、そのまま出していただければそれでいいですから」

凄いいVIP待遇です。むしろ、ミソをつけられてしまった感もあります。

でも、その判り易く初心者向きな提案のおかげで、第一章の原稿も、こうして無事に仕上がりそうです。

自分で書いているもので（実はエッセイの話が来たときに、イン

タビユーをプロの方に再編成してもらおうという方式でどうか、という案も出されたのですが、断りました）、非常に読みにくいかもしれません、最後までお付き合いください。

“大小路マリリン”という名前について【1】

よく、皆様から聞かれる質問に、「大小路マリリンという“芸名”には、何か元ネタがあつたりするんですか？」というモノがあります。あるいは先読みして、「その芸名、〇〇が元ネタでしょうか？」などと、言われてしまうのですが、私は正直その質問には、戸惑うばかりでコメントが出来ません。

なぜなら。

大小路マリリン、というのが私の本名だからです。

正確には、私の生まれた家が「大小路」という家で、そしてブログを立ち上げる際に旧姓を名乗ったので、半分本名とても申せましようか。

さて、ここで皆様は驚かれるものと思います。

「ってことは、“マリリン”っていうのは、本名なの？」と。

そうなんです。私の戸籍謄本の名前の項には、“マリリン”と、カタカナでしっかり書かれています。さて、こんなことを書くと、きっと皆様はこう誤解なさることでしょう。

「ひょっとしてマリリンさん、帰国子女か何かなんですか？ あるいは外国人とのハーフとか？」と。

けれど、それも違うんです。

私の父も母も、ド日本人です。さすがに何代か遡れば外国人の血が混じっている可能性を否定する事は出来ないでしょうけれど、少なくともルーツが日本以外の国であるゆえに私の名前に影響を与えたような親戚は、私の周りにいませんでした。

では、なぜこんな名前なのか、というのには、実はちょっとした理由があります。……あ、いや、“ちよつとした”と書きましたが、実は全然立て込んだ理由などありません。文字にしていまえば、きつと一行で済んでしまうほど、理由がまるで立て込んでいません。

私の父が、M・Mことマリリン・モンローのファンだったからです。

子供の頃、よくマリリンという名前で馬鹿にされたもので、自分の名前というものに常に疑問を差し抱いた幼年期を過ごしていました。そんな幼年の私は当然、私だけどうしてこんな奇妙な名前なのだろう、と首をひねったものです。けれど、それを親に聞くのはなんだか怖い気もしましたし、そもそも幼年期の頃、親は私の手の届くところにいなかったもので、聞くに聞けないまま、過ごしていました。

で、結局名前のことを聞いたのは、結婚するときでした。

あの光景を、今でも覚えています。

結婚式前の打ち合わせのときのことでした。私と夫（当時はまだ婚約者でしたけれど）と母で、ウェディングドレスを見繕っているとき、不意に母に聞いてみたくなったのです。

「なんで、私って、マリリンっていう名前なの？」

最初、その質問の意味を図りかねているかのように、母は無言で私の顔を覗きこんでいました。手では、ウェディングドレスの裾を軽くなでていました。まるで、犬を撫でるかのようにいとおしげになれたあと、母は何の屈託もこめず、私の質問に答えました。

「あ、ああ、お父さんが、マリリン・モンローのファンだったからだよ」

その瞬間、私達の間、妙な空気が入り込んだのを、今の事のように覚えています。

けれど、こうしてエッセイを書いてみて、こうして私の名前の由来についてこうして書いてみると、なんだか釈然としないものを感じ始めてきました。父は（父という人についてはこれから書く機会があるらしいので、そこに譲ることにしますが）確かに私から見れば変なところのある人でしたが、けれど父には母がついていました。父と比べれば、まだ母は常識のようなものをしっかりと見据えていたはずなのです。にも関わらず、母は娘の名前を決める際に父を止

めてくれなかったのでしょうか。母という人は（母についても書く機会があるそうなので、それも後に譲りますが）言わないときには何も言いませんが、言うときにはどこまでも強くものを言う人です。娘の名前を決めるなどという段で、まさか口出しをしないなんてことは考えられません。

と、いうことは、私が「マリリン」という名前に決まったのには、何か裏付けがあるのではないか、あるいは、母が納得するだけの由来があったのではないか。そう、推理したのです。

と、いうことで、原稿の種を探す、という意味もあり、久々に母に会いに行こうと思い立ちました。

そういえば、TVに出るようになってから、母を訪ねていませんでした。母は体が少し弱いので、まだ私が主婦だったころはよく家を訪ねていたのですが、忙しくなった最近では、あまり訪ねることが出来ず、電話だけで済ましてしまっていた、という負い目もあったということ、ここで告白しておく必要もありましょう。

母の家、――つまりは私の実家ですが――は、私が今住んでいるマンションから、電車で一時間ほど下り電車に揺られたところにあります。電車で一時間という距離は、暇な主婦の頃だったら季節の折々に訪ねることが出来る距離だったのですが、TVなどの活動を始めた今だと、電車で一時間という距離が今度は枷になってしまい、結局最近は不義理をしてしまっていたのです。こう言うてはなんです、何物も近いに越した事はないと思います。

私が母を訪ねようと決心したとき、窓の外は晴れていました。

この原稿を書いているのは四月なのですが、今年（編集部註・200X年）の四月は雨が多かったですよね。なので、思い立ったその日が晴れ渡っているなんて、何かの奇跡のようなものを感じてしまいました。しかも、そんな日に限って、お仕事にも先方の都合でキャンセルが出てしまい、一日ヒマになってしまったのです。普段だったらお仕事のキャンセルは多少へこんだりもするのですが、この日に限っては何かの思し召しに思えました。

そんなわけで、四月の陽光を浴びながら、母を訪ねることにしたのです。

電車に揺られて一時間。うつらうつらとしながら昼下がりの穏やかな下り電車に乗りながら、降りる駅を待ちました。そして、駅のホームに降り立つと、生まれ育った街の空気が、私を迎えてくれました。もちろん、私の家も実家も同じ首都圏ですから、そんなに空気が変わるわけはありません。きっとそれは、気分のようなものでしょう。

そして、駅を降り、子供の頃の思い出が染みこんだ懐かしい街をしばらく歩いて、ようやく実家の前にまでやってきました。

母は、元気でした。

私がドアを開くと、いつものように笑顔で迎え、私にレモンティを出してくれて……、というのは嘘ですが、相も変わらない減らず口を叩いてくれました。

「おやおや、アンタ、最近私のことを訪ねてくれないからねえ。捨てられたのかと思ったよ。それにアンタ、今有名だから、私を訪ねるほどヒマだとは思ってなかったからね」

そう言いながら、私に番茶を出してくれました。一応フォローしておきますが、母は口が悪いだけで、心は温かい人です。喻え人格否定に聞こえかねないことを言っていたとしても、それは彼女にとってはご挨拶のようなものなのです。なので、いちいち腹を立てているのも疲れますし、そもそも腹も立ちません。

しかし、見ない間に母は小さくなっていました。

もしかすると母が小さくなっていてるのではなく、住んでいる家が大きくなったのか、と転倒した考え方をしてしまいたくなるくらいに、母がかつて家族三人で住んでいた「家」の空白に埋もれているように感じました。たった一人で、二階建ての、豪邸と呼んでも差し支えない広さの家に住む母が小さく見えたのは、決して私の感傷の成せる業というわけではないと思います。

「さて」

母は番茶を私の前に出したあと、卓を挟んで私と差し向かいに座りました。そして、その相好をようやく崩し、私にこう言って来ました。

「どうしたんだい？ いきなり訪ねてきて。仕事が上手く行かないのかい？ それとも、出戻りかい？」

「いいえ違うわよ、母さんの顔をしばらく見ていないから、こうやって会いにきたのよ」ときつぱりと答えると、まるで、ちえっ、とても舌打ちしそうなほどに顔を曇らせる母の姿がありました。まったく、娘の窮地を期待するとは、なんとという親でしょうか。……繰り返しますが、母はこういう人なのです。

私は最初、最近の天気の話やら、私の近況やら、あるいは夫の様子などについて話しました。大人同士の会話において、本当に話したいことを切り出すためには、こうして色々と踏まなくてはならない手順があるのです。子供の頃のように、いきなり核心を喋るわけにはいかないのです。

母は、私の話した話を、どこかつまらなそうに聞いていました。

確かに、つまらない話ではあるのです。最近の天気は雨や曇りが多くて洗濯物が溜まつちゃうわ、とありきたりの感想しか言えないわけですし、それに私の仕事も順調すぎるほどに順調だったので別に波乱めいたものではありません。夫も夫で、まるで変わりません。母に言わせれば「あの人は超低空飛行なんだけど安定してるね」となってしまうのですが、低空飛行だろうが宇宙空間を飛んでいようが安定している以上はお話として盛り上がりに欠ける、と言えます。

何度も言いますが、母はこういう人なのです。普通の親、というものを私はあまり知らないのですが、普通親というのは、子供の人生に波風が立たないことを願い、そして波風が立っていないのを見届けると嬉しくなるものだと思います。なのに、母はむしろ子供の人生に対して波風を立てて欲しいようなそぶりさえ見せるのです。

しばらくそんなつまらない話を、つまらなそうに番茶をすすりな

がら聞いていた母は、茶碗を卓に置きました。そして、私の顔を、ぐいっと自分の顔をねじ込むようにして覗きこんで、不意に口を開きました。

「で？ アンタ、何か私に訊きたいことがあるんじゃないのかい？

」

ぎく。

「アンタ」母はため息をついてから続けました。「私はアンタの母親だよ？ アンタのことくらい、お見通しだよ。……アンタ、子供の頃からそうやって言いたいことを口ごもる癖があるからねえ」

そこまでバレていたとは、正直心外でした。こんな母ですが、意外に洞察力があるのかもしれない。

私は訊きました。

「なんで、私の名前を“マリリン”なんて名前にしたの？」

「え？ 以前話さなかったっけかね？ あれは、父さんが決めたんだよ。……ああそうだ、結婚式前に教えたんだっけ！ あのとき、Kさん、大笑いしてたねえ！」

“大小路マリリン”という名前について【2】

そう、私の名前の由来を聞いたとき、丁度結婚式の打ち合わせで、しかもウエディングドレスを見繕っているときだった、という話をしたと思いますが、その時、夫がそばにいたのです。もちろん、私の名前の由来をきっちり聞いたわけです。私の名前の由来を聞いたとき夫は、大笑いしました。夫は普段、あまり笑わない人なのですが、初めてと言っても差し支えないくらいに珍しく、顔を崩して笑いました。……この件で、ちよつと夫との仲が険悪になったのは言うまでもありません。

にしても、私さえ忘れていたような恥を思い出させるとは、母親という生き物には困ったものです。子供の過去を知っていて、しかも思ひ出話のフリをして子供の恥をほじくり返すのですから、子供としてはやるせないものがあります。

とにかく、そんな思いを腹の底に溜めながら、私は訊きました。

「マリリン、っていう名前、どう思う？」

すると母は、馬鹿なことを聞きなさんな、と言いたげに顔をしかめ、即答しました。

「変な名前だね。バタ臭いし」

「そう思うなら」私はちよつと語気荒めに続けました。「なんで父さんのことを止めなかったのよ！ 母さんなら止められたでしょう！」

すると、母は頭を掻いて、私の顔を覗きこみました。

「だって、しょうがないじゃないさ」

そう前置きした母は、あの頃の経緯を話してくれました。

どうやら、私が生まれたとき、母は私の名前についてあれこれ言えるような状況ではなかったらしいのです。母はそこらへんの事情を濁していましたが、きつと体が弱い母の事、恐らくは産後の肥立ちが悪かったのでしょう。そもそも母は子供の頃、「20まで生き

られるか判らない」と医者に宣告されていたほど体が弱かったそうですから、子供を産む、などということ、何の負担もなくできようはずもなかったのです。

「まったく、アンタの名前を聞かされたときは、天地がひっくり返るかと思つたよ」と、母は目を細めながら続けました。「病院のベッドで寝ているとき、父さんが病室に入ってきて、“子供の名前を決めてきたぞ”って言うわけ。で、当然、“どういう名前？”って訊くわけさ。そしたら、“マリリン”だもんねえ。漢字で当て字をしてあるならまだどうにかなるかもだけれど、カタカナだったもんねえ」

漢字で当て字云々の、母の言い分の意味がよく判りませんでした。が、とにかく母は名前を決める現場にいたことが出来なかったようなのです。

「もちろん、反対したさ。“マリリン”なんて、バタ臭い名前、イヤだからねえ。でも、父さんはこう言つたんだ。“お前が反対すると思つたから、もうすでに出生届を出したよ”ってね。あの人、テコでも動かない上に、自分の意見だけが真実だ、って言って憚らないところがあつた人だから」

つまり、私のマリリンという名前は、事実上父の独断で決まつたようなのでした。しかも、普段“うるさがた”の役割を負つていた母が口を出せない合間を狙うという乾坤一擲の手を打つて、です。

まったく、なんて父だろう、と私はため息をついてしまいましたが、私はさらに訊きました。

「でもさ、何で父さん、私にこんな名前をつけたのかしら」

「なんで、ねえ」母は、まるでそれが自分とはまるで関係の無い事象であるかのように、なげやりな声を発しました。「そんなこと、私に訊かれても困るねえ。だって、私がつけたわけじゃなし」

私はちよつと食つて掛かりました。

「だって、もう母さんに聞くしかないんだから、しょうがないじゃない。そもそも、娘の名前の由来を知らない母親っていうのはどう

なのよ」

口について出た瞬間に、“ああ、しまったな”と思ってしまいました。さすがに、口が過ぎたな、とバツの悪い思いに押しつぶされそうになってしまったのです。けれど、母は私の言葉に傷ついたそぶりも見せず、かといって私に腹を立てる様子さえ見せず、――つまりは私の言葉など気にしなかったかのように――、言葉を重ねました。まるで、世界中の母親の顔を集め、それをない交ぜにしたような笑顔を湛えて。

「じゃあ、アンタはどうなのさ」

「え？」

その母の切り返しに、思わず声が上ずってしまいました。母はこの手の言い争いときはいつも、こうやって相手を翻弄して揺さぶり、そして勝とうとする傾向にあるのです。母は、どこまでも負けず嫌いなのです。

けれど、このときはかりは違いました。

母は、決して私を言い負かそうとしている、というわけではなさそうでした。それは、母と過ごした歳月がもたらした、母との“距離感”によって図ることの出来たものでした。そして、母の意図をそうやって即座に思い至ることが出来た瞬間に初めて、最近母の感情の機微を図りかねていた、という単純な事実に気づいたのでした。それはきつと、母との生活から離れ、夫との生活に慣れるうちに失ったものなのでしょう。

言い負かそうとしているのではない、では、母は私をどうしたいのでしょうか。

母は、穏やかな声で続けました。

「じゃあ、アンタは自分の名前をどう思っているのさ」

「え？」

しばし、考え込んでしまいました。けれど、“自分の名前をどう思う”なんて漠然とした質問、答えられようはずありませんでした。そういう風に答えかねている私を、母は笑いました。けれど、

それは出来の悪い私を嘲笑っているような性質のものではなく、まるでまだ見ぬ孫の笑顔や泣き顔を見てその相好を崩したかのような表情でした。

母は、指を振りしました。まるで、時間切れを宣言するかのようによ。「父さんは、きっとアンタの名前に何らかの意味を込めたんだろうよ。でも、その意味はあくまで父さんだけのものなんだよ。少なくとも、それを私やアンタがおもんばかる必要はないんだよ」

「でも……」

言いよどむ私に、母は畳み掛けました。

「親の願いなんてものはね、別に子供が背負う必要なんてないんだよ。この際だから言っちゃうけど、私はアンタが今みたいな浮き草稼業に手を染めているのは全く気に食わないんだよ。母親としては、やっぱり地に足つけて稼いで欲しいな、とも思うし、出来れば旦那が働いているんだから主婦に納まって欲しいんだよ。でも、そんな親の感傷に、子供が付き合う必要なんてない。……自分につけられた名前の意味なんていうのも、その一つなんだよ。だってそうだろう？」

母は、きつぱりと言い放ちました。

「親なんて、いつかいなくなっちゃうんだから」

「それはそうだけど」

「そこで同意されるのもどうかと思うけどねえ」と母は苦笑して、続けた。「願い、っていうのは、それを願った人にしか理解できないものなんだよ。父さんは、アンタに名前をつけるときに、何らかの願いをこめたんだろうね。もしかしたら、父さんがアンタに願ったのは、マリリン・モンローのスター性だったのかもしれないし、マリリン・モンローのセクシーさだったのかもしれない。あるいは、ただ単に画数がよかったただけだったのかも知れないね。でも、そんなもの、今を生きているアンタには関係がないんだよ」

こほん、と咳を軽く一つついて、母は続けました。

「むしろ、アンタは“マリリン”という名前に、自分なりの意味を

つけなくちゃならないんだよ」

「自分なりの、意味？」

「そう、自分なりの意味。“マリリン”っていうアンタの名前に、アンタ自身が意味を書き加えていくんだよ。名前なんて、そういう性質のものでしかないんだよ」

そう言われた瞬間、肩にかかっていたものが抜けるような感覚に襲われました。ついでに言えば、肩にかかったものが、私の体重もまた引っ張っていつてしまうような、妙な脱力感にも襲われたのですが。

そして、その脱力感が全身を包む頃、私の頭にある疑問が浮かびました。その疑問は、私の口から出ようとしながらも留まって、私の呼吸を妨げました。

「ねえ」遂に、その私の疑問が、口から飛び出てしまいました。「じゃあ、母さんは私の“マリリン”っていう名前に、どういう意味を書き加えているの？」

すると、母はキョトンとした顔を隠しませんでした。そして、そのキョトン顔から一瞬遅れて、母の少し曲がった口から答えが飛び出してきました。

「え？ あ、ああ。アンタの名前は父さんがマリリン・モンロー好きだからつけたんだと思ってるよ」

「そうじゃなくって」

「あ、ああ……」母は、ちょっとバツが悪そうに微笑みました。「私にとって“マリリン”っていうのは、可愛い可愛い一人娘の名前だよ。そして、アンタが私にくれた大切な思い出とか、これから見せてくれるかもしれない未来とか、そういうものも一緒に織り込まれているけれど、ね」

どうやら、私の名前の意味なんて、誰も知らないようでした。

むしろ、名前の意味なんてものは、どういう風にこじつけてもいい、というのが、“大小路流”なのでしょ。

なので、読者の皆様をお願いします。

皆様、是非私の“大小路マリリン”という名前に、勝手に色を付けてください。そして、私に親しみを感じてくだされば、それが幸いです。

……という風に皆さんに提案できることこそ、“私の名前の意味”なんではないかと思う今日この頃なのです。

母について【1】

さて、次は私を産み育ててくれた母について書く段になりました。けれど、よくよく考えれば、前の段で、母はチラッと出てきてしまっています。なので、正直また同じ事を書くのはどうかとも思っただのですが……。担当の新藤さんが許してくれませんか。

「マリリンさんという女性を形成した人は、きっと母親なんです」と、持論を展開して憚りません。なので、イヤイヤではありませんが、母親について書いてゆきたいと思います。

……と、思っただけですが。

実は私、改めて文章に書き示せるほどには母という人間を、――実は、“親”というものを、なのですが――、理解していないのです。私がまだ小さかった頃、今よりもはるかに母は病弱でした。1年の内、8割は入院しているような人でした。時折、しかも正月とか夏休みとか、“家族団らんがよしとされる”時期にだけ家に帰ってきて、そしてその時期が過ぎると病院に帰ってしまうような人でした。なので、原稿が詰まってしまいました。何を書けばいいのだろう？ どう書けばいいのだろう？ もう既にいない人なら、ある意味では客観視が出来る分、いくらでも手前勝手に書くことも出来ますが、母はまだ私の前にいて存在感を放っているのです。そういう人を客観的に語ることがどうしても出来ません。

そこで、原稿に詰まっている旨を新藤さんに電話で説明したところ、電話口の向こうからこういう提案がありました。

『じゃあ、マリリンさん。お母上にインタビューなどをされればいかがでしょうか？』

いんたびゅう。何語かも判らず、その言葉を反芻する私がいましました。私が握る受話器から、新藤さんの声が続きました。

『インタビューですよ。お母上に、これまでの経緯とか、マリリン

さんが疑問に思っていることを聞いて、それをまとめるんです。親子といったところで、やっぱり分かり合えないものですし、思ったほど分かり合ってはいないものですから、やってみると結構楽しいかもしれませんよ』

受話器を下ろしてから、電話機の前でしばらく考え込んでしまいました。

母にインタビュー。

普通の生活を送っている35歳だったなら、決して行なうことがないだろうことだったので、ちよつとためらいのような感情が生まれてしまったのです。けれど、新藤さんの案に乗ってみることなしには筆が進みそうもないので、母にインタビューを試みる事にしました。

—— はい、というわけで、母にインタビューしたいと思います。「まったく、何がインタビューだね。いきなり訪ねてきて」

—— 母さん、ちよつと静かにしてね（咳をひとつつく）。さて、今日は200X年の3月20日。母の家、つまりは私の実家に押し掛けてきました。

「Kさん（夫の名前・個人情報につき伏字）と大喧嘩でもしたのかと思ったよ。朝の早よから大荷物を持って、しかも連絡も無しに来たもんだから。それに、アンタ、最近やけにウチに顔を出すようになったじゃないか。どういう風の吹き回しなんだい？」

—— ちよつと母さん、茶々を入れないの、もう！

「へいへい（そう言つて母、ちよつと斜に構える）」

—— やっぱりこんな予感是一直にいたんですが……。ウチの母はこの通り、どうにも偏屈なところがありまして……。きつとお見苦しいインタビューになることが予想されます。あらかじめ、その点をご了承ください。さて、さっきの話の続きです。……ええと、どこまで話したつけ（と、カンペを見る私）。あ、ああ。日付までだった。で、ですね、今は午前の9時半です。なお、母のインタビュー

「は、録音した後で紙に起こしたいと思います。なので、生の声に近い形で皆様に母の言葉をお伝えすることが出来るかと思っています。能書きはこれくらいでいいですね。では、私の母です（と言って、母の肩をつつく）。」

「はい、どうも。いつもマリリンがお世話になっております。マリリンの母でございます」

「いまさら取り繕っても無駄よ、母さん。母さんのことはもう随分エッセイに書いてるから、そーい風にかしこまらなくても。母さんの性格、皆さんにバレバレなんだから。」

「ああ、そうかい。その方が楽でいいさね」

「母が、随分リラックスしてきました。なので、そろそろ質問に入りたいと思います。では、質問！ “母さんは、今年何歳ですか？”」

「アンタ、私の年齢も知らないのかい。娘のくせに薄情だねえ」

「私は知ってるわよ。でも、読者の皆様は知らないでしょ？」

「はいはい、判ったよ。めんどうだね。私は今年で73だよ」

「改めて訊くと、やっぱり驚くわね。ええと、私が今年35だから……。え？母さんが38のときの子なの？ 私って！」

「今更何だい。知らなかったのかい？」

「いや、知ってたは知ってたけど……。でも、改めて事実を突きつけられると、やっぱり驚いちゃうわね。だって、今の私とほとんど年齢が変わらないじゃない！」

「ふふん（と母、胸を張る）」

「いや、実際に胸を張ってもいいと思うわ。だって、初産で38歳、って、当時は高齢出産でしょ？」

「高齢も高齢。まったく、おかげで大変だったよ」

「こんなことを親に不躰に訊くのはちよつと気恥ずかしいものがあるんだけど、どうしてもっと早く子供を作らなかったの？」

「あ、ああ。父さんのせいだよ」

「ああ、父さん。」

「あの人、アンタが生まれる前は、“弁護士資格を取るんだ”ってというのが口癖の人でね。かといって、弁護士資格の勉強をしながら働く、なんて甲斐性のある人でもなかったから、結局は私に養われるヒモだったんだよ。今とは随分女が働く、っていうこの意味が違う時代だったんだよ？ 女が働く意味が花嫁修業の代わりにとか、それこそ“結婚までの腰掛”とかそう言われていた時代だよ？ そんな頃に私は一家の大黒柱をしていたんだ。だから、妊娠するわけにはいかなかったんだよ」

——でも、妊娠したわけだよな？

「いや、順序が逆なんだ。ある日、父さんが家に帰ってくるなり、“俺、働くわ”って言うもんだから、本当に驚いたよ。で、事実、父さんは仕事を見つけてきていた。それで、こう言うんだ。“随分待たせたけど、俺の子を産んでくれないか”ってね。最初は、何虫のいいことを言ってるんだよコイツは、って思ったね。さんざ私のことを働かせておいて、何が“俺の子を生め”だ、って反発を感じたね」

——でも、今、“最初は”って言ったよね？ ってことは、心境の変化があつたってことだよな？

「ああ、そうだよ」

——それは、どんな心境の変化だったの？

「心境の変化、っていうほどのものでもないけどね。ただ単に、私の算盤勘定が、これまでとは別の答えをはじき出した、ってだけの話なのさ」

——と、いうと？

「それまでは、父さんを養うのが私の人生だった。それには不満はあったけど、それなりに、——まあ、それなりにだけだね——、幸せだったんだ。けれど、父さんはいきなり私のそんな人生を否定して、別の生き方を歩め、って言うてきたわけだね。そりゃ、反発もするだろうよ。けどね、“子供を育てる”っていう父さんの示した道も、なんだか悪くないなあ、とも思えたからね」

——それで、高齢出産。

「ああ。高齢出産なんかするもんじゃないよ」

——　　なんで？……いや、私も子供が欲しい今日この頃だから、ちよつと後学までに訊いておきたいんだけど。

「出産、っていうのは、元々が重労働なんだよ。だってそうだろう？腹の中で子供を育てるのが出産なんだ。負担にならないはずはないじゃないか。しかも、当時私は38歳。どうしても若さが足りなかった。しわ寄せっていうのは、後々来るもんさ。アンタを産んですぐは、“産後の肥立ちが悪い”って医者に言われて、ずっと入院していたんだ。けれど、いつまで経っても退院させてもらえない。さすがに不安になってねえ。医者に聞いてみたんだ。“いつになったら、退院できるんですか”って」

——　　そうしたら？

「医者は言ったよ。“今回の出産が引き金になって、心臓の病気が出たようだ”ってね。真つ白な病院のベッドで上体を起こしている私に、医者は冷たく言ったんだ。あのときほど、驚いたことは無かった。だって、一回は克服したはずの、心臓の病を再発するなんてって」

——　　え？昔、心臓の病気をしてたの？

「まだ、私が子供の頃だよ。私は、東京郊外の、地主の一人娘だった。もしかすると、箱入り娘、って言っても差し支えないくらいに可愛がられたのかもしれないね。でも、私は生まれつき、心臓が弱かったらしい。……ものの喩えじゃないよ。本当に、心臓の鼓動が弱かったんだ。地主だった親は、私の治療へのお金を惜しまなかった。何せ、地主だからね、まとまったお金があったのさ。親は私に薬をたくさん買ってくれた。最初は、まっとうな薬だった。でも、効かなかったからねえ、次第に民間療法の薬とか、なんだか怪しげな薬まで飲まされた。まるで、それが娘への愛情表現なんだ、って言わんばかりにね。そうやって怪しげな薬をたくさん飲んだのがよかったのか、それとも大人になるに従って体質が変わったのかは判

らないけれど、いつの間にか私の心臓病は形を潜めたんだ。でも、その頃には、我が家の財産は全て無くなってた」

—— 薬代に消えた、ってこと？

母について【2】

「それもあるよ。でも、その頃に、GHQの農地解放があったから」
—— ノウチカイホウ？

「まったくアンタは。ニユースでえらそうに意見を言う暇があるんなら（編集部註：この録音当時、マリリンさんはニユース番組「イブニング8」のコメンテーターを務めていました）、まずは常識を勉強する事だね。……太平洋戦争で日本が負けたあと、日本にやってきた進駐軍が地主の農地を取り上げて、それを小作人に安く売り渡したんだ。それが農地解放。私の家は地主だったから、土地を取り上げられた側になっちまったわけだね」

—— ひどい話ね。土地を取り上げるなんて。

「いや、どうだろうね。きっと、日本全国を遠くから眺めて“農地解放”っていう事柄を見てみれば、泣いた人よりも笑った人の多いことだったんだろうしねえ。ただ、私個人にとっては、——言い換えれば、我が家にとっては——いいことじゃなかった、ってことさ。まとまったお金は私の薬代に消えちまったし、土地は取り上げられちまった。結局、私の家に残ったのは（と、母、辺りを見渡す）この家だけなんだよ」

—— とにかく、母さんは過去に一度、心臓病を発症していて、私を出産した後に再発したのね？

「そう。心臓病が再発した、っていう話を聞いたとき、私の頭にまづ浮かんだのは、私の家が斜陽に向かっていく光景だった。……戦後、我が家は本当に大変だったんだよ。前まではそれこそお大尽とか言われていたのに、戦後になるなり、ちょっと家が広い一般人に成り下がったわけだしね。しかも、私の父ちゃん、——つまりはアンタのお爺さんだね——は全く手に職がついてなかった。かといってあの時代は女が働けるような時代じゃなかった。結局、大黒柱のいない家は、少しずつ傾くしかないんだ。結局、貧乏暮らしってわけ

さ。こんなに広い家に住んでるのに（と母、庭に目を遣る）、その日の夕飯にも困るような家だったんだ。やっぱり、10歳代の頃に苦勞すると、教訓っていうのが生まれるのさ。その教訓が、頭を過ぎったんだ」

—— 教訓？ どんな教訓？

「心臓病は、高くつく」

—— それが、教訓？

「そうさ。GHQの農地解放、っていうのは避けられなかっただろうね。だって、あれは日本が戦争に負けた、っていう、いかんともし難い理由で行なわれたものだからね。でも、私の心臓病は違った。もし、私が心臓病じゃなかったら。もし、私がもつと丈夫に生まれていたら。そういう、“もしも”が入り込む余地のある出来事なんだよ。そして、その“もしも”が実現されていたなら、父ちゃんも母ちゃんも戦後、あれだけ苦勞しなかったはずだよ。だから——（しはし無言）——あの時ほど、動揺したことは無かった。むしろ、うんざりだった」

—— 何がうんざりだったの？

「決まってるじゃないか。娘も生まれて、ようやく人並みの生活になったのに、また私は足を引っ張るのか、って。きつと私は、自身にうんざりしていたんだろっね」

—— 自分自身に、うんざり？

「ああ。子供を産んですぐ、一番母親が必要だつてときに私はベッドで寝ているしかなかった。それどころか、父さんにもこれから苦勞をかけるかもしれないじゃないか。それが目に見えたんだよ。だから私は、心臓病が再発したことが分かったとき、夫にこう切り出したんだ」

—— なんて？

「“三行半をください” ってね」

—— （私、無言）。

「それが、一番に思えたんだ。当時の私にはね」

—— なんで？（ちよつとこの言葉に抑揚がかかる）

「そういう時代だったんだよ。すべからく女は、“生まれれば父親に従い、嫁いたら夫に従い、夫に先立たれたら子に従い” 生きる、って教わっていた世代だったんだ。その妻が、病気になつて使い物にならないなら、捨てちまつても問題ない。そういう、時代だったんだ。だから、私は捨てられる前に、自分から去ろうとしたわけだ。捨てられるよりは、自分で去つたほうが、幾分格好がつくからねえ（と、母、笑う）」

—— それが、三行半？

「でもね、父さんはその私の提案を、受け入れてくれないんだよ」

—— え？ 意外なんだけど。

「意外、かい？ まあ、父さんは、お前が生まれてから、仕事が忙しかつたからね。あんまりお前に構っている暇が無かつたんだろうね。……私の提案をね、父さんは蹴つたんだ。“そんなこと、家長の権限において、絶対に許さない” ってね」

—— 高圧的な物言いね。そういえば、父さんってそういう口を利く人だった。それが、嫌いだったんだけどね。

「ああいう物の言い方はね、あの人の表現なんだ。きっと、本当は優しい人なんだ。でも、それをあからさまに出すのが恥ずかしかつたんだろう。……私は説明したんだ。心臓病の薬っていうのは高いんだ、ものすごい苦勞をする羽目になる、今のうちに私を捨てておけば苦勞しないから、ってね」

—— それで、どうなったの？

「アンタだつて知ってるだろ？ あの人は、私に三行半を突きつけるようなことは一切しなかつた。しかも、私の入院費から薬代まで稼いでくれたよ。それこそ、自分の命を削つてまで働いて、ね」

—— 父さん、死んだのいつだっけ？ 実は、本当によく覚えていないんだ。

「……ようやく心臓病に効果のある薬が出て、私がようやく退院した頃だから、アンタが中学生の頃じゃないかい？ ようやく、父さん

に樂をさせてあげられるよ、って思った矢先だったもんね、父さんが死んだのは。まるで、私の心臓病が治るそのときを待っていたような死に方だったね」

—— 脳卒中、だったけ？

「あの時は、カンカン照りの日だったね。確か、私は家で洗濯物を干していたんだ。夫のパンツを洗うなんていう、主婦としちゃ当たり前のことを、かみ締めるようにやってたのを今の事のように覚えているね。よく、そういう場面では、虫の知らせみたいな前触れみたいなものがある、っていうけど、あれは嘘だね。あの、どこまでも突き抜けるような空のどこにも、へんなところは無かった。むしろ、いい事がありそう、って予感があったくらいだったよ。でも、電話があった。その電話は都会の病院からで、“旦那さんが突然倒れた。かなり予断を許さない。出来るだけ早く病院に来たほうがいい” っていうものだった」

—— そのとき、私はどこに居たんだったけ？

「あのとき、アンタは家にいたよ。でも、“留守番する” って言うて聞かなかったんだ」

—— そうだった。

「私もあのころは、娘であるアンタの叱り方もよくわかってなかった。そりゃそうだよねえ。アンタにしてみたら、一ヶ月に一回くらい病院で会ってて最近同居を始めた親なんて、親戚のオバサンみたいなものだろうからねえ」

—— ……。

「いや、気を病む事はないよ。だって、それは私もおあいこだったんだ。アンタが私のことをよく判らないのと同じくらい、私はアンタのことがよく判らなかった。そりゃそうだ。一ヶ月に一回くらいしか会わない娘なんて、私からしてみれば親戚の子同然なんだから」

—— うん。

「だから、どうしてアンタが“留守番する” って言うて聞かなかったのか、判らなかったんだ。だって、仮にも自分の父親が倒れてし

かも危篤状態らしい、っていうのに、しらっとしているなんて、まるで納得がいかなかったんだ。でも、最近アンタの話を聞いていて判ったんだ。“父さんは不器用な人だったから、娘との付き合い方がわからなかったんじゃないか”って。

ま、それはさておいて、だ。私は一人で病院に行っただ。薄暗い病院でね。外のかんかん照りが嘘みたいだった。暗くて、冷たい廊下だったよ。その奥の部屋に通された。

プレートには、なんて書かれてたと思う？ “霊安室”」

—— 間に合わなかったんだね。

「そう。あの人は、どうにも一人合点のきらいがあつたからね。きつと、“ああ、もう俺の役割は終わったんだな”って一人合点して私達にさよならも言わずに逝っちまったんだ。父さんの顔を覆っていた布を上げてその死に顔を見た。普通の人だったら、“眠っているような”とか喻えるのだろうけど、思えば私は、父さんの寝顔をまじまじと見たことがなかった。ずっと病院に入院していたから、その寝顔を忘れてしまってたんだ。だから、霊安室のベッドに横たわる父さんの顔がどういう性質の顔なのか、私にはわからなかったんだ。その瞬間に、ああ、父さんを殺しちゃったのは、私だったんだな、って思い至ったよ」

—— なんて、母さんが父さんを殺したことになるのよ。

「きつと、私が苦勞をかけすぎちゃったんだよ。私が、父さんの寿命を、奪っちゃったんだ。だって、父さんは、私の治療費を稼ぐために、昼も夜も関係なしに働いたんだ。その無理が、祟っちゃったんだ。ようやく楽させてあげられる、って段でね」

—— そんなこと言ったら、きりがないじゃない。

「きりは無いよ。そんなこと、アンタに言われなくても判ってる。でもね」

—— でも？

「そういうものなんだ。夫婦、っていうのは。……なあ、話を変えないかい、湿っぽくていけないね」

—— そうね。……じゃあ、質問を変えるわ。母さんから見て、私ってどういう娘？

「そうだねえ……（と母、天井を仰ぐ）。私にとってアンタは、理解が出来ない娘だね」

—— り、理解が出来ない？！

「そりゃそうだろう？ だって、アンタは自分のために人生を使っている。でも、そういう生き方は、一昔前にはできない生き方だったんだ。例えば、アンタの父さん。アンタの父さんは、やりたいことがたくさんあった。きつとあの人は、弁護士になってからやりたいうことがたくさんあったんだろう。でも、父さんはそれをかなぐり捨てて、一家を守る生き方を選んだ。それは、自分のために人生を使う、っていう生き方ではないね。むしろ、誰かのために自分の人生をすり減らしていたんだろう」

—— 誰かのために、人生を？

母について【3】

「そう。今じゃ古臭い、って馬鹿にされる考え方だけだね。私だってそうさ。私も父さんやアンタのために生きようとした。でも、それが病気のせいで叶わなかった。病気が治って、ようやくその生き方が出来る、ってときに、父さんはいなくなっちゃった。“父さんのために生きる”っていう道が閉ざされちゃったんだ。だから、私は“アンタを一人前に育てる”、っていう生き方を新たに選びとったわけだ。いや、正確には、私の目の前には、その道しか残されていなかったのかもしれないね」

—— そういえば、母さんは、入院中はいつもニコニコして優しかったけれど、父さんが死んでからというものの、しつけが厳しくなっただわね。

「そうだったかい」

—— そうだったわよ（笑）。

「ま、アンタを一人前に育てる、って心に決めたのが、そうやって表に出ちゃったのかもしれないね。でも、大人になってから、恥をかくようなことは少ないだろう？」

—— まあ、ね。どこに行っても、それなりに可愛がってもらっているし。

「そういうものなんだ。親のしつけてヤツは。どこに出しても恥ずかしくない子供に仕立てるのが、親の仕事ってことさね」

—— じゃあ、母さんのしつけは成功、ってことでいいの？

「うんにゃ（と母、首を横に振る）」

—— どころへんが？

「言っただろう？ “アンタのことが理解できない” って。それはつまるところ、アンタのあり方が私の考え方とちよっと外れたところにある、ってことなんだ。自分のために生きてるアンタが、私には理解できないんだよ」

—— 母さんはそう言うけど、私だって自分のために生きているわけでもないわ。

「でも、アンタは誰かのためにだけ生きている、ってわけでもないだろ？」

—— そりゃまあ、そうだけど……。

「それが、私には判らないのさ。どうして、アンタはそんなに“自分”を持っていられるのか。どうして、そんなに“自分”を売りだしているのか」

—— 自分を売っているつもりはないんだけど。

「ええと、なんだっけか？ ぶろ……何とか」

—— ブログの事？

「そうそうそれ。それだって、自分のことを切り売りすることじゃないか。そういうのは元々、えらい先生とか、物書きとか、そういう人たちのものだろう？」

—— 昔とは時代が違うわ。だって……

「（私の言葉を遮って、母は続ける）私には、判らないんだよ。どうしてアンタが、そうやって肩肘を張って生きてるのか。だってアンタには、いい旦那さんがいる。いい家もある。困ったことは何も無い。なのにどうして、そういう生活を守る道を選ぶんでなく、自分を切り売りするような生活を好んでやっているんだい？」

—— 母さんは、私にそういう生き方をして欲しくないの？

「いや、そういうわけじゃない。私だって、時代が変わっていることくらい判る。テレビにそこらへんの診療所に座っていそうな医者さんが出る時代なんだから。でも」

—— でも？

「時代が変わっていることは判る。テレビに一般人同然の人が出るような時代になったことも判る。判るは判るんだ。でも、絶対に納得は出来ない」

—— 判るのに、納得は出来ない？

「そういうもんだ。もちろん、アンタの生き方が正しいのかどうか

なんて私には判らないし、もしかしたら今の時代ならアンタみたいな生き方もアリなのかも知れないからね。でも、私が生きてきた人生にはアンタみたいな生き方は選択肢に無かったし、これからも選択肢にはない、ってことだ」

—— ええと、テレビに出る、ってことが、選択肢に無いんだよね？

「違うよ！ 全く、アンタって子は！ そっぴいば昔からアンタは国語の成績が悪かったね！ …私が理解できないのは、アンタの生き方そのものだよ」

—— 私、そんな変な生き方をしてるかしら。

「表面的には、私と何にも変わりはない。でも、肝心なところではまるで違うのさ。だから、私にはアンタの生き方が理解できない。喩えるなら、私とアンタは、日本語版聖書と英語版聖書の関係なんだ」

—— は？ 聖書？

「キリスト教とかユダヤ教、あるいはイスラム教にも一部入っているみたいだけど、とにかく、モーセ様が海を割ったとか、ノアが箱舟に乗って、とかそういう話」

—— それがどうしたのよ。

「日本語版聖書も英語版聖書も、——建前上はだけど、おなじ事が書かれているはずだろ？ 同じ場面でアダムとイブが追放されて、ノアが箱舟を作って、モーセ様が海を割って」

—— まあ、そうよね。

「でも、日本語しか知らない私には、英語版の聖書は読めない。何故なら、私は英語が読めないからだ。でも、“これは聖書だ”って智慧をつけられて英語版聖書を見せられれば、何が書いてあるかわかる。なぜなら、私は一度、日本語版の聖書を読んでいるからだ。でも、それはあくまで日本語版の聖書を思い浮かべた上でのことに過ぎない。英語版聖書を読んで内容を理解しているわけではないし、英語版聖書を読み込んでいるわけでもないんだよ」

……大体、こんな感じのインタビューになってしまいました。

不必要に暗くなってしまった上、イヤに難しい話が続いてしまいました。軽い読み物を期待しておられた読者の皆様、本当に申し訳ございません。

でも、これはいつものことなんです。母はいつも、難しく、教訓めいた話を私にしてくれます。そして、私に何かを伝えようとしています。もしかすると、それは母なりの“しつけ”なのかもしれません。普通、しつけというのは、子供が産まれてから大人になるまでの20年ほどの期間において、非常にゆるやかに行なわれるものだと思うのですが（というのも、私には子供がいなかったのでしつけをしたことがないのです）、私と母の間には時間がありませんでした。その結果、そうして難しい言葉を、私にぶつける羽目になっているのでしょうか。そういう意味では判り易い人とも言えますし、ある意味では正直とも言えますね。真摯、と言い換えてもいいと思います。私は、そんな母が大好きです。時折、面倒に思うことがあったりしますが、それでも、大好きです。

夫について【1】

私は高校を卒業した後、十年間ほど、東京の片隅にある市役所で働いていました。

今でこそ公務員という職業はステータスですが、私が働いていた頃は、——しかも東京の片隅の市役所だったこともあり——、ステータスとか社会的身分とか、そういったものからは遠い職業でした。大抵の女性職員は“腰掛け”を自認していました。それに、市役所に入ってくる人も、ほとんどが縁故だったという本当にいい時代でした。私は特に知己があつたというわけではなかったのですが、たまに入ることが出来ました。どうしたわけか、その手の運は非常にいいのです。

正直、高校生だった頃の私に、仕事に対する拘りはありませんでした。今にして思えばそれは当然の事でしょう。はつきり言って、仕事の内容に拘りが出てくるのは、社会に出て“仕事”というものに一言言てるようになってからのことでしょうか。周りの女の子たちのように、貰えるものさえ貰えれば何でもいい、けれど、あんまり奇抜な仕事はしたくないという見だった私に、担任だった先生は非常にマッチングした職場を斡旋してくれたことになりましたね。

そういう風にして入った職場でしたが、最初は大変でした。

市役所、という場所は、本当にいろいろな立場の方がやってきます。建設許可を取りにくる建設業の方。埋設管の工事を申請に来るガス業者さん。市役所に新しいシュレッダーを売り込みにこられる営業の方。えらそうな態度を取る市議会議員さんや、市長さん。あるいはただ単に戸籍関係の作業にいらっしゃった市民の皆さん。そういういろいろな立場の方たちが、ひっきりなしにやってきました。けれど、そんな皆さんに大なり小なり一致しているのが、市役所の職員への蔑み（と言ってしまつと少し棘が強いような気も

するのですが、あえて使います」の目でした。例えば、あなたが市役所に戸籍謄本でも取りにいった、何時間も待たされたとします。そういうとき、皆さんはあたふたと動き回る職員を見て、こう思うのではないでしょうか。

“何をトロトロやってるんだよ、職員ども。遅いよ！ まったく、俺たちの税金で食わしてやってるっていうのに、これ程度の人材しかいないのかよ！”

そう、役所の人間に対して、世間の目ってかなり冷たいんです。

その冷たい視線というのは、もちろん的を射ているときもあるのですが、いいがかりのような時もあります。中には、「まだできねえのかよ！」と窓口で五分しか待っていないのにも関わらず怒鳴り散らす人すらいる始末です。もちろんそれは、市役所側の不手際があるのかもしれませんが、けれど市民の皆様が役所というものに対して設定しているハードルがものすごく高い、というのもあるように思えます。

市役所に入って最初にぶち当たった壁が、それだったのです。

どうして一生懸命に働いているのに、こんなに文句を言われなくてはいけないのか。そして、どんなに頑張ってもそれをさも当然のことのように受け取る市民の皆様。そして、詮無きことについて文句を言われる。なんて嫌な職場だろう、と最初は思いました。

けれどそのうち、私は“受け流し”を覚えました。

いちいち、誰かの言葉に感情の波をかき乱されないように、ひたすら笑うという術を見出したのです。俗には、それを“営業スマイル”と言うそうですが、そんな言葉を知らないうちに、私はまさに“営業スマイル”を身につけていたのです。けれど、いつも笑っているだけでは芸がないですし、叱責されている場面でヘラヘラしているのもおかしい話なので、いかにも“反省しています”と相手に思わせるような顔も作り出していました。

市民の皆様に対応するときには“営業スマイル”を用い、そして明らかに頭に血が上っている方には“申し訳なさそうな”顔を貼り

付けて謝る。けれど、心の奥底にはさざなみ一つ起こらない。そういう風にして、私は嫌なお客様のクレームじみたものをかわす術を覚えていったのです。

今にして思えば、それが“仕事に慣れる”ということですし、だからこそ何十万も月給がもらえるに値するのですが、当時の私は納得できませんでした。いいえ、納得できなかった、というよりは、嫌悪感を抱いていました。“自分自身を偽る”ということには、常に痛みが伴うものなのです。このままでいいの？という、自問が、私の心を少しずつすり減らしていったのです。

そんな頃でした。私が、Kさんと知り合ったのは。

確かあれは、入社五年目のことだったので、まだ23歳の頃だったと思います。私は最初の五年間は、市役所の市民課というところにいました。市民課というのは、戸籍謄本などの取り扱い、つまりは結婚や離婚といった婚姻に関する手続きや出生届や死亡届の管理などをしていました。その部署は職員の間で「魔の部署」と囁かれている部署で、その仕事量の多さとそれに比例して増える変な市民の方（接客業をなさっている方なら判っていただけだと思うのですが、どうしたわけか自分が応対するお客様の中に、数%の割合で、苦手なタイプのお客様が混じるものです）の対応でイライラさせられる、と有名だったのです。

けれど、入社五年目にしてようやくその魔の部署から脱出することが出来たのです。辞令がやってきたのです。

「大小路マリリン、下水道課への異動を辞令す」

この知らせは、突然でした。ふと、高校生のころに、女の子同士で手紙を回す、という遊びがあったなあ、と連想したほどです。まるで、後ろの席の女の子が、「ねえねえマリリンちゃん」と肩を叩き、手紙を手渡してくるようにさりげなく意味もなさそうに、辞令が私の手元に届いたのです。

けれど、高校の頃の手紙と違ったのは、その書かれている内容で

しょうか。

高校生の手紙は、正直どうでもいい話題で持ちきりでした。「。ちゃんは××君のことが好きらしい」とか、「アイツのこと凄く嫌いなんだけど」とか、「アイドルの□□が、新しいレコードを出すらしい」とか、そういう興味ない人にはまるで興味がない話で埋め尽くされていました。一応女の子の端くれであつた私も、バカバカしいなあと思いつつもそれを読み、ちょっと笑ったり怒ったりしてから、――つまりは読みましたよ、というポーズを明確に見せて、次の子に回していました。あの手紙というヤツはいつも、私に関することは書かれていませんでした。私は浮いた話もなかったですし、嫌いと言われたり好きと言われるほど個性があるというタイプではありませんでした。なので、そもそも話題にならなかったのでしょう。

けれど、市役所に勤め始めて五年目にして回されてきた“手紙”には、私のことがしつかり書かれていたのです。魔の部署からの脱出より、むしろ自分のことが書かれている、その事実のほうにむしろ感動したのを今の事のように覚えています。

さて、そんなわけで異動になったわけなのですが、異動先は、ある意味“魔の部署”市民課よりも過酷な運命を宣告されている部署でした。

下水道課。建設部の一部署です。けれど、ウチの市役所においては、別の響きで以って理解されていました。

私が働いていた市は、10年以上前に下水道の整備が終わっています。それは、市域が割と平地がちであつたことも無関係でない気がします。ともかく私が入った頃だと下水道整備という事業は、ともかく一応のめどがついていたのです。

役所におけるインフラ整備部署にはよくある話なのですが、そういう部署は集中的に人を増減させます。つまり、整備の頃には人を増員し、整備がひと段落すると、保安のための人員を残すというパターンがあるのです。

そういう風に修羅場の去ったあとの建設部の部署は、基本的につまらない仕事がそれなりに溜まっています。図面を引いたり現場の監督をしたりという、建設関係に従事している人間ならば面白いと感じることの出来る仕事は本当に少ないのに、保安点検とか埋設管の把握などのつまらない仕事回ってくる、ありていに言えば“暇な部署”になってしまふのです。

さらに言うなら、そういう部署は、リストラの存在しない役所において、「人材のゴミ捨て場」に使われるケースがあるのです。アイツはどうにも使えない。かといって、イヤミを言って自主退職させるには、どうにも鈍い。そういった人材を体よく厄介払いするための部署として、使われることがあるのです。

そして、私が勤めていた役所において下水道課はまさにそういう部署でした。

“あそこに送られたら最期、二度と出てこれない”とか、“墓場”とか、とにかくひどい言われようだった下水道課に、私が入ってしまう羽目になったのです。

市民課のデスクを片付けて、自分の荷物をダンボールにまとめたときほど、自分の来し方を思ったことはありませんでした。“もしかして、私、仕事でヘマをやらしたのかしら”とか、“そういえば、係長からの夕飯のお誘いを断ったからなあ”と、これまでの行動を悔やみつつ鉛筆や定規をダンボールに放り込んでいるときに初めて、市民課も割といい部署だったな、と思い至ったのでした。

荷物をまとめた私は、荷物を抱えたまま下水道課に続く廊下を歩きました。市民課のあたりは結婚のために書類を提出に来たカップルや、新たな命を戸籍に書き入れるために市役所に来たのだろう父親と思しき男の人がいたりしてかなり混んでいるのですが、福祉課や厚生課、建設課や水道課を通るうちにどんどん人影はまばらになっていきます。それは当然の話で、市役所としても、一般の人にあまり用がないだろう部署は建物の奥に設置しておくものなのです。けれど、そんな当然さえも、私にとっては嫌な予感をかきたてるも

のでしかありませんでした。というか、むしろ閑散としてしまっている廊下に、自分の仕事で死刑宣告を受けたんだ、という単純な事実をただ噛み締めるしかありませんでした。

下水道部は、建物の一審奥にありました。

いや、実際には、よく何をしているのか職員でもわからない“法人課”という部署の横にありました。けれど、法人課の方は時折人が来ている様子ですし、それにそのときも、訪ねてきた人に対応する職員の姿がありました。

けれど、下水道課は本当に閑散としていました。

席はわずか三席。うち一番カウンターに近い席が空席だったので、私のために置かれた席なのだろうと勝手に合点しましたし、事実そうでした。その席に向かい合うようにして設置されている机では、私とあまり年齢が変わらないメガネを掛けた男の人が、ペンを回しながら書類に目を通していました。そして、その二席の奥にはちよつとモノが良さそうな机が置かれていたのですが、その机をあてがわれていた人物はそのときその机の上でスポーツ新聞を広げているようでした。

夫について【2】

「あのう」

私は、控えめに声をあげました。すると、ペンを回しながら書類に目を通してほうが、私の方に視線を向けました。一方、スポーツ新聞を読んでいるほうは、何の反応も示しませんでした。

そのペンを回していた職員さんは、ペンを回すのをやめてペン立てに入れ、笑顔を私に向けました。

「はい。こちら下水道課です。何か、御用ですか？」

完璧な受け答えでした。話すテンポは速すぎず遅すぎず。声は高すぎず低すぎず。さらに言えば、不快でもなければ快でもない、そんな声色でした。そんな、何者よりもニュートラルな声を発するその職員さんの顔には、完璧な笑顔が貼り付けられていました。この笑顔も、見る側に何の感情の変化も感じさせない類の笑顔でした。

“ああ、あの人は笑顔を浮かべているんだな”と再確認しないことにはその人の表情がどういう類のものであるのかわからない、というくらいにとっかかりのない笑顔でした。

けれど、その職員さんは私の顔と制服を見比べると、ちよつとその相好を崩しました。

「……あ！　あなたが今度こちらに来てくださる大小路さんですね？」

その、まるで少年のように崩した相好に、すこし緊張も解けてきた私は頭を下げました。それを手で制したその人は、私を下水道課に招き入れてくれました。私の荷物をさっとひったくるようにして持ってくれ、そしてここが大小路さんのデスクで、と空席になつていた席を示しました。その空席に私の荷物を置いたその職員さんは、席をまじまじと見る私にこう言いました。

「ここが、しばらくあなたの席になりますから、ご自由に使ってください」

そして、その職員さんは手で、奥の席、つまりはスポーツ新聞を読んでいる席を指しました。

「あ、あちら、ウチの課長の。。。課長」

自分が紹介されていることが分かったのか、スポーツ新聞を畳んで、その新聞越しに、その。。。課長なる人が私に顔を出しました。真っ白な髪に、ぎよろつとした目の、いかにもオヤジな人でした。その人は一言、「よお！」とざっくばらんな挨拶をすると、また新聞を広げました。

さすがに、私は面食らってしまいました。思わず時計を確認すると、午前の１０時。勤務時間帯です。にも関わらず、スポーツ新聞を広げてダラダラとしている人なんて、市民課にはいませんでしたから。

その様子に、私の横の職員さんも頭を掻きました。

「はは、あの人、ああいう人なんだよね……」

と、向こうに聞こえないように小声で耳打ちしてくれたのですが、「おい、ああいう人、ってのは、どういう意味だ？」

と、スポーツ新聞を読んでいるはずの課長が言うものだから、面食らいました。ああいう人間というのは、往々にしてとんでもない地獄耳なのです。

なははは、と困ったという感情を持て余すようにして微笑んで、その笑いを誤魔化すようにして職員さんは言いました。

「あ、そういえば、まだ、自己紹介してませんでしたね」

え？　そういえば、まだこの時点で私は自己紹介をしていませんでした。なんて無作法をしてしまったのだろう、と頭が火照るのを感じつつ、けれど無作法を取り戻すために自己紹介をすると、その職員さんは、ははは、と軽く笑いました。その笑顔は、さっき私に向けた、完全な笑顔とはまるで異質のものでした。きっと、その笑顔が彼の本当の顔なのだろうと思わせるほどに自然で優しい笑顔でした。

「いや、大小路さんの自己紹介じゃなくて、僕の自己紹介ですよ」

あ、そういえば。またもや勘違いをしてしまい、またもや頬が熱くなるのを自覚しました。

その職員さんは、右手を差し出しながら、こう言いました。

「申し遅れました。僕は、この下水道課の主任で―」

これが、私とKさんとの出会いでした。

差し出された手を、私は握りました。

Kさんは、親切でした。

業務上分らないことがあって、机の前で固まる私が質問をぶつけようとする前に、

「どうしたんですか？」

と、私の机を覗いてくれます。そして、これこれこういうところがよく分らないんです、という旨を話すと、彼はこめかみを押さえたあと、けれど笑顔でその書類を指差しながら答えを教えてくださいました。

「ええとねえ、それはここに、【出水停止】のはんこを押せばいいんですよ」

まるで、私には、Kさんのその動作が、詰め将棋の最初の一手を考える人のように見えたのです。一瞬、悩んだような表情を見せるけれど、動かさないことにはイメージが働かないから、一旦手を動かす。けれど、詰め将棋と違うのは、常に彼の答えには試行錯誤が伴わないことでした。いつも、彼の示す答えは正しいので、手を戻す必要がないのです。

一度、Kさんの仕事の仕方って、詰め将棋みたいですね、と試みてみたことがあります。けれど、彼はメガネを上げて、謙遜なのかこう言うのです。

「僕は詰め将棋がこういうものなのか知らないから一概には言えないけれど、僕らがやっている仕事はそういう仕事ではないですよ。もしかしたら、大小路さんが市民課のほうでしていた仕事はそういう仕事なのでしょうが、この書類にはこの判子、あの書類にはあの

判子、っていうここでの仕事は、むしろ工場での流れ作業に似ています。喻えるなら、流されてきた電気冷蔵庫に、足りない部品をくっつけて次のところに送る。そういう仕事なんですよ。この仕事は、長くやればやるほど熟練していきますから、心配しないで下さい」と、入ってきたばかりの私を氣遣うようなことさえ付け加えるのです。

けれど、私には、その彼の言葉にはすこし違和感を持っていました。

何せ、彼がアレはアレ、これはこれ、と書類を分けていく様子は、詰め将棋のようにしか見えないのです。彼の手の動きの何気ない瞬間に、ある種のきらめきのようなものを感じるときがあつて、それが私には、どうしても将棋を指す人を連想させたのです。

そんな風に、Kさんの仕事ぶりにどこか耽美的なものを感じつつも仕事に慣れてきた頃、ちよつとした事件が起こりました。

その日は、とにかく暑かったのを記憶しています。

紺色の制服も、もう夏服に替わっていましたし、それに自分の席で下水道に関する書類に目を通してながら左手を団扇代わりにパタパタやっていたのを覚えています。私の働いていた市役所は、一階がさまざまな部署の窓口になっていたのですが、体育館なみに広いワンルームを、机や椅子、カウンターや本棚などで区切って廊下を作り、部署を構成しているという変な職場でした。ここで何が言いたいのかというと、そういうワンルームでは、エアコンなるものが取り付けられているとしてもあまり効果が無かったり、あるいは効果が薄かったりするものだ、という一般論です。私の働いていた下水道課は市役所の建物の端っこに追いやられていた話はしたと思いますが、建物の端っこにまであまなく冷やすほど、エアコンに根性が無かったのでしょう。人でごった返すかわりにいつも快適で涼しかった市民課のことを羨ましく思いながら、私はいつものように判子を押していました。

その時、確か課長はスポーツ新聞を投げ出して、ギョ口目を天井に躍らせていましたし、その時は珍しくKさんは何もしていませんでした。Kさんは仕事が早く、その時間までには仕事を終えていたのです。しかも、Kさんは仕事に難儀している私に、「手伝いますよ」とまで言うてくれていました。けれど、あともう少しで終わりそうでしたし、それ以上にいつもKさんにお世話になりっぱなしだったこともあり、その申し出を断ってしまいました。

そんな、夏の午後の事でした。

普段は鳴らない下水道課の、電話機のベルが鳴りました。

一瞬、私はなにが起こったのか分かりませんでした。と、いうのも、下水道課の電話が鳴るなんて、初めてのことでしたから。市民課にいた頃には、それこそひっきりなしに電話がかかってきたものですし、誰よりも早く電話に出るべし、と訓示があつたくらいですから、その私が電話を取り損ねるなんて、あるはずなかつたのです。けれど、その時は電話に出そびれてしまいましたし、私の代わりにKさんが電話に出たのです。

「はい、もしもし、下水道課です」

いつもどおり、Kさんの完璧な受け答えが始まりました。それは、誰にも犯すことの出来ない、あまりに純粹すぎて触れない格調さえ秘めていました。

けれど、次第にKさんの顔色が変わりました。

「はい、はい、はい……。え？　なんですって？」

時折、手帳に何かを書きながら、受け答えるKさんでした。最初は、完璧な笑顔を貼り付けたまま受話器を握っていたのですが、次第に顔から笑顔が消えていました。その表情は、悲しそうでもなければ困惑しているでもない、あえて言うなら、無表情でした。いかなる感情にも当てはまりそうもない、という意味で、無表情でした。

「わかりました。今から行きます」

何度目かの相槌の後、Kさんは受話器を置いて立ち上がりました。

そして、机の横側に吊り下げられていた鞆とヘルメットを手に取り、課長のほうに向き直りました。課長は、やはりふんぞり返りながら天井を仰いでいました。

「課長、下水道について事故があったみたいです。行ってきます」
課長は、窓の外に視線をやりました。まるで、おじいちゃんのように深いため息を吐きました。課長、見た感じは40歳代の後半だったのですが、もしかすると定年近かったのかな、とふと思いました。そんな課長でしたが、一言、

「おう」

とだけ答えました。

「じゃ、行ってきます」

夫について【3】

もう一度律儀に言うと、彼は廊下の方へ踵を返し、行ってしまった。結局、私と課長だけが下水道課のブースに取り残されてしまいました。下水道課を包む沈黙に包まれて初めて、Kさんという人が下水道課で独特の存在感を放っている事に気づいたのでした。

「あ、あの……、課長」

私はこらえきれなくなつて、切り出しました。

「ん、なんだ」

課長は、いつも通りつつけんどんな返事を返してきました。その後、私の言葉に興味がないのか、スポーツ新聞を広げて、顔を隠してしまいました。けれど、私はスポーツ新聞越しの課長に、言葉を継ぎました。

「……あの、私も仕事が終わったんで、Kさんについていつでも、いいですか？」

嘘でした。私のデスクの上には、まだ判子が押されていない書類が山積みになっていて、今にも雪崩を起こしそうです。正直これで“仕事が終わった”なんて言えたものではありませんでした。けれど、そんな私に課長は言いました。

「……ああ、ま、いいだろう。どうせ、そのうち経験することなんだから」

その言葉の、意味がわかりませんでした。白髪でギョロ目の課長さんは、いつも言葉が足りない人でしたし、言葉なんて無駄だ、と思っている風のある人でした。

「……ありがとうございます」

私は立ち上がったからスポーツ新聞を見入っている課長に頭を下げ、そしてKさんのあとを追いかけてきました。

市役所の前にある未舗装の駐車場についたころ、丁度Kさんが車に乗り込むところでした。私が手を振ると、Kさんは驚いた、とい

う顔を隠しませんでした。

そんな驚愕顔の横に駆け寄った私は、困惑顔のKさんについてゆく旨を説明しました。すると、Kさんはカンカン輝く太陽を一瞬睨み、そして額の汗をハンカチでぐいっと拭いて、私に確認をしてきました。

「課長から、了解は取ったんだよね？」

もちろんです、と力強く頷く私に、Kさんは助手席に座るように言い、Kさん自身は運転席に座りました。

その車の中は、本当に汚いものでした。タバコの灰皿などはもう吸殻でいっぱいでしたし、その下には入りきらなかったのだらう吸殻が落ちていました。助手席の後ろには、工事に使うようなコーンや黒板、何に使うのか分からない金具部品やスコップなどの工具が置かれていました。どうやら時折使うこともあるようで、それら工具には乾いた土が、まるでパンのカビのようにこびりついていました。

「汚いでしょ？」

車を運転しながら、Kさんは言いました。はは、そうですね、と相槌を打つと、彼は続けました。

「ま、下水道課は冷や飯食いですからねえ。あんまり、グレードのいい車を買ってもらえないですし、こんなにオンボロだし」

どうやら、彼が問題にしていたのは、車そのものの汚れではなく、車が古い年式であることの方でした。きつと、長い間こんな衛生的に汚い車に乗っているせいで、衛生観念が麻痺していたのでしょうか、ゴミが多いという意味で汚いつて言ったんです、と切り返すと、彼は一瞬車の中を見渡してから、続けました。

「ああ、その視点は無かったですね。……実は、この車を汚しているのは、課長なんです」

「え？ 課長さん？」

私の疑念に、彼は答えてくれました。

「あの人、デスクで新聞ばかり読んでいますから信じられないでし

ようけど、課長、時折、現場に出るんです。その時に、ここでタバコを吸われるので、どうしても汚れちゃうんですよね」

正直、新聞を読んでいるところしか見たことのない私は、あの人もそもそ仕事をしているんですか？ と聞きました。すると、彼は、意外なことを言いました。

「なにを言ってらっしゃる。課長は、現場だと本当にすごい人ですよ」

「凄い？ 勤務時間帯にスポーツ新聞を広げてるような人が？」

私のあけつぴろげな言い方に、彼は笑いました。

「はっは、あの人にとって、勤務時間帯っていうのは、現場での時間なんです。……いや」

Kさんは、しばし考え込んでしまいました。まるで、王手への力ウントダウンを読まれてしまった棋士のように、うんうんと悩んでいました。それはまるで、頭の中にあるという論理的思考のネットワークを、無理矢理に動かしているかのようでした。けれど、答えが出なかったのか、その表情のまま、彼は言葉を紡ぎだしました。

「それも、違うかな。……きっと、あの人は、自分のことを“待機戦力”だと思っているのかも知れませんか」

「タイキセンリョク？」

「そう、待機戦力。簡単に言えば、本当に困ったときに出撃する、真打みたいなものです。きっと、あの人はそういう働き方をしたかったんじゃないかな、って思うんですが」

「それは穿った見方だと思いますけど？」

私は反論しました。このとき、もう既に数ヶ月も下水道課にお世話になっていましたが、課長が働いているところなんて見たことがありませんでした。いつも働いているのはKさんでした。私に仕事を教えてくれたのもKさんですし、各部署の会議に出席していたのもKさんでした。課長といえば、やっぱりスポーツ新聞を読んでいた。違いと言えば、日によってはそれが競馬新聞に替わっていたり、虎のマークが書かれたスポーツ新聞だったり、あるいは青い

縁取りのスポーツ新聞になっているか。それ程度の違いでしかありませんでした。

ま、と彼は前置きしました。

「そのうちわかりますよ。この数ヶ月は道路工事があまり無かったので暇でしたけど、きっとそのうち課長も動き出す時期になりますよ」

そんなこんなと話しつつづけているうちに私達を乗せた車は、あるところで止まりました。そこは、市域の一番端っこのあたりで、ギリギリ下水道が通っているあたりでした。端っこ、と聞くと、うらぶれた田舎とか竹林が広がっていたりするような印象を受けますが、その地点はたまたま市の境界が引かれているだけで、ある道を挟んでこちらはウチの市、あちらはあちらの市、と区別している程度のものでしかありませんでした。なので、その地点は普通の住宅街でした。

10年位前に開発が始まったんです、とKさんが語るその住宅街は、静かでした。まるで、世界中の音が、この住宅街の一步外からは遮断されているのではないか、というくらいに、静かでした。きつと、私が今、羽毛を手のひらから落としたとしたら、きつと落ちる音を感じ取れるのだろくな、と思わせるほどでした。

まるで、“閑静な”という形容をすべき住宅街の、雛形のような住宅街でした。

その住宅街の真ん中を走る広い道路の路肩に車を停めたKさんは、道の様子を窺いながらドアを開け、車から降りました。私もまた、それに続きました。けれど、降り立った瞬間に、異様な光景に面食らってしまいました。路肩には、まるでパンダのような配色の車が一台置かれていました。この国において、パンダのような配色をしている車は、パトカーしかありません。事情を知らない私にも、嫌な予感だけは感じることは出来ました。

そのパトカーの横に、警察官が一人立って、道を中心に時折視線を下ろしながら、手に持っているボードに何かを書いているようで

した。そして、その向こうには、道に立ち止まる住民と思しき人たちに話を聞いている警察官の姿がありました。そして、その警察官の脇には、下を向いてへたり込む女の人の姿がありました。

一目見て、それは交通事故かと思いました。けれど、しばらく観察していくうちに、その私の予想は外れていることに気づきました。事故があつたにしては、あまりに周りの風景が落ち着きすぎているのです。事故にはありがちの救急車や、人の血のあと、あるいは痛々しい車の残骸などの、事故の痕跡のようなものがまるで見当たりませんでした。それどころか、事故が起こったとき特有の、現場の熱気のようなものをまるで感じなかったのです。警察官がいるのに気がついて立ち止まる人もまばらにいましたが、警察官と2・3会話をすると、「あらあら大変ねえ」とでも言いたげな顔をこちらに向け、そそくさと去ってしまうのです。

そんなことをつらつらと考えているうちに、ボードに何かを書いているほうの警察官が私達に気づき、私達をそばに招き寄せました。「あ、市役所の方ですね」

その警官は、この暑いというのに、制服の帽子を目深に被り、私達に目を見せてくれませんでした。その警官は、目のやり場が無かつたのか、さつきまで書いていたボードに目を落としました。

「はい、私、市役所の下水道課の者です」

Kさんはそう答えました。この暑いというのに、市役所の中と一寸の違いもない、彼の完璧な受け答えにはむしろ薄ら寒いものすら感じました。警官は、その言葉にただうんうん、と頷いてボードに何かを書いているばかりでした。

「あのう、何かあつたんですか」

Kさんがそう訊いてから、警官は初めて本題を切り出してきました。

「あれを見てください」

警官は、道の真ん中を指しました。私達は、反射的にその指先を目で追っていました。彼の指が止まったのは、道の真ん中でした。

本来なら、車が行き交う道路の真ん中なのですが、通行止めでもしているのか、あるいは元々交通量が少ないのか、一台も車が通りませんでした。その道の真ん中には、中央線が一本引かれていました。けれど、その一本線は、途中で途切れていました。なんだろう？と私が目を凝らした頃、先にKさんが答えを言ったのでした。

「あ、マンホールがないですね」

そう、マンホールが無かったのです。

私が中央線の途切れと認識していたのは、マンホールによって線が途切れていたからに他なりません。いつもなら、ねずみ色の道の只中に、マンホールの黒っぽい蓋があるおかげでそこにマンホールがある、ということが分かるのですが、マンホールのねずみ色の内部が見えているせいで、こちらからだマンホールの穴が見えないのです。だから、気づくのに遅れたのでした。

「でも、何でマンホールが？」

そう首を傾げるKさんに、警官はちよつとうんざりそうな声をあげました。

夫について【4】

「え？ 市役所さんのほうがやったんじゃないんですか？」

いいえ、それはいいです、とKさんは言いました。マンホールを開くときには、道路工事に準じた扱いになるので、道路の封鎖を警察署の方にお願ひしたりしますし、そもそもマンホールを開くときには市役所の職員が立ち会うことになっているので、そんなことはありません、と、理路整然と説明しました。すると、警官は当てが外れたのか、ペンの尻で後ろ頭をポリポリと掻いて続けました。

「業者さんにお願ひしていて、おたくが忘れていた、っていう可能性は？」

傍から訊いていても、失礼な質問だな、と思いました。けれど、それが警官という仕事に必要なものなのかも知れませんが、市役所の職員だって市民の皆さんに仕事上で何か失礼なことをしてかしている可能性もありそうだ、ということに思いが至ったので、とりあえず黙っておきました。

私がそうやって口を噤む間にも、彼は説明しました。

いいえ、業者が入るときには、絶対に下水道課の方に連絡する旨を傳達してありますし、繰り返しますがマンホールを開くときには市役所の職員が立ち会う決まりになっている、と説明しました。

警官はそれでも納得してくれませんでした。しかしですねえ、と持論を曲げようとしませんのです。けれど、Kさんはそんな警官の言い分を次の言葉で打ち払ってしまいました。

「それに、です。業者さんにしろ市役所にしろ、マンホールを開いたらもう一度閉めなきゃいけないんです。なのに、辺りを見渡してもマンホールの姿が見えない。あれ、1個数十キロもするんです。だったら、穴の近くに置いておくのが人情つてもものでしょう」

それは、確かにKさんの言う通りでした。

実は私はその当時、現場に出たことが無かったので知らなかった

のですが、マンホールを開く作業を見ると、確かに蓋は穴の近くに置いていました。それはそうでしょう。どうせまた使うものを、重い思いをしてどこかに運んで、仕事が終わったらまた運ぶなんてまどろっこしいこと、いくら市役所が非効率なところとはいえどもやらないでしょう。

すると、とペンを回しながら、警官は言いました。

「と、なると、盗まれた、ということですか？」

そうでしょうね、とKさんは答えました。

今でこそ、マンホールの蓋が盗まれるという事件は後が立たないそうですが、当時はそんな事件、見たことも訊いたこともありませんでした。確かに、マンホールの蓋は金属資源ですので、売ればお金になるのかもしれませんが、同じ重いものを運ぶなら、同量のおコメを運んだほうが儲かった（しかも、合法的！）のですから、わざわざ重い思いをして、マンホールの蓋を盗もうなんて人はいませんでした。

話がそうして窃盗の方向に進んだがために、Kさんは下水道の保安担当者ということで、色々な話を訊かれていました。何週間に一回巡回をなさっているんですか？ 最後の巡回はいつですか？ 誰が、いつ、どういう風に巡回しましたか？ などという質問に、逐一彼は答えていました。

けれど、私はどうしたわけか手もち無沙汰で何もやることなく、ただこの風景を見ているただの野次馬のような気分でした。パンダのような配色のパトカーの前で話しこむ警官と市役所の職員。車の来ない道路。時折立ち止まる野次馬。そしてその野次馬に事情を聞かれ、説明していると思しき警官。それは、非日常の光景のはずなのに、どこか牧歌的でした。けれど、そうやって離れた目で見てみると、やけにマンホールの穴という空白が浮かび上がって見えるから不思議です。そして、その空白から目が離せずにいると、この空間にもう一つ“空白”と呼びうるものが存在する事に気づいたのです。

それは、女の人でした。事情を野次馬に説明している警官の脇にへたり込むようにして座り、下を向いている女性でした。このどこかほんわかとした空気の中で、マンホールの穴と同じくらいに深い空白を放っている女の人に、ようやく気づいたのです。

何があつたのだろう。私には分かりかねました。かといって、私の近くにいる警官はKさんと喋っていますし、もう一人の警官も野次馬を捌くのに必死そうで、私の疑問になど答えてくれそうもありませんでした。かといって、直にその女の人に訊くのはさすがにためられました。

そういう風に、自分の疑問を頭の中で転がしながら、何もせずにいるうちに、Kさんたちの会話は佳境に差し入っていました。

「……ふんふん、なるほど、市役所さん側の証言から考えると、盗まれたのは今日の朝ということになりますね」

つまらなそうにペンを躍らせながら、そう呟く警官に、Kさんは質問を返しました。

「で、なんですけど、マンホールに落ちた人とかはいないですよね」とすると、ちよつと口角を下げ、警官は答えました。

「ああ、人は落ちていないからまあ良し、なんだけどね」

「人“は”？　ということは、何か別のものは落ちたってことです
か」

何か別のもの、というKさんの言葉と、さつきから地面にへたり込む女の人の姿が、何故か私の中でダブリました。

ふつ、とため息をつきながら、警官は言いました。

「ええ、実は」。警官は、顎で女性を指しながら続けました。「あの女性の飼っている犬が、マンホールに落ちちゃったらしいんですよ」

その言葉を聞いた瞬間、Kさんの顔がまさに豹変しました。さっきまでの完璧な笑顔は隅に追いやられ、額にシワを寄せた顔でした。そんな顔をしているの彼を見るのが初めてだったので、最初私にはその表情の意味を図りかねていました。けれど、あの顔は素直に“

怒り”なのだろうと思いつたのに、少々時間がかかりました。そんな彼は、マンホールの穴を覗んで、口を動かし始めました。

「……て、それを早……」

「え？　なんて言っただんです？」

Kさんのぼそぼそとした声に、警官は思わず聞き返しました。けれど、この警官にしたら、これは失敗でした。何せ、彼のこの一言が、Kさんの心の琴線に触れてしまったのですから。

Kさんは、怒鳴りました。

「……どうして、それを早く言わない？」　って言っただんだ！」

そう怒鳴ると、Kさんは乗ってきた車の方に向かってしまいました。そして、中から懐中電灯と、白いヘルメットと、“立ち入り禁止”と書かれた立て看板を二個持ってこちらに来ました。その途中、立て看板を立てかけて。

「な、なにを……」

困惑する警官に、思いのほか穏やかな口調でKさんは返しました。「決まっているでしょう。犬を助けます。当然のことですが、その間、この道路は通行止めにさせてもらいます。人が落ちたりしたら危ないですから」

そう言い終わる前に、Kさんはもう一つの立て看板も立て終わっていました。つまり、この道はいつの間にか通行止めにされていたのです。

「ちょ、ちょっと待ってください」。警官は明らかに狼狽しました。

「道を通行止めにするんですから、警察への通告を……」

要は「そういうことをする前に書類を書け」というその言葉に、Kさんは反論しました。

「今はマンホールの蓋がないという緊急事態ですので、警察の方には事後承認という形でお願いします」

下手に出ているように見えて、有無を言わさないKさんの口調に、警官はたじろきました。そして、ウン、と頷くしかありませんでした。

「あ、大小路さん」

突然、Kさんは私の名前を呼びました。Kさんの丁々発止のやりとりには半ば魅了されていた私は、夢から引きずり離されるかのような感覚を味わいつつも、けれど間抜けた返事を返してしまいました。それを咎めもせず、Kさんは言いました。

「悪いとは思うんですが、大小路さんはここで待っていてください。もしかすると、定時を過ぎてしまいかもしれません。だから、先に謝っておきます」

それだけ言い終えると、彼はわき目も振らずにマンホールの穴に入っていました。いえ、むしろ、穴に吸い込まれるかのようでした。彼の足が、胴が、胸が、手が、肩が、頭が、そして白いヘルメットが。まるで、大きな口を開けた化け物の口に、Kさんが吸い込まれていくかのようなのです。そして、ヘルメットが見えなくなると、マンホールはさっきまでの空白に戻ってしまいました。

それから、一時間は待たせようか。いえ、もしかすると、15分の出来事だったのかもしれませんが、30分の出来事だったのかもしれない。けれど、私には一時間くらいの長さに感じられたというだけのことです。その間、地上に残された私や警官たちは、ずっとマンホールを遠巻きに眺めていました。まるで、祭りの山車を遠巻きに見つめる子供のよう。けれど、マンホールに落ちた犬の飼い主だという女性は、ただ下を向いてへたり込んでいるばかりで、何の動きも見せませんでした。私達はマンホールを見つめ、女性性は地面を見つめる。けれど、その視線は決して重なり合いませんでした。そのくせ、女性の醸す雰囲気によって、この場の空気が重くなっていました。

そんな風にしてKさんを待っていた私に、不意に変な音が届きました。高い音で、断続的に続く妙な音でした。そして、最初はものすごく遠くから響いているように感じられたのですが、そのうち音の輪郭がはっきりしてくるようでした。まるで、音源が近づいてくるかのように。

いいえ、“ように”では無かったです。私達の元に、実際に音源は近づいていたのです。

次第に音が近づくにつれ、その音が実は声であることもなんとなく分かってきました。キャンキャン、と甲高く鳴く動物の声だったのです。その声が耳に入ったのか、さっきまで下を向いていた女性は一辺りを見回しました。そして、マンホールの穴を凝視し始めました。

つられてマンホールの穴の方に耳を澄ませた私にも、確かにマンホールの中から声がすることが判りました。そして、そのキャンキャン、という鳴き声は、決して人の声ではない、ということも分かりました。そう、その声は、犬の鳴き声だったのです。

私達は、とにかく待ちました。皆、身動き一つ取らずにマンホールの中心を眺めていました。

やがて、ヘルメットの白が私たちの目に飛び込んできました。

夫について【5】

*

「いや、大小路さん、ごめんなさい」

赤く染まった街を掻き分けるようにして、道を滑っていく作業車。クーラーの効きが悪い上、嫌な匂いを出していました。後ろでは、よく分からない金属部品がカタカタ、と鳴りました。その中で、ハンドルを操りながら、突然Kさんは謝意の言葉を発したのです。

私はとにかく驚いてしまって、何も言えませんでした。すると、ハンドルを片手で回しながら、言い訳を言うかのように、彼は続けました。

「きつともう、勤務時間は過ぎてしまいましたから」

ふと時計を見ると、時計の針は六時を指していました。窓から外を眺めると、道端には家路を急いでいる人の姿が夕日に照らされていました。なんだか、それが何かのモニュメントのように見えたのが印象的でした。けれど、視線をKさんの方に戻して、私は言いました。

「いえ、いいんです。それよりも、良かったですね、犬が見つかった」

そうなのです。犬は見つかったのです。

Kさんが穴からあげてきた犬は、耳のたれた小型犬でした。けれど、汚水の中に落ちてしまったのか、ちよつと臭かったですし、所々泥のような染みが浮かんでいました。けれど、そんなことを問題にしないように、へたり込んでいた女の人は、その犬をぎゅっと抱きしめました。その女の人の肩からひよっこりと頭を出した犬が、苦しいよ、と言わんばかりの顔をしていました。そして、ひとしきり抱きしめたあと、女の人は、Kさんの前に立ちました。でも。

私は興奮そのままに言葉を継ぎました。

「でも、あの女の人は許せない。おかしくないですか？」

女の人が、Kさんの前に立ったとき、私はてっきり女の人がKさんにお礼を言うのだとばかり思っていたのです。けれど、そんな私の薄甘い予想は粉々に砕かれました。

女の人が、Kさんの頬を思いつきり打ったのです。少し離れたところ にいた私からでも、パチン、という威勢のいい音が聞こえました。“あんたたち市役所の連中が、しっかりマンホールの管理さえしてくれていれば、こんなことにはならなかったのよ！もし一歩間違っていたら、モリーちゃん、死んでいたかも知れないのよ！”

女の方は、確かにそう言いました。そう言っ て、Kさんの目を睨んでいました。けれど、Kさんはいつも通りの顔を崩さずに頭を下げ、「すみませんでした」と謝ったのです。

私には、理解できませんでした。なぜ、Kさんが頬を打たれなくてはならなかったのか。そして、Kさんが顔色一つ変えずに謝らなくてはならなかったのか。

打たれたほうの頬をさすりつつ、片手で運転するKさんは、まるで私を諭すかのように、穏やかな言葉を私に向けました。

「だって、これが僕たちの仕事ですから」

「でも」。私は反論しました。「別にKさんは仕事を怠っていたわけじゃない。それに、犬も助けたのに……」

夕日で真っ赤な顔を、Kさんはちよつと私に向けました。いつも通りの笑顔でしたが、なぜか、その顔には別の感情が混じっているように思えました。それは、夕日のせいだったのでしょうか。

「仕事なんです。それが」

仕事。それが仕事。失敗の上に為したことなんて、それは当然のこと に過ぎない。そんなことはわかっていたはずでした。でも、なぜか、その時ばかりは割り切ることができませんでした。だから、私は必死で噛み付きました。

「それはわかりますけど……」

不意に、Kさんの顔から、いつもの笑顔が消えました。無表情で、彼は前方を見つめていました。けれど、ポツリポツリという風に、

言葉を発しました。

「でも、思っんです。もし、僕の気持ちを汲み取ってくれる人が、家に居たらな、って」

「え？」

Kさんは続けました。

「仕事をしていていつも思っんですけど、僕のしている仕事っていうのは、誰に感謝される仕事というわけではないんです。出来て当たり前、やって当たり前。でも、地上に一人くらい、僕のことを褒めてくれる人がいたらな、ってこういうときに思っんです。……って、僕、ガラにもないですね」

彼は、弱々しく微笑みました。

市役所に帰った頃には、外は真っ暗になっていました。そして、棟の明かりのほとんどが消えていました。暗い廊下を二人で歩きながら、そういうえば私、仕事を途中で投げ出してきてしまった、ということに気づき、Kさんに話しました。すると、「きっと大丈夫ですよ」と彼は私に微笑みかけました。

下水道課のブースも、もう真っ暗でした。Kさんがスイッチを探り当てると、下水道課のあたりだけ、まるでスポットライトを浴びたように明るくなりました。

私はすぐに、自分の席に向かいました。もちろん、まだ処理の終わっていない書類を捌くためです。ちょっとうんざりとしたような気分になりながらも机の上を覗きました。けれど、その机の上には、山のように盛られていた書類が全く無く、代わりにまっ白いお饅頭とメモが置かれていました。そのメモには、

“嘘を吐くべからず。あと、差し入れ”

と、汚い字で書かれていました。

「おや、これ、課長の字ですね」

私の肩越しにメモを眺めていたKさんは、そう私に教えてくれました。そして、メモの横に二個置かれていたお饅頭を取り、1個私に寄越してきました。そして、お饅頭を一口で食べてから飲みくだ

し、言いました。

「ね？ 課長、予備戦力を気取ってるでしょう？」

「はい」

お饅頭を両手で持ちながら、私は頷きました。

なんでこんな長々と昔話をしたのかというと、この昔話に出てくる「Kさん」というのが、何を隠そう私の夫だからなのです。

この事件から数年後、Kさんと私は付き合い始め、そして交際期間1年を経て、結婚しました。仲人を立てなくてはならないのと、課長に仲人をお願いしました。課長は、「大小路君が抜けると、俺の仕事が増えるんだがな」と言いながらも、私の結婚も、仲人役も、快く受け入れてくれました。

この事件を思い起こすたび、私はいつも思うのです。

“夫と出会えてよかった”と。

きっと、私がこれからどんな人生を歩んだとしても、夫以上の人は見つからないと思います。むしろ、夫以外の人は見えないと言っても過言ではないのかもしれませんが。

でも、そういう思いとともに、こんな疑問も感じるのです。

“私は、夫の力になれているのだろうか”と。

特に、こうやって主婦以外の仕事が増えてしまった現在、特に感じている疑問なのです。昔は、ああでもないこうでもないとか話を繰り返していた時間もあつたので、問題はありませんでした。けれど、今はそんな時間ありません。

最近、つらそうな顔をして帰ってきた夫のことを、抱きしめるようにしています。30過ぎが何をやっているんだ、というお叱りの向きもありましょうが、けれどぎゅっと、強く強く抱きしめるようにしています。きっと、あの事件の犬のように、「苦しいよ」と夫は言うのかもしれませんが、でも、抱きしめるほうが、百万語の言葉よりも雄弁な気がするのです。

今、こうして原稿を書いている今、そろそろ夫が帰ってくる時間

です。

今日は、夫を抱きしめようと思います。

え？「つらそうな顔をして帰ってきた夫を抱きしめる」んじゃないのか？」ですって？いえいえ、今日は、私が、無性に夫のことを抱きしめたくなっただけです。最近ちよつとメタボ体型に近づいて、ちよつと柔らかくなつた夫の肩を、無性に抱きしめたくなっただけのことです。

でも、そうして手ぐすね引いて待つ私を夫がどう思っているのか、知る由はありませんけど。でも、三行半を突きつけられないように、頑張りたいとは思っております。

子供について【1】

“子供について”。その言葉をメモしながら、私は首を傾げてしまいました。

なぜ私が、そんなことに首を傾げるのかというと、それは担当の新藤さんのせいです。

このエッセイのテーマについては、新藤さんが私にテーマを示して、それに私が答えてゆくという形式にしている、というのは冒頭で書いたと思うのですが、当然、新藤さんの示すテーマの中には、けっこう無茶なものも紛れていたりします。例えば、「夫について」。夫という人間は、私にとって近すぎる人間なので、逆に書くのに戸惑ってしまいました。かといって、夫のことを書かないというのも、何かすわりが悪いのも事実でした。それがために、過去の断片を切り取って紹介するようなやり方でしか夫を紹介できませんでした。

そのあとに、新藤さんからこんなテーマが示されました。

『じゃあ、マリリンさん、今度は、“お子さんについて”でいかがでしょうか？』

その彼の提案を、電話口から聞いた私は思わず耳を疑いました。子供について。そんなもの、私に書けるはずは無いのです。なぜなら……。

「私、子供がいらないんです。いない人についてなんて、書けないわ」そうなのです。私と夫の間には、子供がいらないのです。そのことはブログでも公開していますし、テレビなどでも時折喋っていますので、新藤さんが知らないはずもないのです。けれど、電話口の向こうで新藤さんは続けました。

『いいえ、マリリンさん。文章というのは、そこに存在しないものでも描き出せるものです。……あ、一応誤解がないように言ってお

きますが、別にいないはずの子供をでっち上げろ、なんて言いたいわけじゃないんです。僕が言いたいのは、マリリンさんの心象風景を描き出してほしい、ってことなんです」

心象風景を描き出す？ 時折、新藤さんの言葉は文学的に過ぎるような気がします。小説好きが昂じて出版社にバイトで入り、そして就職までしてしまった人ですから、文章について理屈っぽいのは仕方の無いことなのでしょう。けれど素人の私にまで文学論をかざされるというのもちょっと困ってしまいます。受話器越しに私の白けた空気に気づいたのか、新藤さんはコホンと咳払いしてから続けました。

『要は、マリリンさんが“子供”についてどう思うか、それを書き出して欲しいんです。マリリンさんは、子供が好きなのか嫌いなのか。なぜ、そういう判断なのか。……マリリンさんが、“子供”という存在に、どういう位置づけを与えているのか、それを書き出して欲しいんです』

“なるほど”。最初、そう思ってしまいました。なので、
「じゃあ、了解しました」

と、OKしてしまったのです。

電話が切れてから、私は電話機の隅にあったメモに、“子供について”と走り書きしました。そして、その文字を目で何度も何度も――それこそ、言葉の意味を見失ってしまうくらいに――追っているうちに、私は、あることに気づいてしまいました。正直、薄々は感づいていたのです。けれど、新藤さんの演説に押されて、すっかり流されてしまった感があります。

はつきり申しますと、私の頭の中に、“子供について”という引き出しが、まるで無かったのです。

昔から想像力が貧困なせいで（ちなみに言っておきますが、料理というものに、想像力は必要ありません。必要なのは、あくまで手際と愛情だけです）、今まで経験していないことに対しては、淡いイメージさえ像を結ばないのです。

メモ帳に書かれた“子供について”という文字の前で固まってしまった私は、ふとペンで文字を囲みました。さっと丸で囲みました。そうすれば、私の頭の中に、“子供”という引き出しが出来るのではないか、という期待があったのですが、もちろんそんな簡単に出来るはずありませんでした。

どうやら、私なりに、“子供について”考える必要がありそうです。いままで、あえて避けて通ってきた、“子供”というものを、真剣に考える機会がやってきたのかもしれませんが。

そんなわけで、今回は、“子供について”、真剣に書き綴ってみたいと思います。

まず、基本的な事項から確認です。

結婚したのは私が27歳のときですから、結婚生活はもう八年目になります。夫は私より3歳年上ですから、もうそろそろ仕事の方でも中堅に差し加ろうとしています。一般企業とは違い、市役所の職員というのは勤続年数に従って給料も上がってゆく仕組みなので、今年38歳の夫は、人並みに色をつけた給料を貰ってきてくれます。ここで何が言いたいのかというと、経済的な理由で子供を育てることが出来ないというわけではない、ということです。

では、子供が出来ないのは、もしか夫婦仲が冷めているからでは？ と、お疑いの方もありませんが、それも違います。実も蓋も無く言ってしまうえば私達夫婦はラブラブです（笑）。ブログの方を見ていただければ、私の生活する家庭の空気をなんとなく感じていただけると思っております（と、ブログの宣伝を打っておきます）。では、なんで子供が出来ないのか。

正直、分からないんです。ぶっちゃけたことを書いてしまえば、「コウノトリのご機嫌を損ねてしまった」とでも言うしかないのでしょうか。

結婚したとき、子供が欲しい、と私は思いました。私が職を辞したのも、もしかすると夫の子供が欲しかった、という理由のためな

のかもしれませんが。……正直、私が根っからのぐうたらである、という理由だったのかもしれませんが。

けれど、どんなに待っても、私の中に夫の子供は宿ってくれませんでした。正直、色々試しました。最初は、古典的なオギノ式で排卵日を推定したりしましたし、それでも効果が無かったので、不妊症の可能性も疑い、調査までしました。けれど、私も夫も不妊症の兆候は見られなかったのです。お医者様からは、「不妊治療というのは、母体に負担を強いるものだからねえ」と、私には不妊治療を薦められない、ということを示されてしまいました。

その結果を聞きに行った帰り道、夫は言いました。

「そんな、焦らなくていいんじゃないかな？　きっと神様も、僕たちに新婚気分を楽しませようっていう思し召しなんだよ」

夫の実家はクリスチャンでした。その環境で育ったためなのか、時折当たり前のように“神様”とか“思し召し”とか、そういう言葉が口をついて出るのです。きっと、夫の実家というのは、神様を当然のように敬い、日々出会う数々の出来事に対し“思し召し”と名づけ、生活してきたのでしょう。正直、普段は夫のそんな癖に、ちよっと辟易していた私も確かにいたのです。

子供について【2】

けれど、この時の“神様”という言葉にばかりは、ちょっと救われた気分になったものです。そうか、私のせいでも夫のせいでもない。神様という、どういふお顔だかも分からない人のせいなんだ。そういう風に納得できれば、さほど気分は重くなりませんでした。

そんなわけで、私には、“子供”というものが、どういう感触を持っているものなのか、今ひとつ判ってはいません。私の近くには私を育ててくれた母がいますし、友人などにも既に母になっている人もいるので、やはり色々な話を聞きます。目に入れても痛くないと言われたところで、私にはその言葉が持つ寓意を読み取れないのです。

とにかく、私にとって子供というのは未だ分からない世界の出来事ですし、イメージというイメージも浮かんでいない、というのが実状なのです。

けれど、こうしてエッセイなどというものを書かせてもらう機会に恵まれて、こうして子供について考えてみると、私の心の中でうずく疑問は、ただ一つに過ぎません。

“もし、子供がいたとしたら、私はこうして有名人になっていたのだろうか”

そもそも私が有名になったのは、ブログの評判からであることは既にお話ししました。そして、ブログをはじめたきっかけは、主婦業の合間の暇つぶしのためだということも、お話ししました。けれど、本来、主婦という職業はそんなに暇なものではないのです。私の場合、たまたま子供が出来ないから暇だった、というだけで、お子さんがいらつしやる方、―特に、私と同世代のお母様の場合―、学校の集まりとか、子供の習い事の応援とかで忙しいという話をよく聞きます。

子供のいない私は、子供に振り分けるはずの時間を持て余し、そ

して、その時間を使ってブログを立ち上げたんです、きつと。

いいえ、それも少し違うのかも知れません。

そもそも、私は子供のいない空白に、料理研究という“趣味”を無理矢理に押し込んで生活していました。その趣味の成果を、友人の薦めでブログで紹介したのですから、順序が逆なのかも知れません。

とにかく、今の私が存在するのは、“子供がいない”という事実そのものによってなされたものなのでしょう。

ここで誤解して頂きたくないのですが、別に私は、子供がいなくてよかった、と言っているわけではありません。ただ、事実として私には子供がいなくて、それがために今の私がいるのだろっ、という推論を述べているに過ぎません。

むしろ、私は子供が欲しいです。

愛する夫の子供を育ててみたい、という感情は、決して不自然な感情ではないと思います。

けれど。コウノトリの機嫌を損ねてしまった私に、子供という名の天使は舞い降りてきてくれませんでした。

だから。私は料理を作るのです。

きつと、心のどこかに、夫に対してすまないと思っている自分自身がいるでしょう。自分でも、子供が出来ないのは自分のせいではないことくらい、わかっています。だって、お医者様は、別に妊娠が難しい体というわけではない、と太鼓判を押されてしまっていますから（念のため言うておきますが、この言質は色々なお医者様から頂きました）。けれど、理屈でそう割り切れたとしても、理屈で割り切ったあとに残るしこりは、結局私の中に残ってしまっています。結局、“私が悪いのではないか？”という自問は、いつも私の前に立ちはだかっているのです。

けれど、理屈で割り切れないものというのは、取り除くのが難しいものです。だって、理屈で割り切れない澱には、一切の因果律や理屈を受け付けられないからです。

あなたの子供を産めなくて、ごめんなさい。

そんな、言葉にならない謝罪の代わりに、私は料理を作り始めたのかもしれませんが。そして、夫にその料理を食べてもらうことで、少しずつ私は心の澱を取り除こうとしていたのではないのでしょうか。

と、書いたのですが、実は今、料理をするのが楽しくてしょうがありません。

ありがたいことに、夫は私の料理を「おいしい」と言って食べてくれます。そして、的確な意見をくれます。「ここは、こうしたほうがいいんじゃないかな」とか、「もう一味足りないんだよなあ」とか。

そうして、夫とああでもないこうでもない議論しているときに、私はいつも満たされた思いに浸ることが出来るのです。

夫とそうして共同作業しているとき、ふと私は思うのです。

“これが、育むってことなのかな？”

子供を育てた事のない私は、“育む”という言葉の重みを、まだ知りません。でも、私とて人間ですから、頭を使って類推することはできます。そして、私が“育む”という言葉で思いついたのが、料理を作る際の、夫との共同作業なのです。

きつと、子供を育てるというのは、夫の笑顔を見たい私が必死で生み出して、そして夫の笑顔を見て、そのあと二人で洗練されたものに近づける、という、私の厨房での作業そのものなのだろうな、と思えてならないのです。そして、だからこそ私は料理というものに対し、子供を育てるという行為の、代償と捉えているのかも知れません。

その結論を、夫に話してみました。すると、夫はちょっと残念そうな顔をしました。

「え？　じゃあ、子供が出来たらマリリンさんの創作料理が食べられなくなっちゃうの？　残念だなあ、マリリンさんの料理、大好きなのに」

そう、何の屈託もなく笑う夫の子供が、私はたまらなく欲しいのです。

大小路マリリン風・料理具の選び方【1】

皆様、「弘法は筆を選ばず」という格言をご存知でしょうか。

どうやら、達筆だったという（実は私、学生時代、社会科の成績は赤点ギリギリだったので、この原稿を書くに当たり百貨辞典で調べて分かった事なのですが）弘法大師・空海に引つ掛けた格言のようです。つまり、達筆で知られた空海さんは、筆の良し悪しなど問題にもせず、どんな筆でも達筆を書くのだ、ということです。そこから転じて、“本当の名人は道具を選ばないのである”、という謂いに使う言葉です。この格言は、「人間の能力」というものを、最大限に信賴している言葉と言えましょう。

でも、一方でこんな格言もあります。「弘法にも筆の誤り」。

……達筆で知られた空海さんも、筆の選択の失敗で書を書き損じることがある、というのです。実はこの格言、猿も木から落ちる、という格言と同じ意味の格言なのですが、でも、釈然としないものが残ります。

結局、弘法さんは、筆を選ばないのか、それとも筆を選ぶのか。

この疑問を夫にぶつけたところ、夫はこう切返しました。

「いや、“筆の誤り”っていうのは、弘法さんが道具としての筆を間違った、ってことなんじゃなくて、筆遣いを誤った、ってことなんじゃないの？」

夫という人は、常に私とは異なる視点を持ち、それをイヤミなく私に示します。このときもそうでした。そう言われてみれば、“筆の誤り”は筆遣いを誤った、という風に解したほうが正しいのかもしれないな、と私に思わせるだけの力が、夫の言葉にはあったのです。

でも、そう考えたとしても、まだ疑問が残ります。“筆を選ばない”ほどに卓越した書道家・弘法さんが、書き損じなんてするのか

しら、と。

……と、冒頭につらつら書いて何が言いたいんだ、お前は！とお思いの事でしょう。いい加減、能書きを垂れるのは止めにしまして、今回のテーマに入りたいと思います。

今回のテーマ、それは、「大小路流・料理具の選び方」です。

選び方、という言葉に、ハハーン、と思われた方、ものすごく察しがいい方ですね。そうなんです。私、大小路マリリンは、道具を選ぶクチなんです。……弘法さんほど卓越したものを持っていないので、道具に頼るしかない、という面も否定は出来ませんが。

皆さん、料理具の売り場に足を運んだことはありますか？

鍋やオタマ、フライパンが乱雑に置かれ、包丁やペッパーミルが整然と置かれて、鈍く光るピーラーや缶切りが山のように置かれている売り場です。最近は、ホームセンターなどの隆盛で、そういう光景を目にする機会が増えたように思えます。

あそこには、料理のレシピが転がっているのです。

例えば、あなたが圧力鍋というものを知らずに、料理具売り場に行ったとします。そして、圧力鍋というものに出会うとします。その瞬間、あなたの前には、今まで料理できなかった料理へ続く扉が現れたのです。あとは、あなたがその扉をノックするか否か。「今回はお金が無いわ」という事だったら、来月買えばいいのです。別にいらないわ、ということであれば、その扉をノックしなくてもいいのです。

けれど、料理、というものを多少なりとも知っているつもり私としては、新しい料理の扉に誘ってくれそうな料理具は、買うに越した事はない、というのが私の意見です。……って、商売っ気が丸見えですね（編集部注：マリリンさんは、料理具メーカー・プロツケン社のCMに出演している）。

さて、肝心の選び方なのですが、いくつか選び方があります。一個一個列挙しつつ、逐一説明を加えていきたいと思います。

<1、新しいレシピが見えるような料理具を選ぶ>

これは、さつき述べたことと重複するのですが、一、二を争うくらい大事な事なので、また書いておきます。料理具の中には、新たな料理の可能性を開いてくれそうなものが存在します。それがどういうものか、というのは正直、私には分かりません。それは、あなたの家のコンロや他の調理具の状況にも関連する話のためです。日本の厨房ではありえないと思いますが、例えばあなたの家に包丁がなかったとしたら、店に置かれている包丁は、新たな料理の地平を開いてくれる可能性を持っている料理具と言えます。あるいは、こちらは、きつと持っている方の方が少ないと思うので書くのですが、ガス式のオーブンがないあなたにとっては、ガス式のオーブンはあなたにとって料理の可能性を広げる料理具と言えましょう。え？「そういう商品って、高いんじゃないの？」ですって？

いいえ、そんなことはありません。おろし金で考えてみましょう。あなたがおろし金を持っていないとします。けれど、数百円でおろし金を買ってきたとしたら……。焼き魚の添え物として、大根おろしができるようになります。私の言う、「料理の可能性を広げる」ものというのは、決して高い商品だけではないのです。

もちろん、そういう商品の中には、高いものが混じっているのも事実です。さつき例に出したガス式のオーブンなんて、それこそ電化製品並みにお値段が張るものです。そういう商品も買わなくてはならないの？ という疑問が、当然湧くと思います。

けれど、私はこう答えます。「買わなくてもいいです」と。

こう言うてはなんですが、料理なんて、所詮は生活の一部です。私のように、料理が生活の多くを占める場合はさておいて、普通の生活を送ってらっしゃる方々にとっては、料理なんて日常のひとつコマに過ぎません。そのひとコマのために、家計の9割を使ってしまうような生活をするなんて、主婦の経済感覚としてありえません。ので、料理の可能性を広げるからといって、家計を切り詰めてまで料理具を買う必要はないでしょう。

あと、この話に関連することなのですが、料理具というものには、

一期一会というのがありません。

洋服屋さんで店で気に入った服を見つけ、でもお金がないからまた今度、と心に決めて別れてから、もう一度店に行ってみると売れた後だった、という経験は、女性ならば「あるある」と頷いて頂けると思いますが、料理具に限ったことを言わせて貰えば、そんなことはありません。なぜなら、料理具というのは、あくまで実用品だからです。厳密なことを言えば、料理具にも流行り廃りがあるのですが、洋服ほどのものではありません。それに、実用品というものは、多少のデザインが変わろうとも、その目的がある以上、形を大幅に変えるということはありません。仮に、何らかの形でこの世から姿を消してしまった調理具があったとしても、それは調理具としての性能に疑問符がついていたり、あるいは商品の掲げる“目的”というものが、まるで一般的でない場合のいずれかです。つまり、消えてしまった商品というのは、そもそも商品価値がなかった、ということに過ぎません。

こんなつらつらと書いて何が言いたいのかというと、料理具というのは洋服のように、人気のあるモノが売り切れる、というものは無いということです。

なので、安心してお金を貯めていただきたいと思います。

< 2、手に馴染む商品を選ぶ >

案外見落とされがちなのですが、これも重要です。

海外の調理具ブランドなどを見ると、日本人の手に合わない商品があることもままあります。それは当然のことです。なにせ、日本人の方が、外人よりも体が小さいのですから。それに、海外では煮込み料理が一般的ですので、煮込みに付随する調理具が、より大きく発達した面も否めないと思います。

最近持て囃されている「海外ブランド」を否定するわけではありませんが、買う前に確認して欲しいのです。

具体的には、どうやって確認すればいいのでしょうか。

店で商品を見たら、まずは手に持ってみてください。その時に、

ちょっと振ってみてください（当たり前ですが、包丁などを振るときには、周りを気にしてくださいね。振り方によっては、逮捕されてしまいますよ）。そして、その商品そのものの持つ雰囲気味わってみてください。雰囲気というのは、例えば重さ。例えば重心。例えば、手に馴染むか否か。いいえ、そんな微妙な言葉では説明しきれないものがあります。それがゆえに、私は“雰囲気”という言葉を用いたのです。

“雰囲気”は、言葉では語れません。なので、言葉を一瞬忘れてください。連れがいる場合、「うわあ、この包丁、軽いね」とか、「切れそうだね」とか、その手の感想を述べるのさえ憚ってください。まるで、己が心音に耳をそばだてるようにして、その料理具の持つ「音」を聞いてください。

多分、調理具を売っている店には、同じ商品が数十はあるでしょうが、その中に、「私のためだけに作られたんじゃないかな」と疑いたくなるほどに、あなたの手に馴染む一つが見つかるはず。一応言っておきますが、あなたのための一品というのは、必ずしも高い商品だけに起こる現象ではありません。私の例ですと、私が今愛用している果物ナイフは、なんと500円ポツキリです。正直、手に馴染むもの、というのは値段で計れないものがあります。

実際に手にとって、それで自分が領けるような商品を探す。そこに尽きるのだと思ってください。

<3、統一感を意識する>

正味な話、<2>でお話ししました選び方というのは、ちょっと上級者向けです。あれは、ある釣り人による、自分にあつた竿を選ぶときの選び方を参考に、私が調理具向けにあつたえ直したものです。これは正直、料理を愛する主婦・大小路マリリン流の秘伝のよなもので、人に伝えるようなものではないのです。と、いうより、自分だけで理解できていればいいものなのです。

けれど、出し惜しみをするようなものでもないでこうやって言葉で説明してみたのですが、やはり言葉では尽くせない何か、しか

も、一番大事な何かを伝えそびれているような、そんな空虚を感じているのです。言葉というのは、水なのです。そして、それを紙というザルで掬ってみたところで、ザルにはわずかばかりの水も残りません。そしてザルの中で残ったわずかばかりの水で以って、皆様の咽喉の渴きを潤そうとしているかのような作業を、さつきまでやっていたわけです。

正直、＜2＞で説明したことを、感覚的に理解できた方がいたのなら、＜3＞以降はお読みにならなくても大丈夫です。＜3＞以降というのは、あくまで＜2＞を噛み砕いたもの、あるいは＜2＞を言い換えたものだからです。

けれど、噛み砕く、という作業には、それ自体に変質を含んでいます。例えば、くるみを想像してください。くるみを、ライオン型のくるみ割り人形で、文字通り「噛み砕く」とします。そうして、くるみは食べられるものになります。けれど、くるみ本来の形は、失われてしまうのです。

大小路マリリン風・料理具の選び方【2】

何が言いたいのかというと、あくまで<3>以降は、<2>への理解を進めるための方便に過ぎないということです。<3>以降は、あくまで<2>の断片に過ぎず、しかも噛み砕く段階で失われてしまったものもある、ということを理解して欲しいのです。

さて、これedyouやく本題です。

冒頭で、統一感を意識する、と書きました。

統一感を意識する、とは、また抽象的な、と思われるかもしれませんが。けれど、これはそんなに難しいことはありません。きっと皆さんにも頷いていただけるようなことだと思います。

例えば、食器などの色を揃えたりしませんか？ 例えば、お部屋を似たような色でまとめたりしませんか？ それはまさに、統一感を意識しているのです。

商品を手にとったとき、こういう風に考えてみてください。

「私の家にある家具とか、食器とか、あるいは調理具の周りに置いても、違和感がないかしら」

そう、違和感。違和感の方に目を向けて欲しいのです。

例えば、一人暮らしの家庭に、大きな土鍋が置かれている光景は、ちよつと奇異に映るものです。一人暮らしなら、別に一人用の小型土鍋でいいのです。そういう風に、「これはちよつとウチに合わないでしょ」と感じたものは、あらかじめ頭の中のリストから弾いておけばいいのです。あるいは、収納スペースのことを考えるのもいいでしょう。収納スペースに入り切らないような、ものすごく大きなものを買ってしまうのもどうか、ということになりますよね？

また、これまで長く使ってきた調理具とのバランスを考えるのでもいいかもしれません。ともかく、そうして自分にとって違和感のある調理具を弾いていけば、少なくとも失敗はなくなるでしょう。

<4、自分の筋力にあった商品を探す>

これは、女性ならではのといいます。

調理具、特にフライパンや鍋など、大きいものは、非常に重い場合が多いです。なので、女性の細腕では上がらない、という物だっ
てけっこうあります。私はかなり昔から料理をしていましたし、力
もあるほうなのであまり意識しなくてもいいのですが、箸より重い
ものを持ったことがない、という方もいらっしゃるのでしょうか
ら、その方向けに説明したいと思います。

道具というものは、あくまで振り回すもので、振り回されるもの
ではありません。重さのせいで振り回されてしまうのでは、やはり
道具として問題があります。それがいかに、とてつもなく魅力的な
商品だとしても、です。

調理具を手にとったときに、ちょっとその重さについて思いを致
してみてください。しかも、己の想像力をフル動員して、鍋やフラ
イパンに調理中のものが乗っかっているのをイメージしてください
きつと、「これはきつと大丈夫そうだ」と思える商品もある反面、
「これは絶対に無理だな」と思える商品もありますね。要は、「こ
れは絶対に無理だな」の方を、買わないようにすればいいのです。

なお、どのフライパンを持っても、「絶対に無理」な方は、申し
上げづらいのですが、料理を諦められるか、あるいは筋肉を増強し
てください。料理というのは、肉体労働です。肉体労働に耐えられ
ないのであるならば、やらないか、あるいはそれ向けに体を鍛える
しかありません。

どのフライパンも無理を感じたあなたは、とりあえず腕立てから
挑戦なさるか、斜め懸垂に挑戦するのも楽しいかもしれません。

< 5、ビビビと来たものを選ぶ >

こう書くと、まるで某国民的アイドルさんのようですが、でも、
この感覚って大事です。

手に持った瞬間、あるいは一目見た瞬間に、「あら、何この料理
具！？ 素敵！ 是非欲しいわ」っていう料理具に出会うことがあ
ります。そういったとき、背中にビビビ、と電流が流れるような感

覚に襲われるものです。私、医学に造詣がないのでなんとも言えないのですが、あのビビビ、というのはきつと、脳がフル回転して為されるものなのでしょう。

と、いうか、あのビビビという感覚は、「本能的な好感情」なのでしょう。人間、「一片の文句もつけようがないもの」にはそうそう出会えないようになっていくようです。けれど、あまりに自分の好みのものと出会うと、脳がパニックに陥って電気をビビビと流して、脊椎がショートしてしまうのではないかと。

なので、この感情に従って買い物をすれば、とりあえず失敗がないでしょう。

ただ、一日に何度もビビビという感覚を覚えてしまう過敏な人や、何にでも「可愛い！」と言ってしまふ癖のある方には、あまりオススメできる方法ではありません。そういう方がこの方法を実践すると、要らない調理具で台所が溢れかえってしまいますので。

< 6、安い商品を選ぶ >

これはコツ、というより、むしろリスク回避の手段でしかありません。

こう言うては実も蓋もないのですが、いい料理具を選ぶためには、目を肥やすしかないのです。では、目を肥やすためには何をすればいいのか。当然、料理具をたくさん見て、たくさん手にとって、たくさん使うしかないのです。

けれど、そうやって目を肥やすためには、やはり失敗はつきものです。かく言う私も、なんだかおかしいなあ、と違和感を持ち続けたまま使い続けた包丁や、その違和感が決定的だったために収納庫行きになってしまった鍋など、かなりあります。

例えば、Aさんが千円の包丁を買ったとして、手に合わなかったとします。一方Bさんが一万円の包丁を買ったとして、手に合わなかったとします。AさんもBさんも、「これはちょっと使いこなせないわ」と、収納庫行きにしようと思いました。では、ここで問題です。AさんとBさん、どちらの方がより損失が大きいですか。

当然、Bさんです。

つまり、私が言いたいのはそういうことです。

<7、色々な料理具を使ってみる>

最後のコツにして、一番重要だったりします。

<6>でも書きましたが、目を肥やすためにはたくさんモノを使うしかありません。なので、たくさんモノを使ってください。

でも、どうやって？ という向きもありましょう。

買う、というのも当然、一つの手段です。けれど、目を肥やすためにモノを買うのもバカバカしいですし、そもそもお金がもちません。だって、料理具の中には、コンロとか電子レンジとか、そういう高い買い物だって含まれるのですから。

なので、友達がいる人は、友達の家に遊びに行ってみましょう。私も主婦なのでよく分かるのですが、お昼を跨ぐと、大抵向こうの奥様は食べ物を作ってくれます。そのときに、「私も手伝うわ」とばかりに台所に入らせてもらい、使わせてもらうのです（一応書いておきますが、仲のいい友達同士でやってくださいね。それに、一度お呼ばれにあつたら、今度はその友達を自宅に招くなど、気配りを欠かさないほうがよろしいかと思います）。

また、コンロに関してはという条件付きなのですが、実は全国にショールームなるものがあります。それはコンロのメーカーさんやガス会社、最近では電力会社などが主催しているのですが、そこでコンロの使い勝手を見るのも、なかなかよろしいかと思います。

と、ここまで書いてみて何なのですが、やはりこうやって明文化してみると、やはり伝えられないものが残ってしまうのを自覚しています。私の心にある、とめどない考えをこうやって紙に載せるとどうしてこんなにも空虚でわずかばかりの真実も残らないのかな、とため息を吐きたくもなります。やはり、直接会って、一対一で喋るのが一番いいコミュニケーションなのかな、とも思います。

けれど、そうやって顔と顔を突き合わせて、私の思いを伝えるこ

とが出来る人は、ほんのわずかにすぎないのです。それは、私という人間のキャパシティの問題ですし、そもそも人間というのは、ウン万人単位で人と知り合うことなど出来ないのです。

だから私は、この文章を書いている今、ただ祈っています。

私の文章の一センチンスでも、あなたの心に引っかけりますように、と。

本を読む、という行為も、ザルで水を掬うかのごとき行為なのです。そして、ザルで取った水で、乾いた咽喉を潤すような、遠大でまどろっこしい作業なのです。私の言いたいことを文章に起こす時点で既に伝えそびれてしまっているものがあるのですから、あなたがこの本を手に取りられて目を通した頃には、私の伝えたかったことなんて、わずか一センチンスも残っていないかもしれないのです。

だからこそ、私は祈るのです。

エッセイを書き始めて早一ヶ月になるのですが、ここに来て、ようやく文章というものの難しさにぶち当たっている今日この頃なのです。

友人について【1】

高校の頃、私は文芸部という部に所属していました。

高校の頃の私は（今でもそうですけど）、運動神経があまりよくありませんでした。なので、バレー部やバスケット部といった花形運動部や、筋トレが多いと有名だった吹奏楽部に入るのはちょっと憚られたのです。かといって、英会話部や絵画部みたいな、センスが問われそうな部に入るのもちょっと憚られた私は、とりあえずセンスが無くとも何とかかなりそうな文芸部に入ったのです。

けれど、文芸部というところも、かなりセンスが問われるところだということに、当時の私は気づいていませんでした。というか、そもそも、部の名前になっている「文芸」とは何か、よく分かっていませんでした。なので、文芸部に入っつてすぐ、文芸部の部長は私を持て余したようでした。キレイな長髪をポニーテールにまとめたその部長は、メガネを上げてから、頬を撫でました。

「え？ 文芸部が、こういう活動をするのか知らないで入ってきたの？ 変わった新入部員ねえ！」

当時、文芸部の部室は地学室でした。30人くらいを収容できる教室に、大きな机が8台ほど置かれていました。そして、その机の前にわずか7、8人の部員達が離れて座り、紙に何かをカリカリと書いていて、誰ともクチを利かない、その光景が目に残りました。北向きの窓しかない地学室は、そんな部員達の醸す雰囲気と相まって、水の底のようにひんやりしていました。ただ、カリカリ、という音が、響いていました。

「…… 大小路さん、聞いてる？」

周りの様子に気を取られ、部長の話を聞きそびれ、私は謝りました。すると、部長はちよつと嫌な顔を浮かべながらも、また説明を加えてくれました。

あのね、文芸部、っていうのは、小説を書く部なの。作文じゃなくて、小説よ？ 分かる？ 例えば、石原慎太郎の「太陽の季節」、読んだことある？ あるいは、近藤啓太郎とかハルキの本。ああいう、アーティスティックな作品を書いて、それを一年に一度会報にまとめて、皆に配る、そういう活動をするわけ。

当時、私の頭の中には、「小説」なんて言葉をしまっておく引き出しなんてありませんでした。正直な話、石原慎太郎さんも近藤啓太郎さんもハルキさんも、「有名な物書き」程度の認識でした。なので、先輩の話も、半ば異国の言葉のようにしか聞こえなかったのを記憶しています。そんな私に、何を思ったのか部長はこんなことを訊いてくるのです。

「ところで大小路さんは、好きな作家さん、いる？」

繰り返しますが、当時私の頭の中には、「小説」という言葉をしまっておく引き出しがありませんでした。そもそも、私はあまり小説なるものを読まず、作家さんの名前なんて、パツと出ないのです。しばし悩んだ私は、ようやく作家さんの名前を言いました。

「ほ、星新一です……」

正直、思いつきでした。たまたま、家にある本の多くが星新一さんのものだったこともあり、名前を覚えていただけという、それだけの話でした。けれど、その受け答えは、私にとって乾坤一擲の手のようでした。部長は、顎をさすりながら、声を上げました。

「へえ、けっこう渋いところが好きなのね？ それに、SFか……。今、ウチの部でSFを書いている人はいないから、あなた、目立つかもしれないわね」

なるほど、どうやら、部長は星新一さんに詳しくなかったようです。ま、それは私も同様なのですが。私が胸を撫で下ろしたのは、言うまでもありません。

「で」

やれるだけ質問攻めをし切って私に興味をなくしたのか、部長は私の横にいた、もう一人の新人部員の顔を覗きこみました。

私の横にいたのは、男の子でした。私の通っていた学校は制服があつて、男の子は詰襟を着る決まりでした。もちろん、その男の子も真新しい詰襟を着ていました。清潔な髪の毛を中分けにしている髪毛にはいわゆる天使の輪が浮いていました。けれど、私が何より注目したのは、彼のかけているメガネでした。彼のメガネのレンズにはちよつと茶色が入っていて、まるでサングラスのようだったのです。高校生当時、周りにサングラスをかけるような洒落っ気のある人はいませんでしたから、印象的だったのです。

部長は、彼に聞きました。

「君は、好きな作家さん、いるの？」

しばし、彼は考え込んだようでした。まるで、沈黙を楽しむようにして、淡く微笑んでいました。

彼は、おもむろに口を開きました。

「僕は、アガサ・クリステイト、ラブクラフトが好きですね」

弁の立ちそうな声でした。利発、それがゆえに棘のありそうな、そんな声でした。そして、その後、彼は淡く微笑みました。私には、彼の笑顔が、まるで部長に何かを迫っているように感じられました。部長は首を傾げました。

「あら、海外作家さんが好きなのね。アガサは知っているけど、ラブクラフト？　だあれそれ？」

その言葉に、彼は答えました。

「ああ、クトゥルフ神話の創始者ですよ」

「く、クトゥ...？」

“クトゥルフ”という言葉に難儀している部長の様子を見て、彼は微笑を崩しませんでした。心なしか、ちよつと物寂しい目で、部長の顔を眺めていました。

「まあ、マニアックな作家さんですから」。彼は言いました。「でも、僕の書く文章は、どうしてもラブクラフトとは切り離せません」
「へ、へえ、まあ、いいけど」

まるで異界の生物を見るような目で、部長は彼の顔を覗きこみま

した。

どうやら、この年の新入生を、先輩達は色々な意味で持て余しているようでした。私も、彼も、持て余されていたのでしょうか。

これが、彼、根岸君との出会いでした。

文芸部の活動というのは、かなりユルい活動でした。

そもそも、文章を書く、という“一人で出来る”ことを活動の第一に上げている部なのですから当然ですが、週に一回の例会を除いて、部室に集まる義務はありませんでした。別に用事があれば帰ってしまってもよいし、別に家で文章を書いても構わない、とのことなので、週に一回しか顔を合わさない、という人もいました。

けれど、私は部室に毎日のように行きました。

断っておきますが、文章を書いていたわけではありませんでした。がらんとしてひんやりとした部室（地学室）で、何もしないでボケツとしながら、窓の外で頑張る野球部の様子をただ目で追うような生活をしていました。そんな私を見かねたのか、四月のある日、部長は私に本を差し出してきました。

「とりあえず、あなた、本を読みなさい。いい本を読めば、いい文章も書けるから」

そのとき先輩が出してきたのは、夏目漱石の「我輩は猫である」の文庫本でした。

その本を私に握らせたあと、彼女は、これからちよつと用事がある、だから部室の管理をよろしく、あなたが帰るときに、顧問の先生に鍵を渡せばいいから、とだけ言い残し、地学室のドアをガラガラと開いて行ってしまいました。

一人残された私は、辺りを見渡しました。普通の教室にない、下にスライドする大きな黒板。大きな机。そして、その周りに置かれた四角い木製のスツール。ひんやりとした空気。それらが、まるで私のことを窺うように、息を潜めてそこにありました。

どうしたものか、としばらく私は考えました。このまま、鍵を顧

問の先生に返して、帰ってしまおうかとも思ったのですが、それもなんだか億劫で、結局このまま部室にいることにしました。そして部長が寄越した本でも読もう、と思い立ち、「我輩は猫である」を開きました。

が、五分で飽きてしまいました。

そもそも、私は本を読むのが、さほど好きではないのです。一字一文字、あるいは一単語一単語の意味は掴めるのですが、その意味がわかる単語たちが積み重なって構成されているはずの文が、そして文が積み重なって出来ているはずの段落の意味が、急速にぼやけてしまうのです。

めまいのような感覚を覚えた私は、本を机に置きました。

その瞬間、地学室のドアが開きました。

「ちース。遅れました、ってあれ？」

根岸君でした。色の入ったメガネを上げながら、彼は私に言葉をぶつけてきました。

「……今日、君一人？」

「ええ、そうよ」

確か、こんなそっけない返事をしたような気がします。と、いうのも、根岸君の口調から緊張の色のようなものを、まるで感じなかったからです。このとき、私は緊張していたのです。初めて話す相手に、気負いもなしに話せる人間というものに、私は緊張したのでしょう。

ふーん、と興味無さそうな相槌をうつと、根岸君は私の座る席の横に座りました。そして机の上に原稿用紙を乗せたあと、彼は言いました。

「へえ、大小路さんって、そんな本を読むんだ？」

彼は、私の前に伏せられた「我輩は猫である」を指しました。私は、首を横に振りました。

「いいえ、そもそも、本なんてあんまり読まないわ。それに、作文なんて吐き気がするくらい嫌い」

「え？　じゃあその本は？」
「

友人について【2】

変な声を上げる根岸君に、私はさっきの出来事を少し話しました。最初彼は、ふん、と生返事を浮かべていましたが、そのうち私の言葉を遮って、言葉を放ちました。

「なるほど、部長さんに趣味を押し付けられた、ってわけだ」

「趣味？」

純粹に私が聞くと、根岸君は苦々しく笑いながら続けました。

「ああ、最初、あの人に会ったとき、石原慎太郎とか近藤啓太郎とか、ハルキさんとかを引き合いに出していただろ？ で、“アーティストック”がどうの、とか言っていただろ？ きつとあの人、日本の純文学が好きなんだよ。だって、石原慎太郎も近藤啓太郎も、芥川賞作家だしね。でも、ハルキさんを例に出したのは、ちょっと意外かな」

彼の言葉は何一つ分かりませんでした。そもそも、「純文学って何？」状態でしたし、部長が“アーティストック”という言葉を使っただけでなぜ純文学好きになるのか、とか、「ハルキさん」を例に出したのが何で意外なのか、私にはまるで分かりませんでした。けれど、分かったことは一つだけあって、それは、彼が非常に分析的な人だという点でした。

曖昧に頷いていた私に、彼は言いました。

「あんまり、日本の純文なんて読んでもしょうがないぞ」

彼は、ちよつと語尾を強めながら続けました。

「いや、純文学に価値がないとは言わない。純文学っていうのも、結構面白いからね。でも、純文学にだけ閉じこもっているんじゃないよ。つまらないよ」

「“純文学に価値がないとは言わない”んなら、どうして“読んでもしょうがない”ってことになっちゃうの？」

私はそう聞きました。すると、待ってました、とばかりに微笑を

浮かべ、続けました。

「日本文学は、学校の先生が教えてくれる。でも、海外文学は誰も教えてくれない。わざわざ教えてくれるものを予習するより、誰も教えてくれないものを読んだほうが、楽しいに決まっているでしょう？」

彼の言い分には、説得力がありました。彼の理屈は、まるで押し付けがましいものではありませんでした。けれど、仔細に観察してみると、彼の理屈にはまるで逃げ場がありませんでした。まるで、目に見えない蜘蛛の糸が張り巡らされているかのような言葉でした。「でさ、どうして大小路さん、文章を書くのも読むのも嫌いなのに、どうして文芸部なんて入ったの？」

彼は、唐突に訊いてきました。唐突に何よ、と聞くと、彼は机の上に頬杖をついて、私の顔を覗きこみながら続けました。

「いや、さっきそういう話になったじゃないか」

ああ、なるほど。そういうえば、さっき、“書くのも読むのも嫌い”と自分で白状していました。それを、根岸君は疑問に思っているのでしょうか。私は、答えました。

「いや、この部に入ったのは、文科系の部活だったから。ただ、それだけなのよ」

「なるほど、幽霊部員志望、ってわけだったんだね」

私は、首を横に振りました。

「違うわ。文科系の部活で、バリバリ活動したかっただけ。でも、困ったことがあって」

「困ったこと？」

不思議そうな顔を浮かべる根岸君に、私は言いました。

「どうやら私、“文芸”に向いてないみたい。それが一番の問題点」
「なるほど、確かにそれは問題だ」。彼はまるで他人事のように笑いました。事実、他人事だったのでしょうか。けれど、顔を急に真面目な顔に戻してから、続けました。「でもさ、文芸に、向いているも向いてないもないと思うけどね。もちろん、プロになるんなら

いざ知らず、ここの文芸部で目立つくらいの記事力なら、これから頑張れば、いくらでもつくんじゃないか？」

彼は、私に興味を失ったようでした。私の横で頼杖をつきながら、カリカリと何かを書き始めました。様子をふと盗み見ると、原稿用紙に文字を書き込んでいるところでした。その彼の手先は、まるで妖精が舞うかのように原稿用紙の上を滑り、一字一字を構成し、一単語一単語を構成し、一文一文を構成していきました。傍で見ていて、まるで新種の踊りを見ているかのようにでした。

「何？」

私の視線に気づいたのか、彼は怪訝な顔をして私のことを見据えました。けれど、彼が掛けている色の入ったメガネのせいで、その奥にあるだろう彼の目の輝きは見えませんでした。指摘されて初めて、彼のことを見ていることに気づいた私は、すこしバツが悪い思いに襲われました。

そのバツの悪い思いを振り払うかのように、私は心にもないことを言いました。

「私に、文章の書き方を教えてくれないかな？ よかったら、でいいんだけど」

正直、この私のお願いは、思いつきでした。当時はまだイタイケな少女だったので、「あなたの手先に見惚れていたの」なんて恥ずかしい事、言えるはずもなかったのです（と、言いつつ、現在でも言えるかどうか……）。なので、そうして話題を逸らすことしか思いつかなかったのです。

すると彼は、頭を掻きました。

「ま、まあ、いいけどさ……。でも、何で？ だってさっき、“文芸に向いてない”って自分で言ってたじゃないか。なのに、どうして？」

すかさず、私は切り返しました。

「でも、“ここの文芸部で目立つくらいの記事力なら、これから頑張れば、いくらでもつく”って言ったのは、根岸君だよ？」

「なるほど。まあ、そうだな」

根岸君は、笑いました。

この日から、根岸君に文章を教わる日々が始まりました。

確か、最初、根岸君はこんなことを言いました。

「ちよつと、最近あつたことについて、作文を書いてきてよ。枚数は、大体5枚くらいで」

彼に言われたとおり、作文を書きました。確か、仲のいい女友達と都会に遊びに行った話を書いたと記憶しています。当時、私は原稿用紙を一枚書くのにも一時間もかかるような生徒でしたので、あでもないこうでもないと言巡を重ね、結局書きあがったものでした。

そして、その入魂の作文を彼に見せました。すると、彼は一目見るなり、こう言いました。

「まず、これを読みな」

ずっと彼が私に差し出したのは、絵本でした。薄闇のキッチンに佇む主婦のような格好をした女の人と、彼女の作りだす影が画面を支配しているような表紙の、絵本でした。そして、彼は続けました。「まず、大小路さんは、読むことから始めないとダメだと思う」「読むこと？」

私の問いに、彼は答えました。

「うん。『文章を書く』、っていう作業はね、『文章を読む』、っていう行為が根っこにある作業なんだ。つまり、上手い文章を書く早道は、いい文章を読むこと、それに尽きるんだ。そういう意味では、大小路さんに夏目漱石を薦めた部長の考えもあながち間違いはないんだ。でも、『夏目漱石を読むための読書力』が、大小路さんにはまだ身についていないことが、部長には分からなかったみたいだね」

悔しいことに、図星でした。彼の物言いは、今にして思えば偉そうなことを言っているように見えますが、当時は漠然と、そういう

ものなのか、へえ。と聞いていただけでした。

彼に勧められるがまま、私はその絵本を読み始めました。

そのお話は、悲しい話でした。

主人公は、母親。そして、その子供の男の子でした。夜が迫った薄闇の中、明かりをつけて夕食の支度をする母親に、子供が構って欲しいと擦り寄ってきます。そんな、平和な親子の日常から描かれていました。当時三歳の子供は、詰襟を着た少年が映ったテレビを眺め、こう言いました。「あの服を買って！」と。けれど、母親はこう切り返します。「お前が、中学生になったらね」。そう言つて、母親は子供のおでこをピン、と小突きました。

けれど、そんな平和な日々が、突然失われてしまいました。

母親が、何の前触れもなく死んでしまうのです。どうやら、作中の描写から考えると、病気だったようです。

子供は最初、何が起こったのか分からず、ただ呆然としていました。花が溢れた、まるでパレードのような出来事（多分、葬式のことでしょう）を過ぎ、ようやく母親が帰ってこないことに気づいた子供は泣きました。何日も泣きました。けれど、怒涛のような悲しみは時に押し流されて、やがて10年が経ってしまいました。

その頃には、子供は中学生になっていました。背も伸びましたし、あどけなさもそろそろ消えようとしていました。けれど、ある日、彼は家で、妙な感覚を味わいます。夕闇迫る台所で、夕飯を作っている継母を見て、「何かを忘れているんじゃないか」と考え込むのです。けれど、彼は何も思い出せません。けれど、その忘れたものはとんでもなく大事なことであったはずなのに、と、突然うずきだしたおでこを擦りながら、少年がいくら目をこらして台所を見渡しても、そこには夕餉の支度をしている継母の姿しかありませんでした。読み終わって絵本を閉じた瞬間、涙が溢れました。なんだろう、このお話は。どうして、こんなにも、私の心を捉えて離さないのだろう。そういう疑問が、ぐるぐると渦巻きました。

そんな風に余韻に浸っている私に、彼はこう言いました。

「これさ、僕が初めて感動した本なんだ」

けれど彼はコホン、と咳払いして、続けました。

「で、だ。どうして、こんなに感動的なのか、分かる？」

どうして？思わず、首を傾げてしまいました。けれど、私には、母親が死んだという点が、感動を呼んでいるように見えたので、そう言いました。すると彼は、首を横に振りました。

「いいや、違うんだ。“母親が死んだ”っていうのは、ただの事実に過ぎないんだ。……じゃあ、言い換えようか。大小路さんが、一番感情移入して見たキャラクターは、誰？」

友人について【3】

感情移入。その言葉を頭に浮かべながら、ウンウンと唸っている私に痺れを切らしたのか、彼は先に答えを言っしまいました。

「子供なんだ。きっと、大小路さんが感情移入して見ていたのは、子供なんだ。でないと、感動できないはずだよ。だって、もう一人のキャラクターである母親は途中で死んでしまうんだから。だから、何で大小路さんがこの絵本を読んで感動したのか、というと、“母親を失った悲しさを子供が思い出せない”からなんだ。そこに、大小路さんは悲しさを感じたんだよ」

「へえ」

どこか他人事に私が相槌を打つと、彼は呆れたように頭を振って続けました。

「いい文章を書きたいなら、とにかく“なぜ感動したのか”を、明確にすることが大事なんだ。言い換えるなら、文章の構造を見抜くこと、それが大事なんだ」

それからというもの、彼は毎日、本を私に差し出し、そして私はその感想を書く、というパターンを繰り返しました。最初は絵本でしたが、そのうちに幼児向けの小説、そしてティーン向けの小説、やがては一般の小説がテーマになるようになりました。そして、一般の小説の感想を書いているころには、「我輩は猫である」も、難なく読めるようになっていました。

それ以上に、私は「本を読む」という行為に、楽しみを感じ始めていました。

本を開いた瞬間に、私とは別の人生が広がっている。そして、私に問いかける。「あなただったら、どう生きる？」と。紙をめくるだけの行為。なのに、私の心の一番奥にまで沁みてきて、炸裂する不思議な言葉たち。小説、という世界に、いつの間にか魅了されていた私がいたのです。

そんな、今にして思えばストイックな日々を過ごすうち、入学してから数ヶ月が経っていました。

「さて、皆さん、夏休みが終わりました」

地学室の黒板の前で、部長はそう切り出しました。

夏休みが過ぎたのにも関わらず、まだ熱気は地学室を包んでいました。その暑さのなか、文芸部の面々は皆、額の汗を拭いながら原稿用紙に向かっていました。この日は週に一度の例会ということもあって、30人くらいを収容する広さの地学室が、さらに蒸したような気分になりました。

いつもだったら、このまま活動時間ギリギリまでこのままの状態が続くのですが、この日に限って部長が何事かを言っているがために、作業の手を止め、みんなが黒板の方を向きました。もちろん私も、そのときまで読んでいた本（アガサ・クリステイでした）を机に伏せ、部長の方に視線を寄越しました。けれど、私の横に座る根岸君は、まるでそんなこと自分には関係がない、と言わんばかりに、原稿用紙に向かっていました。

根岸君の出す音以外に静まり返った教室。そして、この教室に座るほぼ全ての人が、部長の言葉を聞こうと身を乗り出していました。傍目に見て、ちょっと異様でした。

部長は、みんなの視線が集まったのを自覚したのか、ちょっと顔を赤くさせて続けました。

「今、もう九月です。二年生や三年生は、何があるか、判ってるわよね？」

教室は、しんと静まり返っていました。けれどその沈黙は、まるで何かを期待するような、そんな熱気に満ちていた気がしました。

部長は、続けました。

「一年生は知らないだろうから、説明するけど……」

部長の話は大変長く、正直的を射ないものだったのですが、私なりに彼女の言葉を再構成すると、こういうことだったようです。

十月に、文化祭がある。そのとき、部ごとに活動の成果を見せるのが例年のことで、文化祭の出費を見込んで予算も分配されているのだが、文芸部の活動は舞台で発表するような代物でもないし、かといって掲示するようなものでもない。なので、私達文芸部だけは予算の使い方が他の部とはちよつと違う。文芸部は、部員による冊子を10部作ることになっている。

これだけの内容を、言ったり来たりしながら語る部長の語り口にイライラしたところ、部長は変なことを付け加えました。

「ただし、この冊子、みんなの作品を載せるわけじゃないの」

どうやら、その冊子にはページに限りがあるらしく、たった10作品しか載せられないらしいのです。そのうち、三年生は優先的に作品を載せる権利があるらしいのです。

「今年の三年生の先輩は5人だから、残る椅子はあと5つ、ってことよ」

部長のその言葉に、地学室の空気が凍りつきました。そして、みんながみんな、牽制をするかのようにあたりをきよきよと見渡しました。私もつられてきよきよしてしまいました。けれど、そんな中でも、根岸君は色メガネをくいつと上げながら、原稿用紙の升目を埋めていました。

「とにかく、文化祭が終わって学校が落ち着いたあとに冊子を刊行するのが例年のセオリーだから、九月の終わりまでには私に原稿を提出してください。で、何か、質問ある？」

まるで雷のような部長の言葉に、ビリビリとした空気が漂う地学室は沈黙しました。みんな、言いたいことがありそうな顔をしているのに、周りの目を気にして何も言えないでいる、という、妙な緊張感があつたのです。けれど、その緊張は、わずか一人の手によって砕かれたのです。

「質問、いいすか？」

まるで緊張感がない声を上げながら、手を上げたのは、さっきまで原稿用紙に文字を埋めていた根岸君でした。手に持っていた鉛筆

を机に転がして、部長を見据えながら、手を上げていました。

「はい、なんででしょう？」

「その、椅子取合戦についてちょっとお聞きしたいことがあるんですけどね」。と、皮肉っぽい言葉を前置きしたあと、根岸君は続けました。「あと5個の椅子、どうやって決めるんですか？ まさか、くじ引き、ってことはないでしょ？」

「ええ、もちろん」。部長は答えました。「厳正なる審査の結果、これは、つてものを載せることになっているの」

「その、“厳正なる審査”ってというのは、どういう風に行なわれるんですか？」

「ああ、そのこと」。部長は、まるで余計な心配をしなさんな、と言いたげにふふつと微笑みました。「安心して。作品を選定するのは、ウチの部の顧問と、国語科の先生たちだから。こんな突っ込んだ質問をぶつけてくるくらいに疑り深い君のことだから一応説明しておくけど、作品を品評する側、つまりは先生たちには、誰が書いたものかは分からないようにする。それに、発表の時には先生に立ち会ってもらって講評してもらってから、へんなバイアスがかかったりはしないから安心して」

「わかりました。これで疑り深い僕も安心しました」

そう言って根岸君が手を下ろした瞬間、根岸君の皮肉に反応したのか、地学室にくすくすという笑いが浮かびました。

結局、根岸君の質問に続く質問は出ず、例会はお開きになってしまいました。

みんな、まるで例会が終わるのを待っていたかのように立ち上がり、地学室をあとにしていきました。誰も、まるで何かに怯えるように、無言で出て行ってしまいました。

教室には、私と根岸君だけが残されました。この頃には、私と根岸君が部屋の鍵を管理する決まりになっていたので、私の机に、鍵が置かれていました。根岸君は、まるで周りのことに興味がなかったように、さらさらと原稿用紙の枡を埋めていました。

「まったく、バカバカしいね」

突然、根岸君は声を上げました。けれど、原稿用紙を埋める作業だけは、まるで止めませんでした。私が、何が？ と訊くと、彼は続けました。

「文章っていうのは、個人的な世界の賜物だから、ああやって周りに殺気を飛ばしても無駄なのにね。文章っていうのは、あくまで自分の脳漿との対話であって、誰かに勝つとかそういうものじゃないんだけど」

でも、と私は反論しました。でも、冊子に載る事が出来るのは、わずか五人分なんでしょ？あなたの言う通り、“椅子取ゲーム”なのよ？

すると彼は、原稿用紙の手を止めて、答えました。

「戦う相手の問題さ。あの人たちは、戦う相手を勘違いしている。文章っていうものの相手は、あくまで自分自身なんだよ」

確かあの時、私は曖昧に頷いたと思います。彼が、満足そうに頷いたのを覚えていますから。手を原稿に戻そうとしている根岸君の興味を引くために、私はちよつと話の方向をずらしました。

「ねえ、根岸君は、提出するの？」

「何を？」

「決まってるじゃない、原稿」

私の質問に、ちよつと考え込んだあと、根岸君は答えました。

「ああ、今のところ、提出しようかな、とは思っているけど。あの先輩方なら、問題なく五人の中には滑り込めるだろうし」

「頑張つてね」

私は心からそう言いました。すると、彼はちよつと顔をしかめました。

「大小路さんは、提出しないの？」

正直、冊子に挑戦なんて、そもそも頭にありませんでした。その頃の私は、とにかく読むのが楽しくて、書くなつてことに興味が向かっていなかったのです。そのことを包み隠さず話しました。する

と、彼は言いました。

「それ、本当？」

彼は、私の目を覗き込みました。まるで、私の目から、私の内側を覗こうとしているかのようでした。けれど彼はというと、自分の目の奥を色メガネで隠して、その目を私には見せてくれませんでした。

その視線に促されるように、私は答えました。

「……本当は、あるの」

友人について【4】

興味が向かっていない、なんていうのは、嘘でした。本を好きになればなるほど、私の心のうちで新たなキャラクターたちが騒ぎ出しているのが分かるのです。そして、そのキャラクターたちはみんな口々に、「私を外に連れ出して欲しい」と騒ぐのです。けれど、その願いを聞けるのか、私には分らなかったのです。だから、私は嘘をついていたのです。

すると、それ見たことが、と言わんばかりのしたり顔で、彼は続けました。

「それはそうだろ。あれだけのペースで本を読めば、書きたくなる衝動に駆られるよ」

でも、書き方が分からないの。どうしたらいいの？ そう訊くと、彼は答えてくれました。

「大小路さんが、感動した本、あるでしょ？ その本を思い浮かべながら書けば、それなりのものは出来るはずだよ」

彼はそれだけ言うと、原稿用紙に文字を落とし始めました。

それを見ながら、彼は誰の作品を思い浮かべながら、文章を書いているんだろう？ という疑問が頭を掠めました。彼のことです、アガサ・クリステイを参考にしているのでしょうか。

その旨を訊くと、彼は答えました。

「ああ、ラブクラフトを参考にしているんだ」

「ラブクラフト？ ナントカ神話の創始者だっけ？」

「そう、クトゥルフ神話。この世界には自分たちの知らない神がいて、その神が世界に影響を与えている、っていう世界観の神話さ。実は、冊子に投稿しようとしているのは、その神話の続きなんだ」

「続き？」

首を傾げた私に、彼は噛み砕いて答えました。

「正確には、ラブクラフトの考えた話を補強するような、別の話」

「ふうん？　つまりは、その、ラブリフトさんが考えたお話の、続きを書く、ってことよね」

私の質問に、彼は力強く答えました。

「うん。これ以上ない、大作になりそうな予感がするんだ」

その日、私は原稿用紙を買いました。

50枚入りで数百円。ちょっと高い買い物のような気もしたのですが、けれど、私の心の中にいるキャラクター達が騒いでしょうがないのです。「私を、ここから出して！」と。その内なる声に負け、文房具屋でラベルの貼られた原稿用紙とにらめっこしていた私は、レジに向かってしまったのです。

その原稿用紙を家に持ち帰り、めったに座らない勉強机の上に広げた私は、しばし原稿用紙の枡をただ目で追っていました。この枡が、どんな私の言葉たちで埋まっていく、そんな想像を繰り広げるだけで、結構に面白いものなのです。

そんな妙な気分の内にはしばし遊んだ後、ふと正気に戻った私は、鉛筆を握りました。そして、最初の一枡のところに、鉛筆の芯を合わせました。

けれど、最初の一文字が浮かびませんでした。

不思議な体験でした。

書きたいもの、書きたいキャラクターは分かっていて、その形もきつちりと理解しているにも関わらず、その書き出しともなると、まるで霧の中のように、輪郭がぼやけてしまうのです。形を捉えようと観察している段階なら、しっかりと静止しているのに、いざキヤンパスに書き出そうとすると動き出してしまう絵のモデルさんのように、どうにも腰を落ち着けてくれないのです。

かつて、ミケランジェロがダビデ像を彫ったときに、あまりの力の入れ様に周りの人が心配した、というエピソードがあります。「何で、君はそんなに急ぐんだ？」とミケランジェロは誰かに聞かれたのでしょう。でしよう、とばかり言うのは、後世に残された

のが、その後続く、ミケランジェロの答えだけだからです。ともかく、彼はある人に、彫刻用の大岩の前でこう語ったといいます。「この岩の中に、人が埋もれている。早く、助け出さなくてはならない」

今にして思えば、当時の私の心情も、おおむねこのようなものでした。私の心の奥底で、窒息しそうになっている人たちがいる。その人たちを、出来るだけ早く救わなくてはならない。で、ないと、その人たちは、私の心の奥底に沈んでしまい二度と浮かび上がってこないかもしれない。そういう、漠然とした不安が私を後押ししていました。

けれど、その人たちを救い出すために、原稿用紙に一字を書き入れるのが、ものすごく怖かったです。怖い、というより、どこから手をつけたらいいのかわからなかったのです。

その日、一晩悩んで、ようやく一文が浮かびました。今でも、その一字をしつかりと覚えています。

“私は何度、さよならと言ってきたのだろう”

こんな、一文でした。

不思議なもので、その一文が思いついてしまうと、その一文から次々に言葉が湧いてくるようになりました。まるで、彫刻家が、最初のノミで作ったクラックを頼りにどんどんノミを打ち抜いていくような、そんな感覚でした。

そうして動き出した私の小説は、わずか3日ほどで、完成を見たのです。

「へえ、もう出来たんだ」

放課後、いつものように、根岸君は地学室にいました。そして、カリカリと原稿用紙を埋めていました。その日は例会の日ではなかったこともあり、私と根岸君以外、誰もいませんでした。きっと、先輩方は自宅で文章を書いたり、あるいは図書館で調べ物をしていて忙しいのでしょう。なので、こうやって会話をしているも、誰も

咎める人がいませんでした。

「うん、出来たよ」

「原稿用紙何枚くらい？」

「うーん、大体、20枚くらい？」

「400×20枚だから、8000字くらいか……、じゃあ、今すぐ読めちゃうな」

鉛筆を置いて、彼は私に向き合いました。事情が飲み込めない私は首を傾げてしまいました。すると、彼は唇を伸ばして言いました。
「なんだ、見せてくれるんじゃないの？」

「あ、ああ！」

察しの悪い私は、ようやくバツクから原稿用紙を出しました。最初の一枚は、消しゴムのせいで所々擦れているのに、後ろの方に向かうに従い、まるで水を走る魚のようにひゅっと流れる文章が続いていました。私の執筆の経緯が丸分かりになりそうな、そんな原稿用紙でした。

「けっこう、苦労したみたいだね」

私の原稿用紙を手にとって眺めながら、根岸君は言いました。

「わかる？」

私は言いました。すると、彼は苦笑いを浮かべながら、続けました。

「うん、分かる。原稿用紙っていうのは、正直だから」

それだけ言うと、彼は私の原稿用紙に目を通し始めました。

その間、私は戦々恐々としていました。それは、初めて書いた小説を読まれている、というような、初々しい気分から生じたものではありませんでした。いえ、もっと言ってしまうえば、これは創作に関わる、いかなる感情とも異なる感情だったのです。

彼に、バレたらどうしよう。そういう、不安だったのです。

私が書いた話は、おおむね、このような話でした。

“ 何度も何度もさよならを言ってきて、心が擦り切れていた私は、ある日男の人と出会う。その人は目を決して私に見せてくれない。

けれど、そんな男に、私は次第に惹かれていき、やがて二人は暮らし始める。そして二人は、幸せに暮らす”

これだけの、話だったのですが、実は、この話に出てくる男のイメージは、根岸君のそれなのです。この男の一番重要な設定である“目を決して見せない”というのは、根岸君が色メガネをかけていて、その目の底を見せてくれなかったことが、ヒントになっていたのです。

普通の人だったら、もしかすると見逃してしまうかのような、些細な糸口なのかもしれませんでした。けれど、今私の目の前で私の文章を読んでいるのは、根岸君なのです。私の残した糸口を難なく見つけ出し、そして私の心を全て丸裸にしてしまうのだらう、そんな、漠然とした不安が私を捉えました。

そんな不安と戦っているうちに、彼は読み終わったようでした。そして、原稿用紙をおいて、目を揉みほぐすように手をあてて、しばし黙っていました。

けれど、原稿を手にとって、彼は言いました。

「これは、ダメだよ」

「え？」

彼の言葉は、私の予想した、どんな言葉とも違いました。なので、面食らってしまった。彼は、そんな私に構わず、続けました。

「余りにご都合主義的。あまりに、漠然」

彼が言うには、話の筋が、あまりに強引とのことでした。彼曰く、“男”と“私”が最後に暮らしたず、という帰結点は、かなりおかしいらしいのです。彼の言葉を借りれば、“この文章における世界の運命を捻じ曲げている”とのことでした。「この二人は、別れるべく設定されているのに、どうしてこの帰結点なの？」と、彼は首をひねりながら私に聞いてきました。

そして、彼が言ったのは、舞台設定があまりに漠然としている、というものでした。確かに、私の書いた小説には、舞台設定がまるで書かれていませんでした。この小説の世界はどういう文化圏なの

か。日本なのか、外国なのか、はたまた異世界なのか。どういう家に住んでいるのか、そういう格好をしているのか……。彼は、その点についてこう言いました。「寓話だとしたら、こういう見せ方でもいいと思うんだ。でも、寓話として読むには、ちょっと大小路さんの文章には、寓意が足りないし……」

けれど、彼は咳払いしてから、続けました。

「でも、そこを手直しすれば、いい作品になると思う」

友人について【5】

けれど、私はそのまま全く手直しせずに、提出してしまいました。手直したほうがいいにも関わらず、あえて直さなかったのは、なぜでしょう。今の私にも、正直分かりかねます。自分の事なのに、けれど、今にして思えば、それはささやかな私の自己主張だったのかもしれない。わざと結び目を残しておくことで、根岸君にその結び目を解いて欲しかったのかもしれない。そして、私の心を、服を脱がすように優しく剥いで欲しかったのかもしれない。

結局、その年、私の文章は冊子に採用されませんでした。

採用されたのは、二年の先輩が四人と、根岸君の文章でした。文章を講評した先生がたは、根岸君の作品について、「クトウルフ神話がどういふものか知らないが、この話を読んで、なんとなくその形が分かった。そして、その上で展開される話に、ものすごい説得力があった」とべた褒めでした。ちなみに、落選した文章に関しては、原稿の末尾にちよつと講評が書かれている、とのことだったので、原稿が返却されたとき、真っ先に一番後ろの原稿用紙に目を通しました。そこには、赤い字で、根岸君が私に言った事と同じことが書かれていました。

その後も、私と根岸君は文章を書き続けました。

根岸君の文章は、さらにその深みと奥行きを増していきました。私の文章も、何とか人様に見せることの出来るレベルにまで進歩しました。やはり、継続は力なのです。

そして、一年の終わりに、私は文芸部の部長を拝命しました。部長が三年生になって受験勉強が忙しくなるので、とのことでした。文章の腕からして根岸君が選ばれるのが筋なのでしょうが、けれど

根岸君は敬遠されたようでした。今にして思えば、根岸君は“文芸部”という檻にまるでその体が収まっていませんでしたから、みんな根岸君の存在に危惧を抱いていたのでしょうか。

そうして、私が部長になった文芸部でしたが、困ったことに、その年、新入部員が入りませんでした。元部長は、「時々、そういうことがあるらしいから、気にしないでいいわよ」と言ってくれましたが、けれど部長としては頭が痛かったことに違いはありません。何せ、一定数の部員が集められない部は、予算が削られてしまうからです。

その年の冊子は、去年より過酷でした。

部員が11人。そして、冊子に載るのが10人。つまり、一人は必ず落ちる。本当に、椅子取ゲームのような様相を呈してしまったのです。

この年の冊子作りは、紛糾しました。先輩が9人。そして、二年生の私達が2人。それで、今までの決まりでは三年の先輩には花を持たせる決まりなので、9席は確定していたのです。つまり、わずか一席を、私と根岸君が奪い合う構図になってしまったのです。

その構図に、根岸君が噛み付いたのです。

「そもそも、先輩方の文章が無条件に載る、っていうのが、おかしいんじゃないですか？」

それは正論です。でも、部というところは正論が通るところではないのです。やはり、上下関係というのがありますし力関係というものもあるのです。当然、先輩達は面白くない、とばかりにブーブー言いました。

結局、この件は、元部長の一言で納まりました。

「確かに、根岸君の言う事にも一理ある。それに、私達の代の人数が、そもそも多いのよ。確かに、根岸君のいう通り、“三年生特権”を取っ払ってしまったもいいのかもしれないわ」

けれど、結果的には、その年の冊子には、三年生全ての文章が載りました。

私が、原稿を提出しなかったからです。実は、原稿は用意していたのですが、部のごたごたを広げるのが嫌で、あえて提出しなかったのです。

三年になつて、文芸部は私と根岸君二人になつてしまいました。

この年も、文芸部に部員が入らなかつたのです。そのせいで、部費が削られてしまい、例年の冊子の刊行は不能になつてしまいました。それでも、私と根岸君は地学室で文章を書いたり文章批評をしたりする生活を繰り返しました。

6月ころになると、私は就職のための勉強を、根岸君は大学進学のための勉強を強いられることになり、部の活動も出来なくなつてしまいました。けれど、彼はこう言いました。

「卒業前に、冊子を作ろう。別に、今までみたいな立派なものじゃなくてもいいんだ。だって、部員は僕ら二人なんだから」

そして、冬の中ごろまでには、私は市役所に内定を頂き、彼は大学に合格していました。

けれど、彼との約束は、果たせませんでした。それは何でだったのか、わかりません。きっと、卒業前のごたごたに、その約束が埋もれてしまったのかもしれない。

反故になつた約束の代わりに、私達は結局、お互いの原稿を交換することになりました。

「文芸部最後の活動だね」

卒業式の日、彼はそう言つて分厚い原稿を寄越してきました。私も、彼に原稿を手渡しました。彼の寄越した原稿のタイトルは、“ダゴンの闇”というものでした。

彼の色メガネの奥の目がどんな色をしていたのか、私は結局知らないままにお別れしてしまいました。

こうしてエッセイを書いていて、私は時折、彼のことを思い出します。

私の文体には、彼の影響が隠れているのですから、どうしても文章を書く、彼の顔が脳裏をかすめるのです。

そういえば、市役所で働き出してから、彼の足跡を探したことがあります。そうしたら、ある文芸誌の新人賞の二次審査を抜けた作品の作者欄に彼の本名がありました。彼は、私が文章を書くのを止めてもなお、文章を書いていたのです。そのときの私は、彼の前途を祈ったものです。

最近、インターネットで彼のことを探してみました。

けれど、彼の名前は発見できませんでした。

もしかすると、彼は文章を書くことを止めてしまったのかもしれないし、あるいはペンネームを名乗って活動しているのかもしれない。

あまり、友人が多くない私ですが、けれど、“友人”という言葉を読むと、どうしても彼のことを鮮烈に思い出してしまうのです。そして、どうして、“友人”という枠でしか彼のことを語れないのだろう、と、もどかしい思いに襲われたりもするのです。

え？ 「根岸君に手渡した原稿に何が書いてあるのか」ですって？

実は、一年生の頃に書いた、あの小説をそのまま渡しました。彼に批評され、先生にも批評されたあの文章を、そのまま渡しました。多分、卒業当時の私ならば、もっと気の利いた文章を書けたでしょう。彼に褒めてもらえるような文章も書けたでしょう。でも、どうしたわけか、あの拙い、彼から見れば失敗作のような文章をあえて渡したのです。

きつと、私は、彼に糸口を解いて欲しかったのでしょうか。

けれど、そんな感傷すらも、最早、思い出のかなたに消えようとしています。驚くほどに均質に、思い出というのは削り取られてしまうものなのです。

彼の記憶が私の脳漿から消えてしまう前に、こうして書き残すチ

ヤンスをいただけた、という僥倖に、私は今、非常に感謝しています。

TV・ラジオ出演について【1】

私は今、TVやラジオに出演しています。

この原稿を書くに当たって調べてみたのですが、テレビ5本、ラジオ2本を抱えているようです。ようです、としか言えないのは、私のスケジュール管理は、マネージャーの方にお任せしているからです。

私がお世話になっている芸能事務所は、経済アナリストとか。○。○。ジャーナリストとかどこかの大学教授とか、普通の芸能人というよりも、むしろ“文化人”を扱うのに秀でたところのようです。それが証拠に、私の担当マネージャーさんは、ある漫画家の方と、小説家の方のマネージャーも兼ねています。芸能界の普通を知らない私には分からないのですが、どうやらマネージャーというのは一タレントにつき一人付くのが普通のようなのです。それは、あるテレビ番組で隣り合わせた女優さんから聞きました。

芸能界というところは、本当に不思議なところですよ。

とにかく、待ち時間が長いんです。

わずか、一時間の番組を取るために半日を使うのはザラです。例えば、タレントさんの髪の毛が乱れればスタイリストの方から待たがかり、タレントさんが疲れたしてきたら休憩を求めるマネージャーさんから待たがかり、プロデューサーさんの気に入る映像が取れなければ待たがかり、かかるのです。

この前まで主婦だった私にとって、そんな時間の使い方は不条理に感じました。

だって、カメラが回る時間よりも、打ち合わせの時間や待ち時間の方が長いのです。

その話を夫にすると、夫は言いました。

「それは君が、今までそういう仕事をしたことがなかったからだよ。

だって、営業の人なんか、もつとすごいからね」

夫が言うには、営業の人というのは、かなり待ち時間が多いとのことでした。クライアントと面会するときには、当然約束の時間よりも早く動かねばならないし、業者さんとの兼ね合いで、どうしても待ち時間が多い、と。

そう言われても、私は今まで営業という仕事をしたことがありませんでした。なので、夫の言葉を、まるで他の国の習慣であるかのように聞いていました。

けれど、最近、そんな私の認識を壊す出来事が起こったのです。

その日は、とんでもなく長い待ち時間であることで有名な、あるクイズ番組でのことでした。

このクイズ番組、たくさんいるタレントさんのクイズの答えを、司会者の人気タレントさんが上手く使ってイジっていくという形式の番組で、かなり視聴率もいいということです。あるとき、私が出演したときに、その司会者の方に気に入られたらしく（私自身、今ひとつ意識していないのですが、どうにも私、ズレたところがあるようなのです）、たびたび番組に出していただいています。

その司会者の方は、本当に読めない人です。

普通、どんな人間にも、語り口に独特のリズムがあるのですが、その司会者さんにはそれがありません。ゆるゆると話しているかと思った次の瞬間にはまるでカタパルトに乗った飛行機のように、トップスピードに乗った饒舌をかましてきます。そして、その饒舌に追いつこうとこちらがテンションを上げると、いつの間にかその司会者さんのテンションは落ちていて、「何、アンタスパークしてんねん」と突っ込まれてしまうのです。TVの一視聴者の頃には分かっていなかった、その司会者さんの凄さというものを味わったものです。ともかくその番組、色々な芸能人さんたちを捌いていくという形式の番組（俗に、“雞壇番組”というらしいですが）なので、どうしても出演する方々は暇を持て余してしまうのです。それは、私も

同様でした。そういう待ちの多い番組というのは、どうしても隣の共演者と会話する機会が多いものです。最初、私は身の置き場がなく黙っているだけだったのですが、ある日、ある方が話しかけてくださいました。

「大小路マリリンさん、ですよね？」

いつかの空き時間、私が一人、スタジオの端に立っていると、声をかけてくる方がいました。若々しい、女の人の声でした。きっとAPさんか何かかと当たりをつけて振り返りました。

そこには、女の子が立っていました。髪の毛にキレイなウェーブをかけ、日常生活を送るにも困ってしまいそうな派手な格好をしていました。そして、美しい造作の顔に、派手目なメイクを乗せていました。その姿は、APさんといったスタッフさんでないことは一目瞭然でした。スタッフさんは、いかに女性と言えどもあまりお化粧をしないのです。

はい、そうですが、と答えると、彼女は笑顔で続けました。

「ああ！　ようやくお声をかけることが出来ました！　大小路さんったら、ご挨拶だけするとすぐ楽屋から出ちゃうんだもの」

TVの仕事を始めた頃、マネージャーさんに口をすっぱくして言われたのが、とにかく「挨拶」でした。楽屋には必ず挨拶に行け、スタジオ入りしたときには、誰にでも笑顔で挨拶しろ、挨拶に、人を選ぶな、と。なので、番組が始まる前には出演者の方をはじめ、番組に携わる皆様に挨拶をするようにしています。けれど、皆さんピリピリしている上に、仕事をしてらっしゃる方（私のように、エッセイらしきものを書いている方、ネタの打ち合わせをなさっている芸人の方々など）もいらっしゃるので、挨拶だけきっちり済ますと、すぐに自分の楽屋にこもるようにしていたのです。

そして挨拶をしている光景を思い出しながら、ようやく私の目の前にいる女の子が誰なのかを思い出しました。

その子は、私の共演者なのです。

最近、TVで人気のアイドル、崎原マリリンさんでした。

崎原さんは続けました。

「大小路さんのブログ、前から見させて頂いています！ 実は私、大小路さんの大ファンなんです！」

「は、はあ……」

正直、私のファンという人を、初めて見ました。私のブログを覗いてくださる方は、大抵が“料理のレシピ”という実利を求めていらっしゃるもので、「マリリンさんのレシピ、美味しかったです！」というコメントは頂いても、「マリリンさん、面白いです！」とコメントしてくれる方はいませんでした。私のレシピのファンだ、という方はいても、私そのもののファンだ、という人を、見たことがなかったのです。

なので最初、彼女の言葉を計りかねていました。具体的には、“大小路さんのファン”という彼女の言葉は実は短縮形で、本当は“大小路さんのレシピのファン”なのではないか、という疑念がわいたので、そう聞いてみました。すると彼女は首を傾げました。

「マリリンさんって、面白い人ですね！ 別に、マリリンさん本人が好きだろうが、マリリンさんの考えたレシピが好きだろうが、どっちにしても同じことだと思っんですけど」

「いや、それはちょっと違う事だと思っただけど……」

私が控えめに言っくと、彼女は微笑みました。まるで、私のことを諭すかのように。そして、控えめなピンクのルージュが乗った、かわいらしい唇を動かしました。

「じゃあ、私は、マリリンさんそのもののファンかな」

その瞬間、プロデューサーさんが、休憩終わり！ と叫びながら、手を叩いていました。そして、出演者の皆さんは、元の席にお戻りください！ と頭を下げていました。

崎原さんは、ありやりや、と、まるで鈴を鳴らすように弦き、そして言いました。

「それじゃあ、また」

硬い床を、カラコロと鳴らしながら、彼女は光り輝くスタジオに

入っていました。

それからというものの、崎原マリリンさんとは、お友達になりました。

いつものように楽屋に挨拶に行くと、

「あー！ マリリン姐さん！」

と、私の事を呼ぶのです。“姐さん”ってどういうこと？ と訊くと、彼女は笑顔で答えました。

「え？ ダメですか？ だって、私もマリリンっていう芸名なんです。なんで、混ざってアレじゃないですか。それに、誰かのことを、“姐さん”って呼ぶの、夢だったんですよ！」

彼女の年代（崎原さんは、今年17歳とのことです）だと、姐さんという言葉に、あまり抵抗がないようです。けれど、私からしてみれば、姐さんという言葉には、どうしても極道の影がちらりちらりと見えるのです。気づけば、私も年なのかしら、とシワが出始めた自分の顔を、思わず撫でていました。

しかも彼女、番組中に私のことを「姐さん」と呼び、それが番組で大いに盛り上がったのです。

「ねねね、姐さん！」

「え？ 芸人さんじゃあるまいし、どういうこと？」

そついう、他の芸人さんたちが立ち上がり、ツツコミをくわえると、例の司会者さんが、紛糾するスタジオの空気を、こう締めたのです。

「なるほどなあ、大小路さん、何にも知らない顔して、実は派閥を作ってるんやな？ 腹黒い人やで」

かくして、この番組で女帝キャラがついてしまいました。けれど、その女帝キャラのおかげでこの番組も、準レギュラーからレギュラーに格上げしてもらえたのでした。

番組でも楽屋でも、崎原さんは変わりませんでした。どこでも笑顔で、「姐さん、姐さん」と私のことを構ってくれます。どうやら

世間では、私達がコンビのように見られているようです。そして、世間様からコンビのように理解してもらつと、そのうちに他の仕事でも顔を合わすことが多くなり、さらに親しくなつてゆく……という循環に収まっています。

気づくと、実は私、脚本家になりたいんです、と彼女は私に将来の夢を語ってくれるほどにまで仲良しになっていました。

TV・ラジオ出演について【2】

「姐さん」

ある日、ある番組の待ち時間とき、崎原さんは私の顔を覗きこんできました。なあに？ と、話を促すと、彼女は続けました。

「姐さんは、仕事、楽しい？」

お恥ずかしい話なのですが、私はあまり、TVやラジオの出演を仕事とは捉えていませんでした。私の本分はあくまで主婦だ、という意識があつたためでしょう。なので、彼女の言う「仕事」という言葉がTV出演を指しているということに気づくのが遅れました。

その間を、言いよどんでいるのだと勘違いしたのでしよう、彼女は続けました。

「私は正直、楽しくないんだ」

どうして？ 今、あなた仕事上手くいっているところじゃない。

そう訊くと、彼女は私の顔を覗きこみました。その顔は、いつも笑顔のアイドル・崎原マリリンの顔ではなく、何かに行き詰る17歳の顔でしかありませんでした。

「仕事は上手くいっているかもしれない。でも、上手くいっているからって、楽しいとは限らないわ」

それだけ言うと、彼女はその深刻そうな顔を引っ込めてしまいました。そして、まるで煙を振り払うかのように手を振ると、彼女は笑いました。

「なぐんてね」

そして、姐さん、もうそろそろ本番だよ？ と私を急かしたのでした。

結局、その話是有耶無耶のまま、ほおって置かれてしまいました。その日の収録は、ちよつと暗雲が立ち込めている収録でした。開始早々、ある人気俳優さんの機嫌が悪くなってしまうたり、芸人さん

が暴れたせいでセットが壊れたり、それに伴って時間が押すわけで、スタジオ中に妙な緊張感が張り巡らされていました。普段はニコニコしているプロデューサーさんも、まるで苦虫を噛み潰したような顔をして、スタジオの隅に立っていました。

きつと、崎原さんがあんな話をしたのは、きつとそういう雰囲気のせいだろう、と自分自身を納得させて、スタジオにある自分の席に戻りました。

そして、撮影が再開されました。

再開されると、スタジオの空気が入れ替わりました。さっきまで不機嫌そうな顔をしていた俳優さんも、若手芸人さんのツツコミにボケを返しますし、セットを壊して険悪な空気を作った芸人さんもお得意のネタでカメラをひきつけていました。

ああ、プロとはそういうものなのだ、と私は改めて思ったものです。

崎原さんかというと、やっぱりいつもの崎原さんでした。いつものように、芸人さんの面白いトークに茶々を入れ、俳優さんのコメントをキツイ一言で一刀両断し、司会者を笑わせました。その姿は、まさにいつもどおりの崎原マリリンでした。

最初は険悪だった収録も、最後にはいつも通りの和気藹々とした空気で、終わりました。

その日、楽屋に訪ねてくる人がありました。

その人とは、崎原さんでした。

ようやく身支度も済み、皆様に挨拶でも行こうか、と思った矢先、彼女が私の楽屋に訪ねてきたのです。ジーンズにＴシャツ、薄手のジャケットといういでたちは、さっきまでカメラに大写しになって微笑んでいたアイドル・崎原マリリンとはとても信じられませんでした。彼女はドアの前に立ち、両手を腰のあたりで組みながら、空るな目で私のことを見ていました。

「姐さん」

彼女は、私の名を呼びました。その言葉には、まるで生氣というものが感じられませんでした。

「ご挨拶に、来ました」

ご挨拶？ 私は訝しく思いました。それは当然でしょう。いつもはまるで友人のようにほとんどタメ口をきいてくる彼女が、やけに改まっているのが、気になったのです。普段、察しの悪い私なのですが、このとき、「仕事、面白い？」と私に聞いてきた崎原さんの顔がふと頭を過ぎったのでした。

案の定、でした。

芸能界を辞めるんです、と、彼女は足早に説明しました。学業が忙しくて、両立できそうもないんです。やっぱり私、学生じゃないですか。この世の中、勉強は出来ないと。そう、まるで自分に言い聞かせるように、彼女はよどみなく喋りました。

私は、何も言えませんでした。ただ、彼女の目を見つめている事しかできませんでした。

すると、彼女はペロリと舌を出しました。

「まったく、姐さんには敵わないなあ」

何が？ そう訊くと、彼女は続けました。

「私、本当は、勉強したくて辞めたいわけじゃないんだ」

じゃあ、どうして？ 私の言葉に、彼女は続けました。

「ただ単に、芸能界つてところに、疲れただけなんだ」

彼女は、ちよつとため息をついて、また続けました。

「姐さんは分からないかもしれないけど、この世界は本当に厳しいの。それに、普通の人から見ればクリエイティブな仕事に映るみたいだけど、本当は、全然クリエイティブじゃないの。だって、私達タレントは、あくまで誰かの作った筋書きの上に乗っかって踊っているだけだもの。姐さんみたいに、自分だけで作れるものなんか、何一つないのよ。きつと、それに疲れたのよ」

私だって、一人で何かを作っているわけじゃないのよ、と言うと、彼女は首を横に振りました。

「きっと、姐さんには分からないのかもしれない。しょうがないことだけど。でも、これだけは覚えておいて？ 私は、姐さんみたいに自分で全てのものが作れる人間が羨ましい。私みたいに、誰かの書いた筋書きの上で踊って、誰かの作った筋書きを彩ることしか出来ない人間には、姐さんみたいな人間が、眩しく見えるのよ」

彼女の、長い独白が終わりました。

しばらく無言でした。私が何かを言うのは筋違いな気がしましたし、そもそも彼女に言うべき言葉が、私の心の中には見つかりませんでした。

芸能人というのは、そういう人たちなのか。TVやラジオという世界を彩るために働く人たちなのか。そして、その中で、必死で輝こうとしている人たちだったのか。そんな、当たり前のことに、ようやく気づく私なのでした。けれど、どうしてそんな彼女が、私のことを羨ましがるかだけは、どうしても分かりませんでした。

のろのろと頭を下げた彼女は、踵を返しました。そして、ドアを開いた瞬間、何かを思い出したかのように彼女は振り返りました。

満面の笑みを私に向けた崎原さんは、いつもと変わらない口調で、こう言ったのです。

「実は、私の芸名の“マリリン”って、姐さんから拝借してたんです」

その日から、崎原マリリンはブラウン管（この言い方も、古いです）から姿を消しました。

ワイドショーやスポーツ新聞、週刊誌などで、「崎原マリリン、引退！！」とか、「仕事に疲れた？」とか、「結婚か？」とか、色々と書かれていました。人気タレント崎原マリリンが電撃的に引退したのですから、TVは大々的に報じました。

なぜか、私のところにも取材陣がやってきました。どうやら彼らは、私から崎原さんの引退騒動の真相を訊きたいようでした。けれど、私の知っていることは、既にTVで報じられている内容を越え

るものではありませんでした。なので、私にもよく分からない、と首を横に振ってやり過ごしました。

このエッセイを書くにあたり、久し振りに崎原さんに連絡を取りました。彼女とは、ケータイのメアドを交換していたのですが、メールを送っていいのかわからず、ずっと打てずにいたのです。けれど、いい機会ですから、近況を聞くメールを送ってみました。

メールは、すぐに返ってきました。

その中には、今、脚本の勉強をしているんです、と書いてありました。行間からモノを作る喜びがにじんで、こちらの心にも染み込むような、そんな初々しさが残る文面のメールでした。

私は、事情を打ち込んで送信しました。エッセイを書いていて、それで、「芸能界について」という題で書きたいのだけれど、あなたのことを書いてもいいかしら？ と。すると、彼女はまた返信してきました。

< ええ、私の言ったことで、姐さんの仕事がかどるんなら、喜んで！ >

私の事を、変わらず“姐さん”と呼ぶ彼女に、思わず胸が熱くなったものです。

崎原マリリンさんは、私に教えてくれたのです。

芸能界というところは、クリエイティブなものなんて何一つもないこと。そして、カメラが回っている間は、自分という商品売り込まなくてはならないこと。いいえ、もしかすると、カメラが回っていない間でも、自分という商品売り込み続けなくてはならないのかもしれない。

それが、今のところ、私が芸能界というところについて感じている感情の全てです。

ブログについて

私にとって、ブログとは。

よく、この質問を頂く事があります。それは、ただの主婦だった私が、現在こうして活動している端緒になったのが、ブログというありふれたもののおかげだからです。ですので、「大小路さんにとってブログとは？」とか、「ブログを流行らせるにはどうしたらいいのでしょうか？」などの質問をぶつけられることが多いのです。

けれど、私としては、「さあ？」と首を傾げるしかないのです。そもそも、「前書きにかえて」でも書きましたが、私がブログを始めたのは、友人のY子さんの薦めでした。ブログのレイアウトや管理についてのノウハウは、みんなY子さんに教わりました。なので、どうしたらブログのHIT数を増やすのか、といったような、技術的な問題については一切語れないのです。

それに、こう言うてはアレなんですが、私自身、あんまりブログというものに思い入れがないんです。もちろん、現在でもブログの更新は自分で行なっていますが、以前のような料理ネタが減り、むしろ仕事に関する話が増えてしまっているようにも感じます。本来の目的である、「料理のレシピを発表する場」では無くなりつつあります。それでも、HIT数が多いという事実は嬉しい反面、少し悲しくもあります。

では、私にとってブログとは。

言うなれば、アニメなどに出てくるワープ装置のようなものです。よく、SFアニメなどで、亜空間を使って離れた地点から地点を飛び越える、というガジェットのことをワープ装置などと言いますが（念のため言うておきますが、私はあまりSFに関して詳しくありません。なので、その道の方から見れば用語の使い方などがおか

しいとは思いますが、寛恕のほど、お願いいたします）、私にとってブログとは、そういうイメージのものです。

このイメージには、二つのイメージが重ね合わせてあります。

一つは、主婦である私を、お料理研究家という肩書きにまで運んだ、ワープ装置です。

客観的に見ても、主観的に見ても、ただの主婦だった私がこうして有名になったのは、確かにブログのおかげなのです。それは、揺るがし難い事実と言えますし、私自身、それは疑っていません。仮に、私の家に、もしパソコンが無かったならば、きっと私は今でも少し料理が上手い主婦として生活していたはずです。そういう意味では、ブログというワープ装置が、私を運んだのです。主婦から、お料理研究家にまで。

そして、もう一つの重ね合わせは、私のレシピをあなたの元へと運ぶ、ワープ装置としてのブログです。

これは、まるで意識していませんでした。けれど、いつのことだったか、ブログのコメント欄を眺めていると、こんなコメントがついていました。

＜私は富山に住んでいるのですが、東京の大小路さんのレシピをこうして見れるなんて、便利な世の中になったものです＞

富山県の方からのコメントでした。確かに、そうかもしれません。普通、レシピというものは、母から子へ、あるいは友人から友人へ手渡して伝わるものです。例外的に、出版されたレシピ集がありますが、あれを作ることが出来るのは本業の料理人さんや、本当に文才もあり、それ以上に料理の造詣も深いお料理研究家の方だけだったのです。

けれど、今という時代は違います。

インターネットによって、世界中が隣り合っているこの世の中では、10年前には一握りの人間にしか出来なかった“情報の発信”

が、いまやパソコンさえあれば誰にでも出来る時代になったのです。現代を生きる若い人たちはそれを当たり前前に受け止めているようですが、パソコンのない時代を見知っている私にとっては、本当に魔法か何かのようにしか思えません。

そういう意味で、ブログは私にとって、私のレシピとあなたをつなぐ、ワープ装置に見えるのです。

最近、ブログの更新がちょっと遅れ気味です。

このエッセイの執筆や、お料理本の出版、あるいはTV出演などの影響で、あまりパソコンの前に座れなくなっているのも純然たる事実です。

けれど、これからも私は、ブログを続けたいと思います。

なぜなら、私という人間が、あなたと直接に繋がることが出来るのは、ブログの場を差し置いて他にはないのですから。

ブルーデーについて

このエッセイ集の執筆にあたり、担当編集さんの新藤さんからテーマを出していただいて、それに答える形で文章を書き連ねているという話は度々しています。けれど、今回これから書く文章は、あくまで私自身が発案し、そして私が半ば独断で挿し入れた一篇であることをここに明言しておきたいと思います。

なぜかという、今回のテーマが、ちょっとデリケートな問題だからですし、女の私に、男の人である新藤さんが無理に書かせる内容であると誤解されてしまうと、新藤さんの名誉に関わります。なので、「私が発案した」と、ここで宣言しておく事に、意味があるのです。

では、その、今回のテーマとは何か。

ずばり、「ブルーデー」です。

……一応言っておきますが、人が憂鬱になってしまう日ではありませんよ？ ああ、女の人ならば大抵は経験する、月に一度のあの憂鬱なヤツです。ご年配の方なら、「アンネ」と訊けばピンと来るアレです。どうしてここまでして「ブルーデー」などとボカして表現しているのかというと、それは新藤さんに釘を刺されたからです。「そもそも、エッセイにそういう内容というのは、あまり書かないものなんです。年代によっては不快に思うだろう方もいらっしゃるかもしれませんし、まだまだそういうことをあけっぴろげに語ることに違和感をお持ちでいらっしゃる方も多いですから。でも、どうしても書きたいということであれば止めませんし、止める筋合いのものでもありません。ただし、直接的な表現は避けてください。あとは、事務所の方ともよく相談した上で決めてください」

なんで、ここで事務所が出てくるのか分かりませんでした。けれど新藤さんの言う通り、事務所の方にも話を通しました。すると、マネージャーさんは笑ってこう言いました。

「ああ、別に構いませんよ。マリリンさんがそういう話をして、別にマリリンさんのイメージを損ねるものではないですから」

そういう話をして、イメージを損ねる？ それ、どういうことです？ そう訊くと、マネージャーさんは笑顔のまま、答えました。

「例えば、現役バリバリの10代アイドルが、そのことを云々とエッセイに書いてしまうのは、ちよつとまずいでしょ？ だって、その話題は性の問題に凄く近いテーマで、一方でアイドルというのはある意味で性から切り離された存在だからです。でも、マリリンさんをあくまで“文化人”として売り出している事務所からすれば、むしろそういうテーマをマリリンさんが語ること、新境地が開けるかもしれない、という期待も持てますから」

フウン？ 私は、曖昧に頷きました。

けれど、とにかく事務所からもOKを貰ったので、今こうしてこのテーマを語ることが出来るわけです。

でも、なぜそんなテーマを？ といぶかしむ向きもありましょう。それは、現在の大小路マリリンという人間を語るにおいて、「ブルーデー」が占めるウエイトが大きいからに他なりませんし、私という人間を形作る重要なピースに思えてならないからです。で、ある以上、「ブルーデー」を語らないことには、大小路マリリンのエッセイは完成しないとも言えます。

私は、比較的「ブルーデー」に付随する痛みが少ないほうです。

人によつては動きたくない、とか、眠れない、とか、場合によっては立てないほど痛い、という方もいらっしゃるようですが、頭がズキズキ痛み、おへその下あたりの内側が、まるで重石でもかかっているような緩やかな痛みに苛まれる以外の不都合はありません。けれど、やっぱり漠然とした痛みというものは神経を逆撫でするようで、ブルーデー近辺は、本当に神経をすり減らしてしまいます。そして、神経が磨り減っているときに、変なこと、嫌なことがあると、どうしても気が滅入ってしまいます。TVなどという奇妙な世

界と付き合っていると、どうしても変なこと、嫌なことも多いので、毎月、「ブルーデー」の頃は気が滅入ってしまいます。

そして、もう一つ言えるのは、私の「ブルーデー」は、カレンダーに従うように律儀にやってくる、ということです。例の周期は俗に29日とか言うのですが、私の場合、月の中旬初めにやってきて、中ごろには終息するというリズムを刻んでいます。これは、「ブルーデー」と付き合い始めた頃から本当に変わりません。例えば、修学旅行を挟んでも、旅行の類を挟んでも、まるで変化がないのです。直截な物言いをするY子さんには、「まるで、メトロノームみたいね」と半ば感心気味に笑われています。

けれど、この「ブルーデー」は、私に二つの事実を突きつけます。一つ目は、私は女なんだ、という事実です。

どうにも私は女としての自覚がないらしく、有名になる前はジャージにノーメイクで買い物に行ってしまうようなヤツなのですが、けれどそんな私でも「ブルーデー」が近づくと、どうしても私のアイデンティティの一つである“女”という性が、疼いてしまうのです。

そして、二つ目に突きつけられてしまう事実とは、今月も変化がない、という事実なのです。

変化がない、というのは、いいことのように聞こえます。一ヶ月の周期が、何の変化もなく過ぎるというのは、ある意味で完成を意味します。けれど、もし、その“完成”から抜け出したいとしたら？　きっと、変化がないことを恨みに思うことでしょう。

そう、私は変化を望み、そしてその変化が訪れないことに苛立ちを感じているのです。

毎月、私は10日ころになると、今月も「ブルーデー」が来てしまふのだろうか、と身構えて待ち、そして12日頃に「ブルーデー」がやってきて、私に、「私は女なんだ」という事実を再確認させてくれ、「今回も変化が無かった」という残酷な事実をも突きつけてくるのです。そして、数日間のドツシリとした痛みを乗り越え、ま

た次の月に向かって再生する。それが、私にとっての「ブルーデー」
なのです。

父について【1】

秋葉原にかつてあった、交通博物館という博物館をご存知でしょうか。

ご存知でしょうか、と振っておいてなんですが、私だってあまり交通博物館に関して詳しいというわけでもありません。私だって、秋葉原駅近くにあった、ということと、最近、埼玉県さいたま市の鉄道博物館にその展示品が移り、閉館してしまったこと、その2点くらいが、私が持っている交通博物館に関する情報のすべてです。

丁度、昨今の秋葉原ブームによって、交通博物館閉館のニュースがテレビを騒がせたものです。テレビの中では、交通博物館の終焉を惜しむ鉄道ファンたちが、素敵な節のついた歌を合唱していました。それを、ブラウン管の前で見た私は、なんだか心を驚掴みにされたような、妙な閉塞感を覚えたものです。

けれどその感情は、鉄道ファンの皆さんに共感したからではありませんでした。そんな、公共の感情ではなく、むしろ個人的な感情によって私の心は揺さぶられていたのです。

交通博物館には、ちよつとした思い出があるのです。

思い出、と言いましたが、それは楽しい思い出ではありません。交通博物館で大きな背中を追っていた私は、きつと沈んだ顔を周りに見せていたはずです。決して、心が躍ったような記憶はありませんでした。

では、私が交通博物館に持っている感情とは。

それは、深い反感と、淡い後悔なのです。

断っておきますが、この感情は、交通博物館そのものに抱いている感情ではありません。交通博物館というところで感じた思いが、“交通博物館”という字面と映像にこびりついてしまっている、そんなイメージの感情なのです。きつと、交通博物館でなくても、本

当は良いのでしょう。けれど、日々の暮らしの中で、あそこまで印象的だった光景が、他になかったのでしょうか。

私が深く反感を覚え、淡く後悔しているのは、父の人となりと、彼との関わり方についてなのです。

父は、あまり家に居つく人ではありませんでした。

物心ついた頃には、私は親戚の家に住んでいました。当時、母が病気をしていたので、私を育てる手が無かったのでしょうか。そして父は忙しい人でした。新橋の、今でいうベンチャー企業に勤めていた父には休みがないようでした。それこそ、月火水木金金、という言葉を引き出さなくなるくらいに働いていたようです。

それは、私が小学校に上がり預けられていた親戚の家から出て、父と私で暮らすようになってからも変わりませんでした。私が一人夕飯を食べて寝静まったころ父は帰宅し、目覚める前にはもう父は家にいませんでした。親戚の家にいた頃は同世代の子供が同居していましたが、親切的な伯父さん伯母さんのおかげで寂しい思いをすることも無かったのに、そうやって父と二人の暮らしになると、逆に心の真ん中が空疎になっていくかのような思いを感じるようになったのです。そして、時折家にいるときは、昼間から酒ばかり飲んで、とろんとした目で私を見て、目を合わせるとバツが悪そうに目を逸らしました。

こうやって父に関する事実を書き連ねただけでは、もしかすると父と私の関係を理解してもらえないでしょう。これだけでは、父と私の距離感のようなものを、理解していただけないでしょうから、端的に書いてしましましょう。

正直、私と父は、馬が合いませんでした。

“父親と馬が合わない”って、どういうこと？ と訝しく思った方は、温かい家庭に育った方なのでしょう。きっと、そういう人は父親の背中に負われて花火を見た思い出や、一緒にお風呂に入ってキャッキャと騒いだり、男の方だったらキャッチボールと一緒に

したといったような思い出が浮かぶのでしょうか。そして、笑顔で佇む父親の顔が思い浮かぶのでしょうか。

けれど、私にはそれがないのです。

何年も一緒に暮らしたのですから、そういう平和な記憶くらい、一つはあってもいいのではないのでしょうか。でも、私には、そんな思い出、一つとしてないのです。

それどころか、私は、父の顔を正確に思い出すことが出来ません。小学校の１年生から中学３年生まで一緒に暮らしてきたのにも関わらず、父という人間の輪郭を、結局捉えることができなかったのです。だから、私にとって父とは、実家の仏間にかかっている、一幅の写真だけなのです。その写真の父さえ、古い写真のせいもあっておぼろげなのですから、誰かが「あんたの父親って、彫が深かったよねえ」と言われればそれに頷き、「あんたの父親は、能面みたいな顔だったよ」と言われればただ頷くしかないのです。

つまるところ、父と私は血縁があるというただそれだけのゆかりだけで、肝心なところでズレた二人だったのでしょう。歯車がかみ合わない、というより、むしろどちらかが歯車で、どちらかがゼンマイだった、というくらいに、私と父は遠いところに自分の身を置いていたのでしょうか。かみ合う、かみ合わないなんていう理屈が、既にバカバカしいのです。

でも、もしゼンマイと歯車の間を取り持つようなシャフトがあれば、きつとゼンマイと歯車は分かり合えたのでしょうか。けれど、私と父を取り持つシャフトになり得るはずだった母は、その当時闘病していて、私達の間には入ってくれませんでした。

そして、交通博物館に関する思い出というのも、結局のところ、ゼンマイと歯車が分かり合えなかった、ただそれだけの話なのです。

「お前、夏休み、どこに行った？」

「え？ 私？ 父さんの田舎に行ったよ。あなたは？」

「俺？ 俺は、旅行に行ったぞ！」

夏休み明けというのは、どうしてこう自慢話から始まるのだろう、と級友達の自慢話を、私は半ば呆れ気味に聞いていました。

何歳のころの夏休み明けのことか、正確なことは覚えていません。けれど、まだ目線がかなり低かったような気がしますし、それに思いつく出される級友達の顔も非常に幼いものでした。子供というものを慣れしていないからなんとも言えませんが、きっと小学校の3〜4年生くらいのことではなかったかと思います。

夏休みが終わっても、まだ陽気は暑く、いやな気分になりました。まだ、蝉がしつかり鳴いているのに、勉強なんてやだなあ、と憂鬱な気分になられたものです。

けれど、私が憂鬱だったのは、それだけではありませんでした。

「なあ、大小路、お前は夏休み、どこか行ったのかよ？」

そう、私の前で自慢話に花を咲かせていた男の子が、私にそう聞いてきました。男の子の話を訊いていた女の子も、私の顔を覗きこみます。

けれど、私はいつも、こう答えるしかなかったのです。

「……いや、夏休み、どこにも行かなかったんだ」

その受け答えに、あっそ、と、つれない返事を寄越すと、その男の子は夏休みに行ったという伊豆の風土をたどどしく語るのです。私にとって、彼の語る伊豆の風景は、まるで異国のように遠いものに思えて仕方ありませんでした。

夏休みの終わりは、いつも憂鬱でした。

それは、他の級友もそうだったかもしれませんが。でも、他の級友たちが憂鬱なのは、夏休みが終わって、楽しかった日々とお別れしなくてはならないからだったのでしょう。でも、私が夏の終わりに憂鬱を感じていたのは、誰もが持っているはずの、“夏の思い出の欠片”の持ち合わせがないからなのです。そして、みんなはその思い出の欠片を見せ合っているのに、私だけは参加できない、その事実が憂鬱になったのです。

この当時、母は本当に容態が悪かった時期でした。例年なら、お

盆の頃には一時帰宅をしていた母も、この数年だけは家に帰れませんでした。どうやら、この頃の母は、「もしかすると、危ないかもしれない」とまで医者に言われていたそうです。

そして、父も家にいませんでした。

楽しい思い出なんて、私にできようはずも無かったのです。

突然、ガラガラと教室のドアが開きました。いつも、子供にとっては教室のドアというのは突然に開くものなのです。当然、ドアを開いたのは先生でした。

「はい、みんな、席に着く！」

担任の先生は、手に持っていた出席簿と手をぶつけて鳴らし、皆を促しました。すると、級友達は、そそくさと自分の席に戻っていききました。私は最初から自分の席に座っているので、別に何もすることがなく、両手で頬杖をついて、黒板の方をただ見遣っていました。

「はい、みんな、久し振りね」

担任の先生は、そう言いました。その先生は、黒いスーツに黒い髪、黒い目と黒一色の人なのに、塗っている口紅が真っ赤で怖かった記憶があります。そんな彼女が唯一持っている色である赤が、まるで蝶々が舞うかのように動きました。

「長かった夏休みはもう終わりよ。しばらくはしんどいと思うけど、頑張らしよう」

級友達は、ええ〜！ とブーイングを起こしました。それを苦笑いしながら、先生は続けました。

「ええ〜！」　　じゃない！　　……さて、みんな、積もる話もあるだろうけど、とりあえず出してもらおうかな？」

意地悪そうな笑顔を湛えながら、先生は教室を見回しました。

「宿題！　出席番号順に、出しに来て！　ついでに出席も取っちゃうぞ！　……ええと、まずは……秋山君！」

名前を呼ばれた秋山君は立ち上がりました。なんだかヌボーとしていているけれど、優しいと評判の子でした。先生の卓に向かう彼

の手には、国語や算数のドリルやノート類、画用紙の類が乗っかっていました。

卓の上に置かれた宿題を、先生は仕分けしていました。ドリルは此处、ノートはここ……、といった具合に。そして、宿題に漏れがないことを確認すると、先生は秋山君に微笑みかけました。

父について【2】

「はい、秋山君、夏休みは充実してたみたいね」

へへへ、と頭を掻きながら、秋山君は自分の席に戻りました。

そんな感じで、一人ひとりの宿題の提出具合を、出席簿を読み上げながら先生は確認していました。ある子は、宿題に出されていた絵を褒められ、またある子はドリルに書かれた文字がきれいだと褒められました。一方で、どう見ても夏休み最終日に書いたとしか思えないような一行日記を提出した子にはそのことを指摘し、宿題をやってこなかった子にはぴしゃりと叱り飛ばしました。怒られた男の子には、クラスの笑い声が待っていました。

そうして、男の子の名前はみんな呼ばれてしまいました。

「さて、男の子はみんな元気そうだね。じゃあ、次は女の子。じゃあ、大小路さん！」

最初に、私の名前が呼ばれました。

大小路、という名前の頭文字は「お」なので、出席番号は早めになつてしまうのですが、けれど出席番号が一番ということはそうそうありませんでした。普通、前に「青木さん」とか「石田さん」とか、「海野さん」とか「江川さん」とかが控えてくれるおかげで、私はせいぜい出席番号が3番止まりだったのです。けれど、私のいたクラスには、頭文字が“あ行”の苗字なのは、私しかいなかったのです。

「聞こえないの？ 大小路さん？」

「はは、はい！」

あわてて、私は立ち上がりました。クラスのはじっこから、くすくすという笑い声が上がりました。あらかじめ机の上に用意していた宿題を持って、先生の卓の前に立ちました。

「さ、宿題を出して」

先生に促されるがまま、私は卓に宿題を提出しました。それを受

け取った先生は、出された宿題一つ一つにちよつと目を通しつつ、それぞれをえり分けていきました。けれど、そんな先生の単純作業をする手は、あるところで止まりました。

それは、原稿用紙でした。

原稿用紙と私の顔を見合わせ、そして、一つため息をついて、その原稿を卓の上に置きました。

「ねえ、大小路さん」

「なんですか？ 先生」

「どうして」先生は私の目を見つめました。まるで、私の瞳に何かを問うかのように。「作文の宿題に、何も書いてないのかな？」

その先生の言葉に、教室には笑い声が溢れました。

そんな笑い声に負けそうになりながらも、私は先生に言い訳しました。

「だって先生。この作文のテーマが……」

「作文のテーマ？」

「はい、“夏休みにあった、面白かったことを書きなさい”っていうテーマだったと思うんですけど」

「ええ、そうよ」

先生は同意しました。私は、続けました。

「でも、困ったことがあるんです。私、夏休みに面白いことが何一つ無かったんです。この休み中どこにも行かなかったですし、あんまり友達とも遊ばなかったです」

その私の受け答えに、先生は少し狼狽したようでした。ちよつと声を震わせながら、先生は続けました。

「何も無かったの？ 楽しかったこと」

私は、即答しました。

「ありません」

その、あまりに硬質できつぱりとした私の受け答えに、先生は遂に諦めたようでした。先生は原稿用紙を眺めながら、私に言いました。

「まあいいわ。とりあえず、席に戻りなさい。……あ」まるで思い出したように、先生は私が提出した画用紙を取り上げました。「この犬、よく描けているわね」

あ、その画用紙に書いたのは、猫のミャー子なんです、とは言えなくなっていました私は、席に戻りました。そして、私の次に呼ばれた加藤さんが、提出した作文を先生に褒めてもらっているのを聞きながら、私は机に突っ伏しました。

どうやら、加藤さんは、家族で行った旅行を、作文に仕立てたようでした。

夏休み明けは、本当に、嫌いでした。

「ねえ、大小路さん」

職員室に呼ばれた私を待っていたのは、当然担任の先生でした。足を組んで座る先生の前に、私は立たされました。先生の手には、何も書かれていない原稿用紙が握られていました。職員室、というところは、普段用がないこともあり、生徒達にとっては居心地の悪いところの一つですが、私には、言葉を発するのさえ憚られてしまうかのように空気が重かったのを記憶しています。なので、まるで言葉を発することが出来ませんでした。

そんな私に痺れを切らしたのか、先生はため息をつくと言葉を重ねました。

「どうして、宿題を書いてこないの？」

「それは、言っただけです」

ようやく声を出した私に、先生は赤い唇をヒステリックに動かしました。

「楽しいことがない……か……。まったく、近頃の子供はもう……」まるで、お前が悪いとでも言いたげな先生の言葉でしたが、あえて無視しました。先生は続けました。

「本当に、面白かったことはないの？」

「じゃあ先生、私の一行日記を見てください」

私に促されるがまま、先生は私の一行日記を手に取りました。そして、一行一行、目を通していきうようでした。その様子を、まるで他人事のように、私は覗きこんでいました。

先生は、一行日記を読み上げました。

「8月1日、ご飯・味噌汁・目玉焼き 焼きそば ご飯・焼き魚・おひたし。8月2日、ご飯・味噌汁・鮭 インスタントラーメン カレーライス。8月3日、ご飯・スクランブルエッグ チャーハン カレーうどん。……何、これ？」

「私が作ったご飯です」

私は、なんの抑揚も込めずに答えました。

当時、私の家に母はいませんでした。かといって、料理を作るような父ではありませんでした。なので、私が料理をやっていたのです。けれど、料理というのは手際が命なのにも関わらず、当時の私にはまだ手際などという物は身についていませんでした。なので、朝ごはんを夜のうちに作っておき、それを朝に食べると昼ごはんの仕度にかかり、ようやく出来た昼ご飯を食べ終わったら洗濯や買い物などを済まし、そして夕飯の仕度をし、夕飯を食べるという生活をしていました。その間、友達と遊ぶ暇どころか、自由になる時間さえありませんでした。よって、料理のメニューを示せばあとは芋判で押したように同じ日々だったので、私の一行日記は食べたご飯を示すだけでその日を示す一行日記足りえるのでした。

「ふん、毎日、ご飯を作ってたわけだ」

先生は、呆れたようにため息をつきました。私が頷くと、先生は続けました。

「でもさあ、料理だって楽しくない？ 先生も時折料理をやるけど、けっこう楽しいものじゃない」

先生のその言葉には、二重の間違いがあります。

第一に、時折しか料理をやらない人間にとって楽しいことでも、毎日やっている人間にとっては苦行になりうるということに気づいていない、という間違い。

そして、——こちらの方がむしろ大事なのですが——自分のために作られるご飯のための料理など、ただの生命維持の行動でしかないという事実に気づいていないというのが、大きな間違いなのです。一日のほぼ全てを用いて作る、自分のためだけの料理。“ただ生きている” 感覚を味わう行動は他にありません。その時に感じる、心の空白の深さを、先生は知らないのです。

けれど、当時の私はその思いを言葉にするだけの力はありませんでした。私の心の奥底には、確かに空白があるのです。けれど、それに皆が分かる理屈を与え、伝えることが、出来なかったのです。なので、私はこう言うしかなかったのです。

「おもしろくないです」

強ばりをもった言葉でしか、私は己の感情を示せなかったのです。その言葉に、先生は幾度目かのため息をついたあと、言いました。「まあ、いいわ。人それぞれだものね。でも、皆が宿題をしているのに、あなただけがやらないのは不公平でしょう？」

不公平？ 私は耳を疑いました。不公平なのは、“皆が書いている宿題の作文を書いてこないこと” なの？ それじゃあ、“夏休み友達と遊びたいのを我慢して、家で一人、自分のために料理を作らざるをえない私”の方が、同世代の皆と比べてはるかに不公平なんじゃないの？

けれど、その言葉も口から出ませんでした。

私が納得したと見たのか、先生は締め言葉を發しました。

「この際、夏休みのことじゃなくてもいいわ。でも、“楽しかったこと” っていうテーマは外さないようにね」

そう言って、先生は私に原稿用紙をつき返してきました。そして、行ってよし、とばかりに視線をドアに促しました。私はそれに従い、なにやら重苦しい空気の職員室をあとにしました。

廊下に出た私は、手に持たされた原稿用紙を持て余していました。何を、書けばいいのだろう。

先生は、“楽しかったこと” をテーマにしろと言う。

でも。

これから、楽しいことなんて、あるんだろうか。

職員室の前でため息をつくとき、原稿用紙を二つ折りにしました。

正直、原稿用紙の升目を見なくなかったのです。実のところ、その升目を埋めるために何かが足りない、という事実を、受け入れられなかったのかもしれませんが。

父について【3】

家に帰っても、升目は埋まりませんでした。

それはそうです。家に帰っても、私を待っているのは日々の仕事なのです。同年代の子供だったら決してやらなくてもいいような、掃除や洗濯、お料理が私を待っているのです。その仕事に忙殺され、そして普通の宿題を終えたころにはもうクタクタで、楽しいことを考える余裕なんてありませんでした。

誰もいない家の居間で、原稿用紙をのせたちゃぶ台の前で、私はため息をついてしまいました。けれど、ため息をついたところで、升目が埋まるはずもないのです。

結局、その日は作文を書くのを諦め、ちゃぶ台の上を片付けると、父のために作った食事を載せました。きっと、父が帰るころには冷めてしまうでしょうが、そんなことはどうでもいいのです。ただ、「父のために料理を作った」という事実があれば、それでよかったのです。父が、そのご飯を食べようが食べまいが、そんなことはどうでもいいのです。

疲れてしまった私は、寝室に入ると布団を被ってしまいました。

朝、目が覚めると、ちゃぶ台の上にはまったく手の付けられていない夕飯が残されていました。

いつものことなので、あまり気にはしていませんでした。父という人は、そういう人でした。ため息をついてから、とりあえず片付けるか、とばかりにちゃぶ台の上の皿を手に取ったとき、私はあることに気づきました。

普段ない、書置きがあるのです。

急いで書いたようで、筆跡は安定していませんでした。けれど、それもいつものことです。今にして思えば、父は行き急いでいたよ

うにも思えます。それは、自分の行く先の奥行きを悟っていたからなのか、それとも別の理由なのかは、もはや永遠にはわからないわけですが。

父の置手紙には、こう書かれていました。

“ 今度の日曜・午前10時に秋葉原に来るように。 父 ”

ただ、これだけでした。

用件だけを告げ、その理由を示してくれない。しかも、こちらの用事なんてまるで意に介さない。何度だって書きますが、父はそういう人だったのです。

けれど、その父に反発するだけの力も気力も無かった私は、日曜日、秋葉原に出ることにしたのです。私も、父に負けないくらい事務的な返事を紙切れに書き上げ、その日の夕飯に添えました。

けれど、書置きのやりとりはその時だけで、あとはすれ違いでした。なので、結局秋葉原に私を呼び出して何をするつもりなのかを、父から聞き出すことが出来ませんでした。

そんなこんなの中に、日曜日がやってきてしまいました。

私の実家は新宿まで一時間ほどかかるのですが、朝10時に秋葉原に出るとなると、かなり慌ただしい朝になることは容易に想像が出来ました。ウィークデーとほとんど変わらない時間に起き、眠い目をこすりながら朝ごはんを食べ、そして胡乱に歯を磨いて服を着ました。そして、財布をジーンズのポケットに突っ込み、家のドアの鍵を閉めました。

そして、最寄り駅で電車を待ち、足早にやってきた電車に乗り込むと、その車内には、どこかに遊びに行こうとしている家族連れの姿がありました。父親の腕を掴んで、母親に笑いかける同年代の子供。普通だったら知ることが出来たはずの、幸せな家族の形。特に感動はありませんでしたが、心の一番奥がささくれ立つような、変な感情に蝕まれていくのを感じていました。けれど、ありがたかったことに、その家族連れは途中の駅で降りてしまいました。

休日の電車というのは不思議なもので、都会に進めば進むほど人が閑散としていきました。私が子供だった頃は、休日出勤なんて少数でしたから、それは当然だったのかもしれませんが。座席に座りながら、どんどん閑散としていく車内を眺めていた私は、いつか私が一人になつてしまうのではないか、という恐怖が迫ってきました。窓から差し込む、柔らかい光も私を不安にしました。私以外のすべてをばかしてしまうんじゃないか、というくらいに、輪郭をばかしてしまうほどに柔らかな光が、あまりに優しげでした。

途中電車を乗り換え、そして電車に揺られること1時間と半。ようやく、秋葉原の駅に着きました。

今でこそ“萌えの街”とか言われる秋葉原ですが、当時は“電機の街”と表現すべき街でした。今でもありますが、素人さんには絶対に分からない機械の部品を売る店や、ジャンクを売る店などが肩をぶつけ合うように林立し、さながら異国のバザールのようになっている街でした。“萌えの街”にしろそうでしょうが、“電機の街”に用があるのは、常にその道の玄人なのです。なので、駅を降り立った私の横を、サラリーマンとは違う雰囲気の男の人たちがすり抜けていきました。その人たちは私をあからさまに睨みつけ、邪魔だ、と言わんばかりに舌打ちをして、私の脇をすり抜けていき、秋葉原の街に消えていきました。

その異国のバザールをすり抜け、父はやってきました。

暑い日だったというのにねずみ色のスーツを几帳面にまとい、赤いネクタイを締めていました。左手には、安そうな時計を巻き、これまた貧相な鞆を持っていました。目深に安物の帽子を被っていました。その帽子の下には、分厚いメガネがありました。そして、さらにその下には、疲れた男の人の顔がありました。

正直、父とは思えませんでした。

ただ、家を共有しているだけの男の人。それが、私にとっての父だったのですから。

そうやってバリアを張って立ち尽くす私に、父は一言言いました。

「暑いな。今日は」

いきなり、時候の挨拶です。呆れながらも、そうね、と合いの手を打つと、父は満足そうに頷きました。そして、左手に巻いている時計に目をやりながら、続けました。

「さて、時間がない。行くぞ」

言いたいことを言って、父は踵を返してしまいました。

父は、歩き出してしまいました。

けれど、文句も言えず、私は父のあとを追いました。よりにもよって、電機の街のバザールに、父は足を向けました。そんな雑踏の少し前を、少し肩をいからせながら歩く父。まるで、大海に漕ぎだす小船のような父の背中を眺めつつ、私はそのあとを必死で追いました。どんなに必死で追っても、父には追いつけませんでした。それに、父は私のために立ち止まってくれるようなこともありませんでした。ただ、淡々と歩を進める父の背中に、怒りさえ覚えました。そうして、秋葉原の街をすり抜けていくうち、やがて雑踏の密度が少し低くなりました。

そこは、秋葉原とは、異質な光景でした。

煉瓦造りの、細長い建物。まるで、明治時代の駅舎をそのまま持ってきたかのような、赤い建物でした。その建物は、線路に面していて、駅舎というイメージの醸成を、さらに手伝っていました。

父は、遅れてついてくる私のほうに振り返りました。まるで、私の事を急かすように。そして私かというと、やはり急かされるようにして父に迫ったのです。

そして、私が父に追いつくと、突然父はこう言いました。

「さ、入るぞ」

入る？ どこに？ それが、私の最初の疑問でした。何がなんだかよく分かっている私には、おたおたとするしかありませんでした。けれど、クスリとも笑わず、父は続けました。

「決まっているじゃないか。この建物の中だ」

そう言って、父はその煉瓦造りの建物を指しました。見るからに

古く、ボロボロだった上に、なんだか“関係者以外立ち入り禁止”と札がかかっていそうなくらいに厳かな建物だったので、“ここに入る”という父の言葉が信じられなかったのです。

けれど、そんな私のことなど眼中にないように、父は歩を建物の方に向けました。時折、時計を気にしながら、時折、ハンカチで汗を拭きながら。

父は建物に入る前、受付と思われる窓口に立ち、何事かを言ってお金を出し、短冊形の紙を二枚受け取りました。そして、少し離れてその様子を眺めていた私に、その短冊を手渡しました。その短冊には、「交通博物館」と書かれていました。

「失くすなよ。入場券だからな」

やはり、私の手を握るようなことはせず、父は足を先に進めてしまいました。まったく土地勘の無いところで、唯一の知り合いが父である、という状況では、父についていくのが唯一の選択肢なのです。私は、父の背中を追いました。

半券を切ってもらい、建物の中に入ると、そこは別世界でした。

煉瓦造りの建物は、内側からでもそうでした。けれど、その意外な広さに、まずは圧倒されました。そして、その建物の中に、所狭しと並ぶ、機関車やバイク、飛行機たちが、小さな私を見下ろしていました。

父も、その光景に圧倒されたようでした。まるで来場者を押しつぶそうと様子を窺うかのように佇む機関車に、ちよっと驚いているようでした。

「どうだ？」

突然、父は私に声をかけてきました。けれど、答えることができませんでした。場をもたすように、父はさらに言葉を重ねました。

「あの機関車、懐かしいな」

そう言っ、父は展示されている、黒いボディの機関車を指しました。

「もつ、お前は知らないよな。昔は、ああいうのが電車の代わりだ

「ったんだ」

正直、父が二の言葉を継いだのを見たのは、その時が初めてでした。いいえ。もっと端的に言ってしまうでしょう。父が、二の言葉を継いだのを聞いたのは、これが最初で最後でした。彼はいつも一言で言葉を終わらせる人でし、そもそも会話というものを彼と満足にした事が無かったです。

父について【4】

父は、さらに続けました。

「あの機関車はな、母さんとの新婚旅行のときに乗ったんだ」

別に、何の感慨も持てませんでした。子供である私にとつて、そんなこと、どうでもいいのです。それに、父のハネムーンなんて、月の裏側がどうなっているか、位にどうでもいい話でした。

けれど、父は顔色一つ変えずに、続けました。

「あの頃は、まだ父さんは働いていなくてな、母さんに食わせてもらっていた。だから、あの新婚旅行の資金も、母さんが出してくれたな。でも、あんまり遠出つてわけにもいなくて、結局近場の避暑地に遊びに行ったんだ」

「なんで」私は訊きました。「なんで、父さんは働いていなかったの？」

その質問は、父を困らせる意図で発されたものでした。けれど、父はそんな私の意図を汲んではくれませんでした。非常に真っ直ぐ、けれど控えめに、父は答えました。

「うん、そうだな。父さんには、夢があつたから。父さん、弁護士、つていう仕事があったんだ。でも、そのためには勉強して、テストでいい点を取らなくちゃならなかった。でも、父さん、いつまで経ってもダメだったんだ」

「だから、諦めたの？」

その言葉に、私は棘を込めました。けれど、父は遠い目をして機関車を眺めつつ、続けました。

「諦め、うん、そうだな。他人から見れば、そう映るんだろう。でも、父さんは別の意味で捉えている」

「どういう意味？」

「方向転換。それだけだ」

「でも、諦めて、方向転換したんでしょ？」

今にして思うと、この質問はさすがに棘が強すぎました。事実父は、まるでバラの棘に思わず触れてしまったようなしかめ面をしましたが、その表情を隅に追いやって、続けました。

「そうかもしれないな」

それっきり、父は口を噤んでしまいました。そう、私は、父が語るはずだった言葉たちを、封殺してしまったのです。

そのあとは、ただの空白でした。

父と私は一言も言葉を交わさず、展示品を一点一点眺めては足を進めました。それは、眠っている縁者がいない霊園をすり抜ける感じに似ていました。眠っているものたちを起こさないように、密やかに歩を進め、そして何の感慨も抱かないうちに次に目をやる作業が、きつと霊園を連想させたのでしょう。

そうして、本来は様々な思い出がこびりついて、見るものに己のストーリーを語りだすはずだった機関車や飛行機などの展示品は、私に何も語ってくれないまま、ついに全ての展示物を見てしまいました。

博物館から出た私達は、やはり無言でした。外は、まだ夏の色が残る、秋葉原の喧騒でした。

そんな中で腕時計を見た父は、突然言いました。

「スマン、仕事だ」

そう言って、父は財布を取り出すと、決して少なくはないお金を私に手渡しました。

「これで、昼ごはんでも食べてくれ」

そう言ったが早いのか、父は駆け出してしまいました。父の体は、秋葉原の人の波に消えていきました。そして遂には、姿が見えなくなっていました。

手に残るお金を眺めつつ、“今日の出来事は、作文に書けないや”と心の中で呟く私がいきました。そしてその時、その日のお出かけに多少なりとも期待していたという事実、ようやく気づいたのでした。

私にとって、交通博物館の思い出とは、これ程度のものです。子供の頃に過ごした家庭の、ちぐはぐさを浮き彫りにするような、そついう出来事でしかありませんでした。

その後、母の病気は次第に回復してきました。

それは、別に母の生命力が強かった、とか、そついう話ではありません。ただ、海の向こうの医療先進国で、母の心臓病に有効な新薬が開発されたから、というきわめてケミカルな理由でしかありません。やがて回復した母は、「薬の所持」を条件に、退院する事が出来たのです。それは確か、私が中学校の2年のころだったように思います。

そして、そんな矢先に、父は死にました。

元々、過労だったようでした。それに、母が回復したことで、“荷”が下りてしまったのかもしれませんが。荷と一緒に、己の魂をも体から下ろしてしまつたかのようなタイミングでした。

父が倒れた、という報を聞いたとき、私は何も感じませんでした。確か、家に帰つたときに、母が血相を変えていたのを見つけ、母に何があつたのか訊いたのです。すると彼女は、父が倒れたという事実を、狼狽しながら語つたのです。

そして、母は、

「父さん、本当にヤバイらしいんだ」

と、あの人らしからぬことを言うのです。母という人は、どうもポジティブなところがあつて、どこか達観した考えの人でした。けれど、そんな母をして「ヤバイ」ということは、本当に父は瀬戸際にいるのだらう、と、ぼんやりと思つたのでした。

そして、母は続けました。

「お前を待つていたんだ。今すぐ、病院に行こう」

けれど、私はそれを拒絶しました。首をブンブン振って、拒絶の意思を示しました。すると母は、目を細め、私の顔を覗きこみまし

た。非難している風ではありませんでした。まるで、枯れ行く花を惜しむような、そんな表情でした。

「そうかい」

母は、短くそう言うと、家から飛び出て行ってしまいました。

どうやら、母も間に合わなかったようでした。自分勝手だった父は、最後まで自分の流儀を全うしたのです。きっと、私を待っていないければ、母は父の死に目に会えたはずでした。母は、本当に父の事が好きな人でしたから、きっと今でも死に目に会えなかったことを後悔しているでしょう。そのことに思いを致すと、どうしても母に負い目を感じずにいられません。私のせいで、父の死に目に会わせることができなくて、ごめんね、と。

けれど、――これは、未だにそうですが、私にとっては、父の死に目に会えなかった、という事実は、ただの事実でしかありませんでした。私の心に、いかなるさざなみをも立てずに、心の澱に加わっていく出来事ではありません。あの時父と見た、機関車やバイク、飛行機たちのように、父という人物は、言葉を語らないまま、私の心の奥で消えていくことになったのです。いいえ、もしかすると、父は必死で何かを伝えようとしていたのかもしれませんが。けれど、その父の言葉を、私がただ聞かなかったただけなのかもしれません。

けれど、私は最近、ふと疑問に思うのです。

なぜ、あのとき父は、私を交通博物館などに誘ったのだらうと。

私は女です。今はジェンダー問題がうるさいのでアレですが、当時は確かに「男」「女」というのが、明確に区切られていたように感じます。それに、私の父と母は昔の教育を受けたクチですから、もしかすると同年代の人たちよりもはるかに強くジェンダー教育を受けていたのかもしれませんが。なのに、その父が、「女」である私を、「男」の子が喜びそうな交通博物館に誘うなんて、違和感があるのです。

その疑問を母にぶつけてみると、母は笑いました。

「あの人は、男兄弟の中で育った人だから、きっと女の子の喜びそうなところが分からなかったんだよ。それに、あの当時父さんは、新橋の会社に通っていたからね。きっと、近場だった、っていうのもあるんだろうけどね」

なるほど。合点した私は、さらに母に疑問をぶつけてみました。

「どうして、父さんはそうまでして私を連れ出したのかしら」

すると、母は顔をしかめました。その見事なしかめっぷりに、怒られるのではないかと本気で思ったものです。けれど、その表情を収め、母は答えました。

「そんなの、知らないよ」

「え？」

「だってそうだろう？」母は笑いました。「私は父さんじゃないんだ。父さんの気持ちなんて、知った事ではないよ」

「でも、母さんなら類推できるでしょ？」

「ああ、そうだね。類推は出来る。だがね」母はため息をついて続けた。「それはあくまで私の類推でしかない。あの人が感じて、あの人が行動した。それは確かでも、その意味はとうの昔に失われているんだ。何故なら、行動の意味というのは、その行動の主体者にしか理解できないし、意味を持たないものだからね」

「よく分からないけど」

「つまりはだ」母はきっぱりと言いました。「私が父さんの気持ちを類推したって、それは父さんの気持ちそのままではないんだよ。

どうしても知りたいんだったら、自分でその意味を考えることだね」

「自分で？」

「そう。結局、物事に意味を与えるのは、常に自分なのさ」

結局、母はそう言ったきり、話を切ってしまいました。

私には、未だに父の行動の意味がわかりません。

きつと、父と私の間には、分かり合えなかったものがあまりに多

すぎたのでしょう。きっと、父も母もない家で一人眠る娘の気持ちを、父は知らずに逝ったはずです。それと同じくらい、妻が難病にかかり、幼子がいる中で家族を守らねばならなかった父の気持ちを、娘は知らないはずです。

分かり合いたかった、とは思いません。そういう類の感傷は、多少なりとも心を通じたもの同志が感じるものなのでしょう。きっと、私達には感傷を覚えるだけの交流さえ持ち得なかったのです。

けれど、時折、こう思うのです。

もし、父がもう少し長生きしてくれたなら、もしかして、感傷くらは抱けたのではないか、と。きっと、私と父の間には、とにかく時間が無かったのです。

そう、私は、父の行動の意味を探しているのです。まるで、交通博物館で父の背中を追ったときのように、私は父の行動の意味を追っているのです。

そして、私は、心の中にある、本来だったら「父」というものが占めるはずだった空白に、感傷を埋め尽くしたいのです。

“料理”について

さて、ついに大小路マリリンのエッセイも、最終章に参りました。そのタイトルはズバリ、「料理」について」。私にとって、料理とは。そういうお話です。

本題に入ってしましましょう。私にとって料理とは、“家族を縛るもの”です。

よく、「同じカマの飯を食う」という言い回しがありますが、私にとって料理というのは、まさにそれなのです。いいえ、こう言うのと、ちょっと語弊があるのかも知れませんが。だって、「同じカマの飯を食う」というのは、“食べる側”の言い回しです。つまり、「同じカマの飯を食」べて感じる思いというのは、料理を作る人間である私の気持ちとは若干ずれたものであるうと想像されます。

では、私にとって料理とは？

きつと、私にとって、二つの意味があるように感じます。

一つ目は、家族を繋ぎ止めておくもの、という意味付けです。

“同じカマの飯を食うのが家族”なら、つまりは同じ料理を食べる以上は家族なのです。たとえ、どんなに心が離れていても、家族なのでしょう。

いえ、別に夫に不満があるわけでも、不安があるわけでもありません。しかし、それでも何とない不安というものがあるようです。それはきつと、人と違う形でしか親と向き合えなかった経験が私の背中に不安を乗せてかかるのでしょう。

そんな私にとって、料理とは私の存在理由なのでしょう。そういう風にして、家族と向き合う道を選んだのかも知れません。冒頭に、「暇だから料理に手を掛けるようになった」と書きましたが、それはもしかすると言いつのうなものなのかもしれません。

そして、二つ目は。料理を作るということが、私の代償行為なのでしょう。

私には、子供がいません。それは、事実としてそうなので、そう書くしかありません。きつと、私にとって子供がいらないという事実は、私自身を蝕んでいるでしょう。もちろん、人によっては子供なんていなくても、とおっしゃる方もいらっしゃる事だと思います。けれど、私には、子供がいらないということは肩にかかる重石のように、私を苦しめるのです。

そんな私が料理のレシピを作るのは、子供を育てるという行為の代償なのではないか、と思えてならないのです。

そう考えれば、どうして今までレシピを作り続けたのか、説明がつきます。

きつと私は、子供を育てるために用意された力を、すべてレシピの制作に振り分けているのです。そうして、自分で納得して、その日その日を生きているのでしょう。

では、もし、私に子供が出来たら。

もしかしたら、私はレシピを作るのを辞めてしまいかもしれません。本来子供のために振り分けるべき力だったものを、元のところに戻すだけなのですから。きつと、ためらいは無いでしょう。私は、そういう風に出来ているのですから。

私にとって料理とは。

それは、限りなく大事なものであると同時に、限りなくどうでもいいことなのかもしれません。

あとがき「変わったこと、変わらなかったこと」

どうも。大小路マリリンです。お久しぶりです。

と、言っても、この本をここまで読み進んでくれた方には、「お久しぶり」の理由がわからないでしょう。なんでこんな挨拶か、と申しますと、このあとがき、かなり時間を置いて書かれたものだからです。

それも、担当の新藤さんの意見です。

「時間を置いてあとがきを書かれたほうが、あとがきとして味が出ますよ」

今までのことから考えて、新藤さんの意見は参考にした方がいいと思います、約一ヶ月ぶりにペンを握りました。

さて、この一ヶ月のうちに、私の周囲は微妙に変わり始めています。

例えば、新たにレギュラー番組が加わりました。朝のワイドショー、と銘打たれたニュース番組のコメンテーターです。とにかく、頑張らなくてはならないと思います。

最近、「ブルーデー」が乱れがちです。疲れているのでしょうか。私の友人、崎原マリリンさんが（別名ではありますが）脚本家デビューしました。その知らせを受け、彼女の劇を見に行きました。100人も収容できないような小さな劇場での劇でしたが、彼女らしい、スカッとしたドタバタラブコメでした。劇が終わってから出待ちをしている彼女は、本当に微笑んでいました。きっと、あれが彼女の本当の笑顔だったのでしょう。

あと、働いていたところお世話になった、下水課の課長さんが定年になりました。久しぶりにお会いしたのですが、まるで新種の深海魚のようなギョロ目ぶりは健在でした。そして、「ようやく定年だ」と、いかにもつまらなそうに口にしていました。そして、相変わらずの皮肉屋ぶりでした。「でも、俺が引退すりゃ、お前の旦那も芋

づる式に出世だからな。良かったじゃないか」

そして、変わらぬことがあります。

夫は、今まで通り優しい人です。

母は、元気です。

そして私は、変わらずレシピを書いています。

けれど、そういう日々こそ、私にとっては代えがたいものなのだと思います。

最後になりますが、この本は、決して私一人の力で出来たものではありません。

担当の新藤さん。この本を企画してくださった出版社の皆様。この本を形にしてくださった印刷会社の皆様。そして、この本を売ってくれた本屋の皆様。それらの方々の手を経て、この本を手にとってくれた皆様。その皆様に、切に御礼を申し上げます。

そして、――これは個人的な言葉ですが――、私を醸成してくれた全ての人たちに、「感謝」なんて言葉で語れないほどのキモチでいっぱいです。

――両手いっぱいの愛情とレシピをあなたに――

大小路 マリリン

文庫版あとがき「さらに変わったこと」

本当に、時が経つのは早いものです。

このエッセイ、「お料理の合間に」を脱稿して、もう2年が経ちます。今、自分の書いたものを手に取ってみると、「何偉そうなことを言ってるんだ」とか、「何初々しいことを書いてるんだ」と斜に構えたくなります。正直、恥以外の何者でもありません。

正直、エッセイとしては中途半端ですし、そもそも文章力の問題で見苦しい部分も多かろうと思います。

けれど、こうして文庫化できたことは、やはり僥倖なことです。まず、文庫化の御礼を、お世話になった皆々様に申し上げます。

2年。ただか2年でした。けれど、この2年ほど、周囲が様変わりした時期はありませんでした。

端的に言ってしまうと、私達夫婦に、子供が出来たのです。

これは、TVをご覧の方々ならばあるいはご存知の事なのかもしれません。出産のために、私はTV・ラジオの仕事を全てキャンセルしました。その頃、私はテレビの番組レギュラーを10本以上持つていましたから、本当に、様々な方面の方々にご迷惑をおかけしました。

けれど、正直このとき、私は、「もう、引退してもいいかな」とも思っていたのです。それは、TVなどの芸能活動のみならず、レシピ集の出版やブログの更新など、お料理研究家としての活動さえも含む、「引退」でした。私は、普通の主婦に戻りたかったのかもしれないし、あるいは普通の母親になりたかったのかもしれない。

けれど、いざ子供が産まれてみると、「引退」という言葉が、嫌に私の心を締め付けました。

その理由を、ずっと考え続けました。

そして、行き着いた答えが、「私がお料理をするのは、決して子供が出来なかった代償行為ではなかったからではないのか」という、シンプルな答えでした。

けれど、いざ「私が料理をする理由」なんて、まるで思いつかないのです。

作りたいと願う衝動。

それが、私を突き動かすのです。

そして、私は知りたいのです。

この衝動が、どういう類の感情なのか。

だから、私はもう少し、その理由を探してみようと思うのです。だから、これからも私はレシピを作り、料理を作り、ブログを更新し、TVに出演し、ラジオで喋るのです。そういう活動によって、私が初めから持ち合わせていなかったものを、取り戻せるような気がするのです。

あるいは、私の探し物は、私の家庭にこそあるのかもしれない。夫と子供が待っている家庭に。でも、それだけでは、分からない事がありそうなのです。

私の最後の探し物。

父の背中。そして、父の思い。

これを書いている今、ようやく自分は、「父」という人物を感傷と共に語れるのだ、という嬉しさと、居心地の悪い思いに襲われています。そして、これは子供のおかげなのだろう、と思えてなりません。

私は今、探しているのです。

子供の頃、見つけれなかった探しものを。

だから、私はずっと作り続けるのです。涯のない、あの背中に追いつきたくて。

―― 両手いっぱい愛情とレシピをあなたに ―

大小路 マリリン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2834f/>

大嘘エッセイ「お料理の合間に」

2010年10月8日15時56分発行